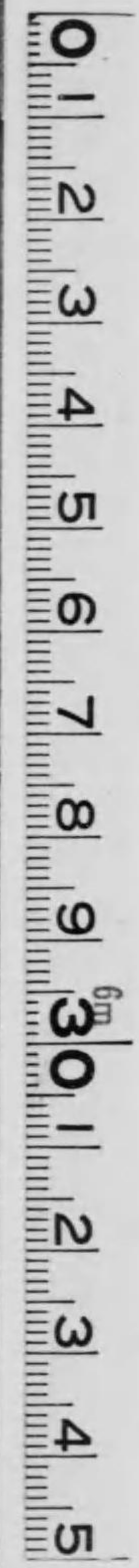


花道全書 上卷

11
3
489



始





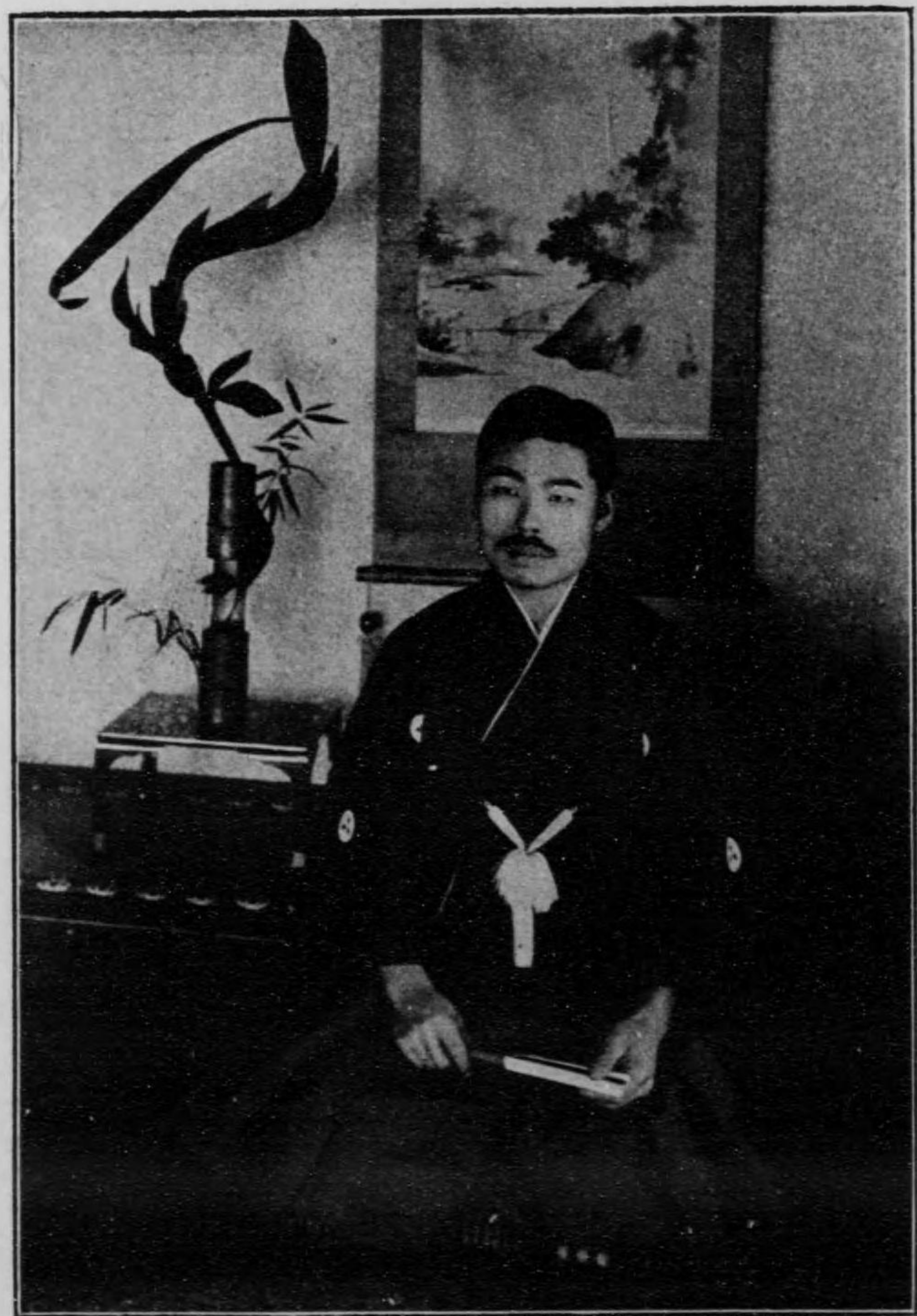
錦鷄間祇候
正四位勳三等

櫻井勉閣下序
春秋庵薰甫著

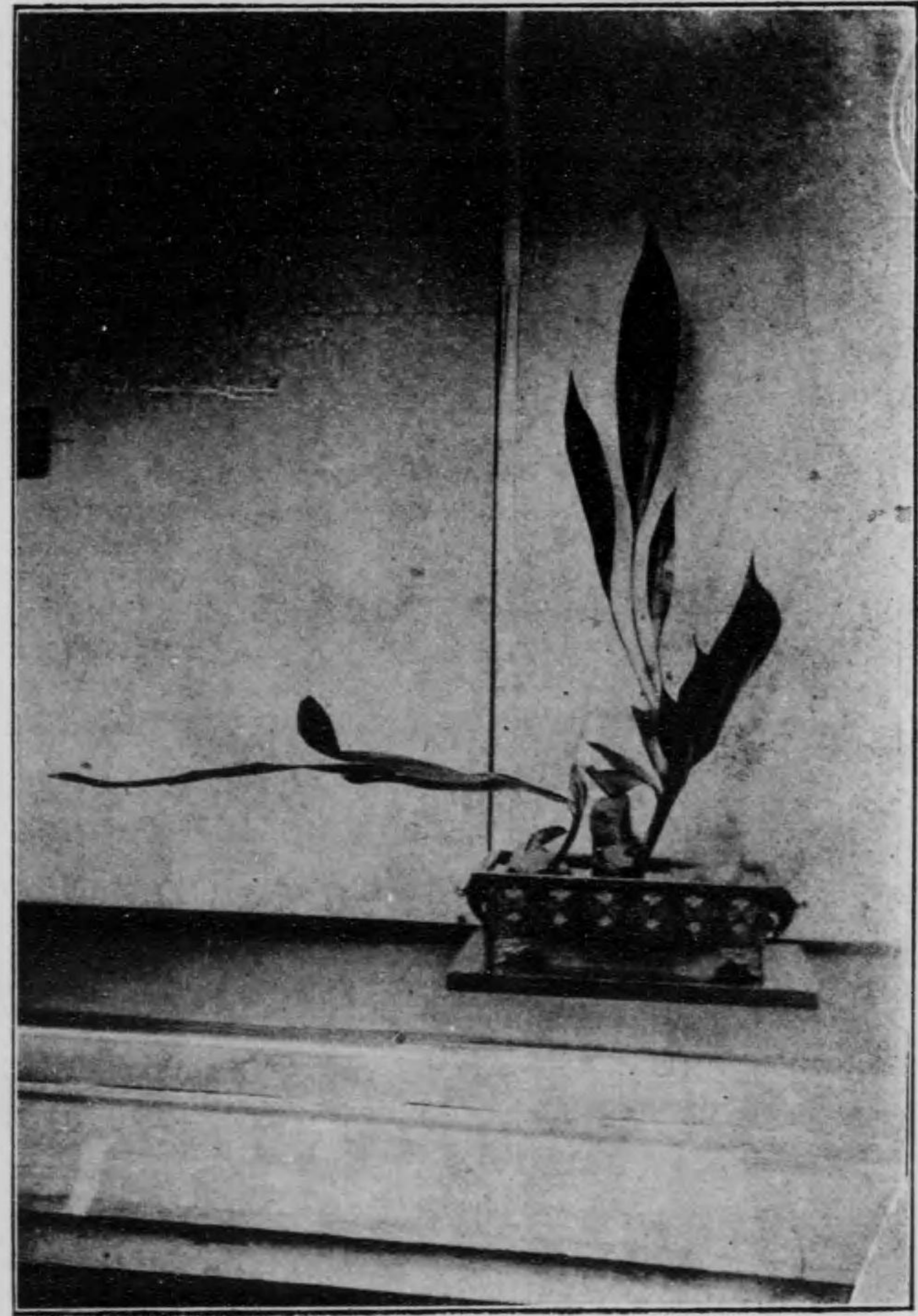
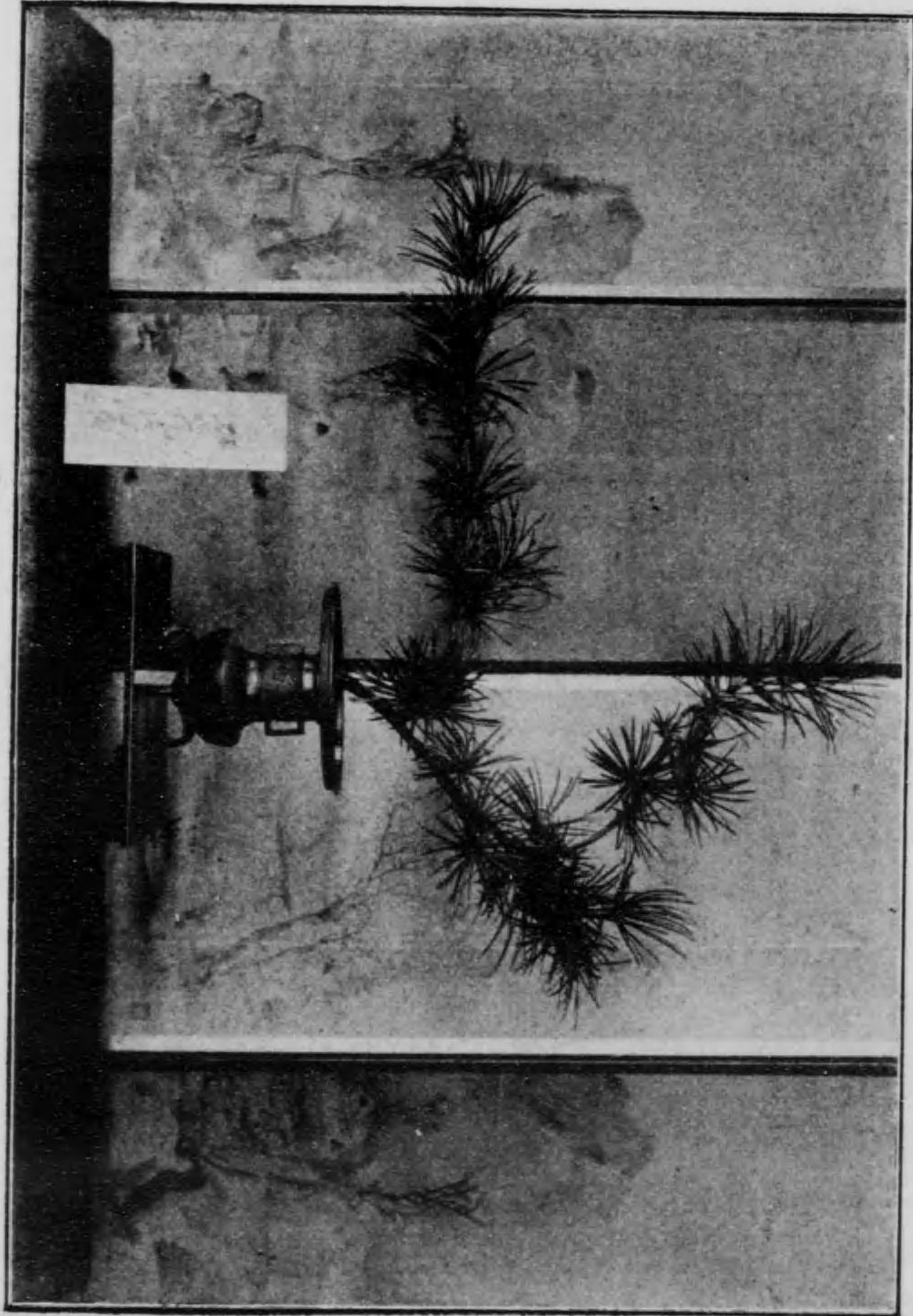
花道全書

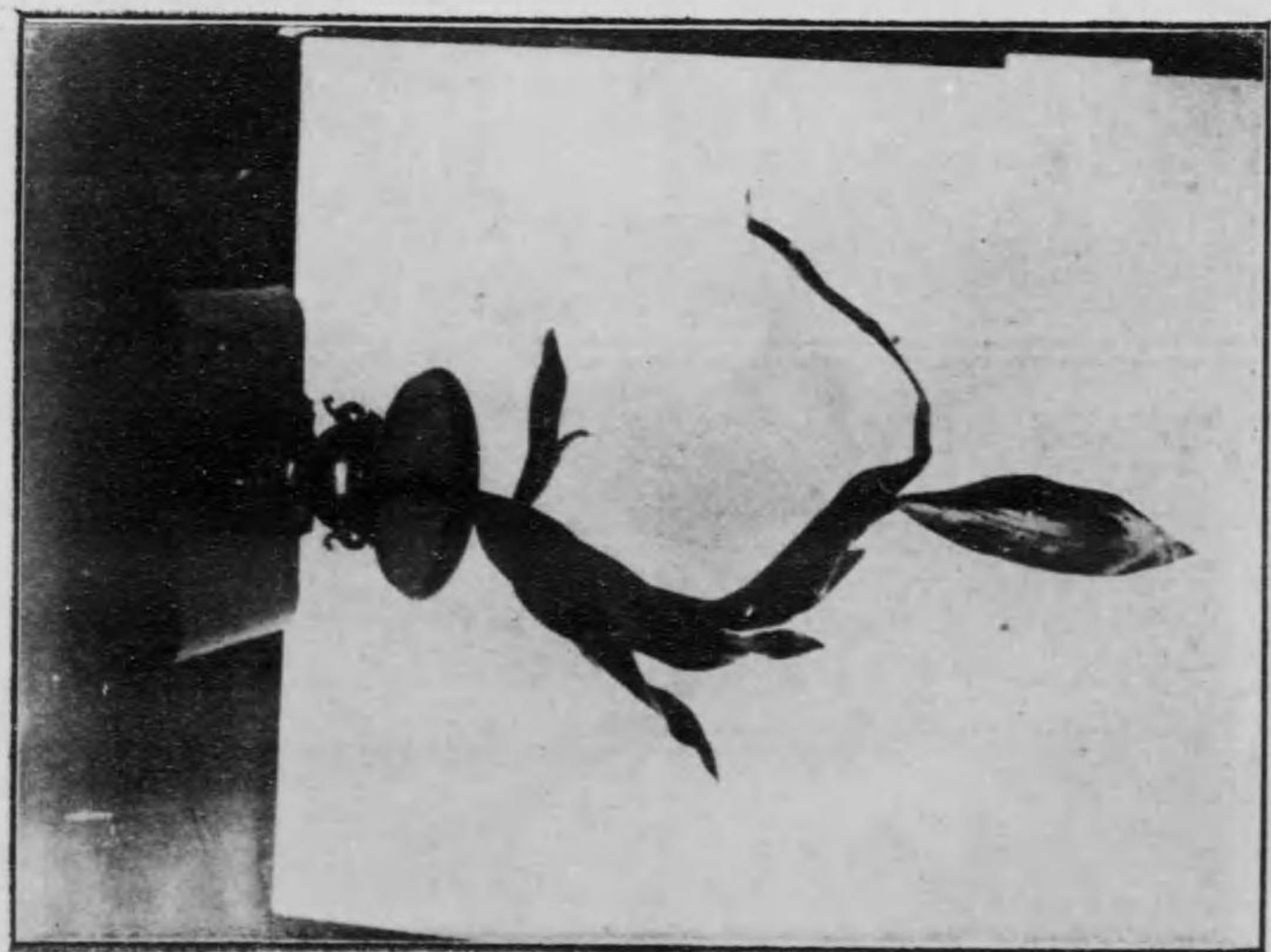
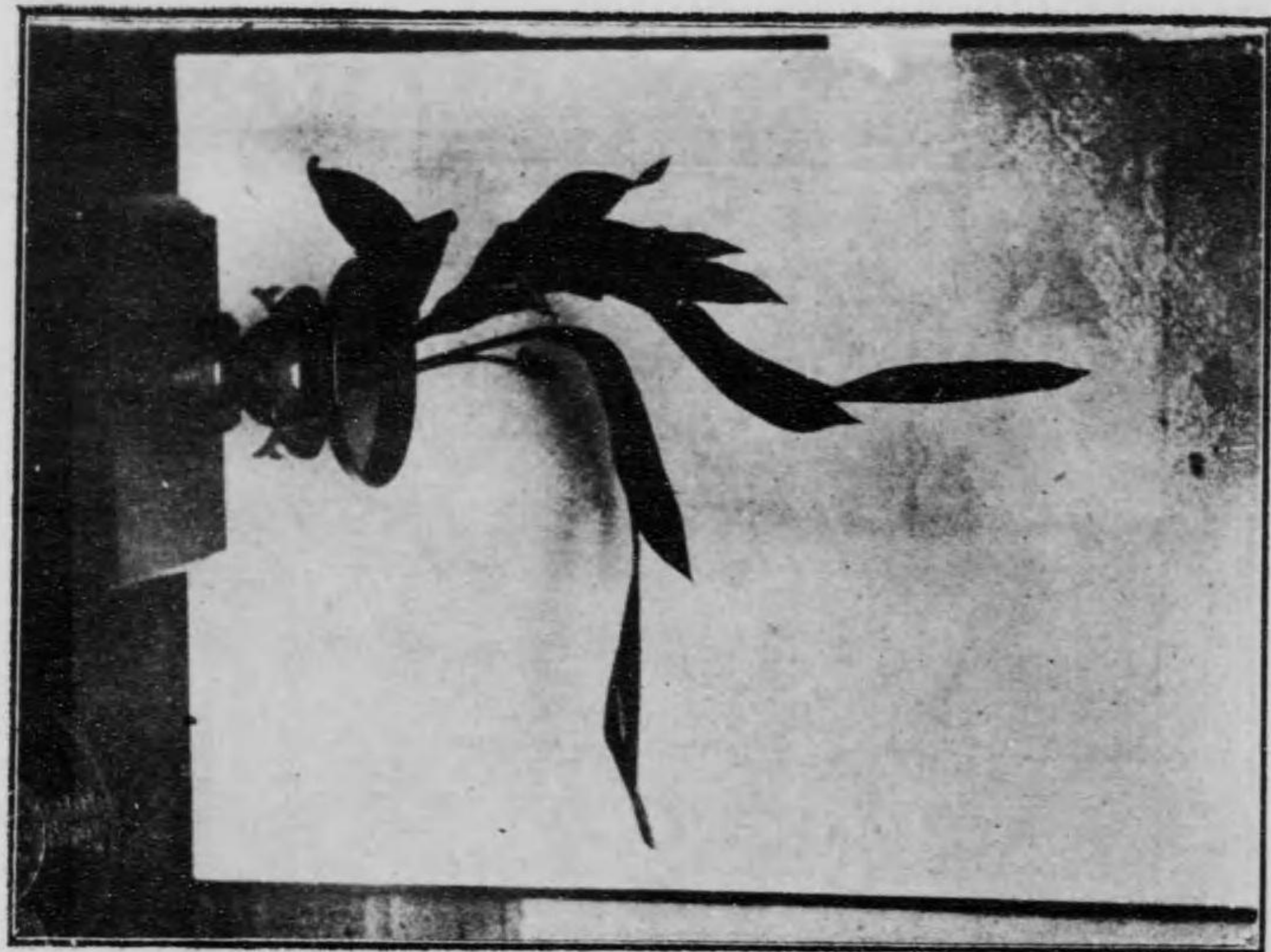
駿之堂藏版

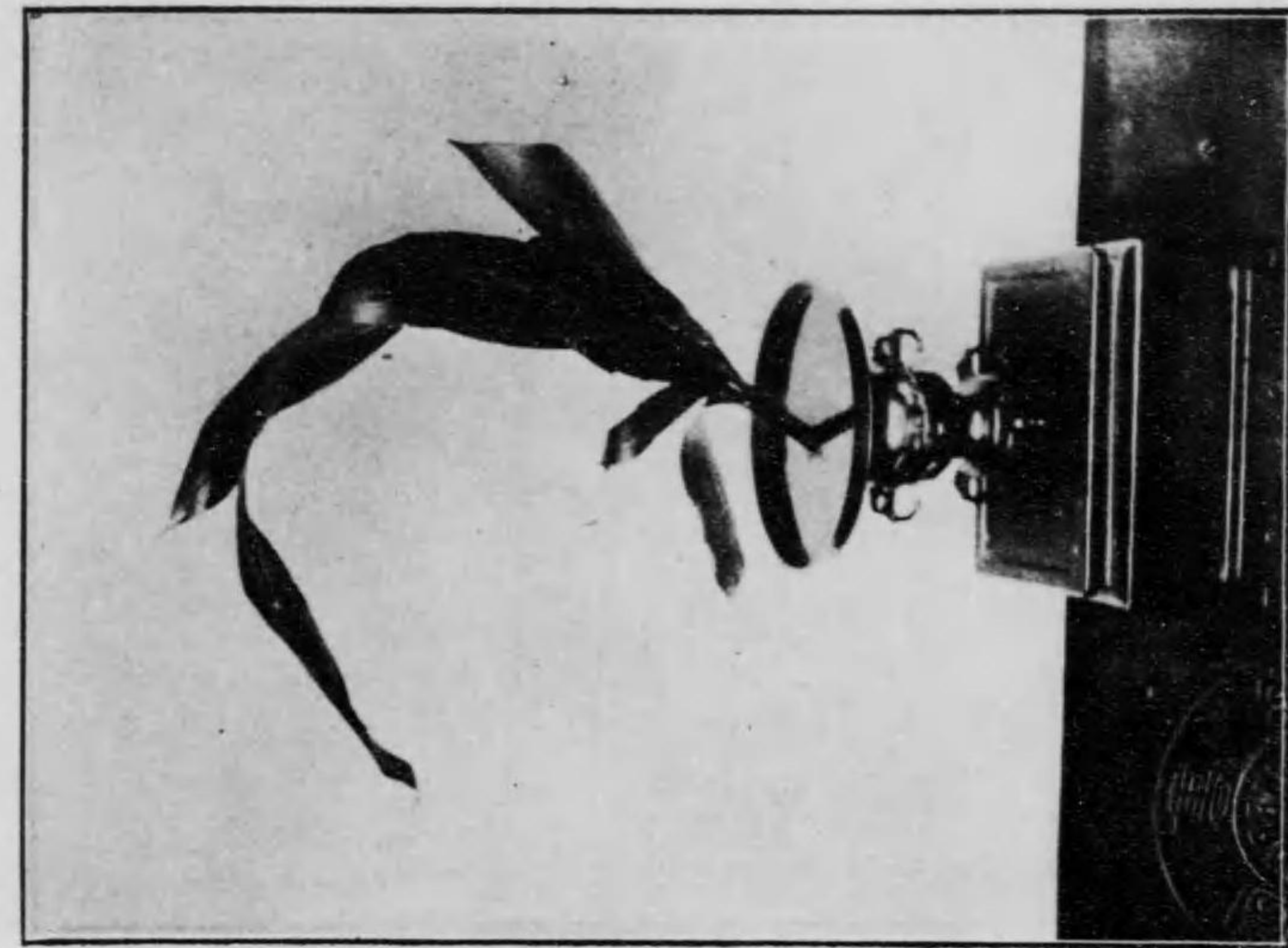
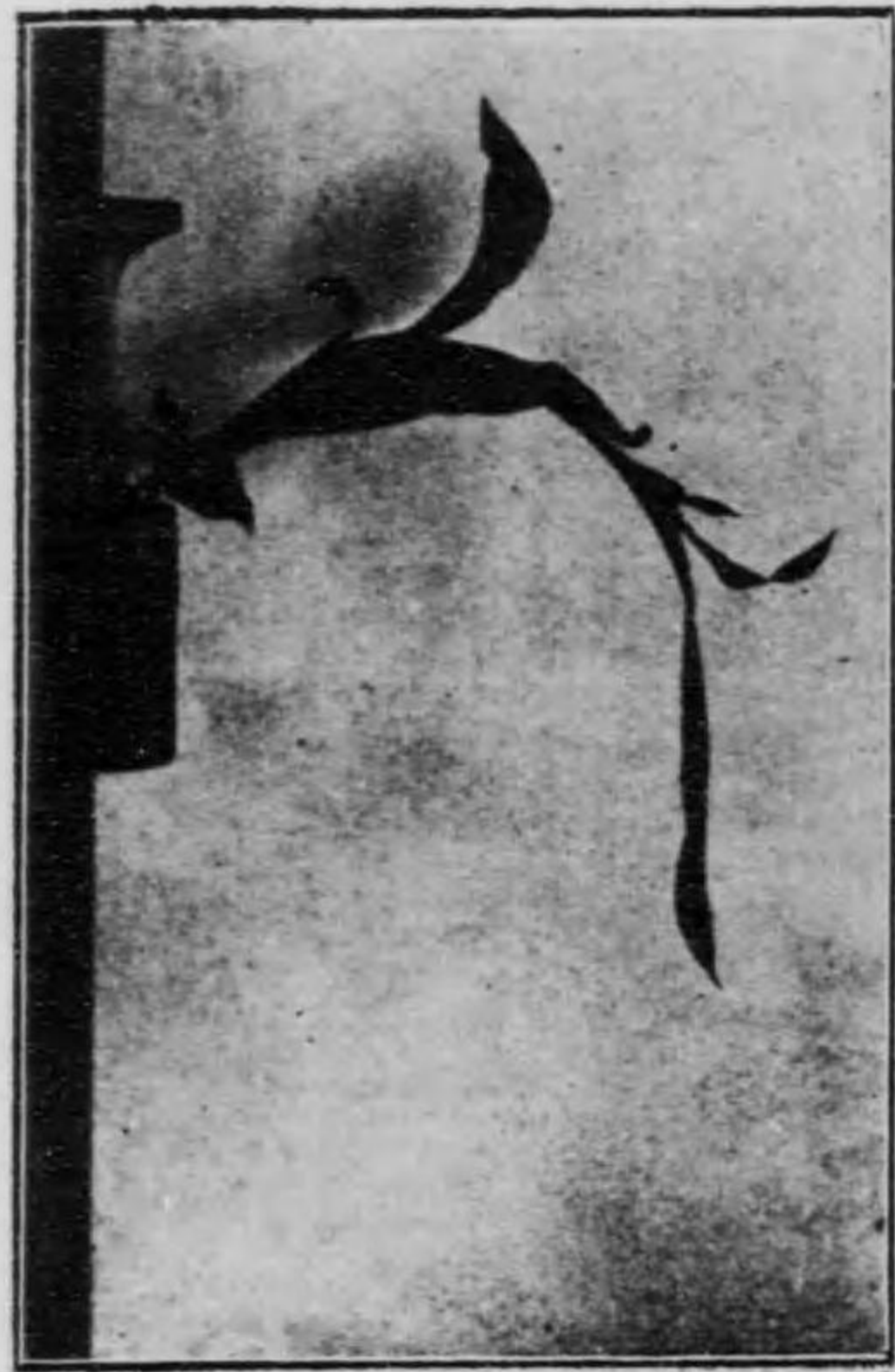
大正
10 9 20
内交

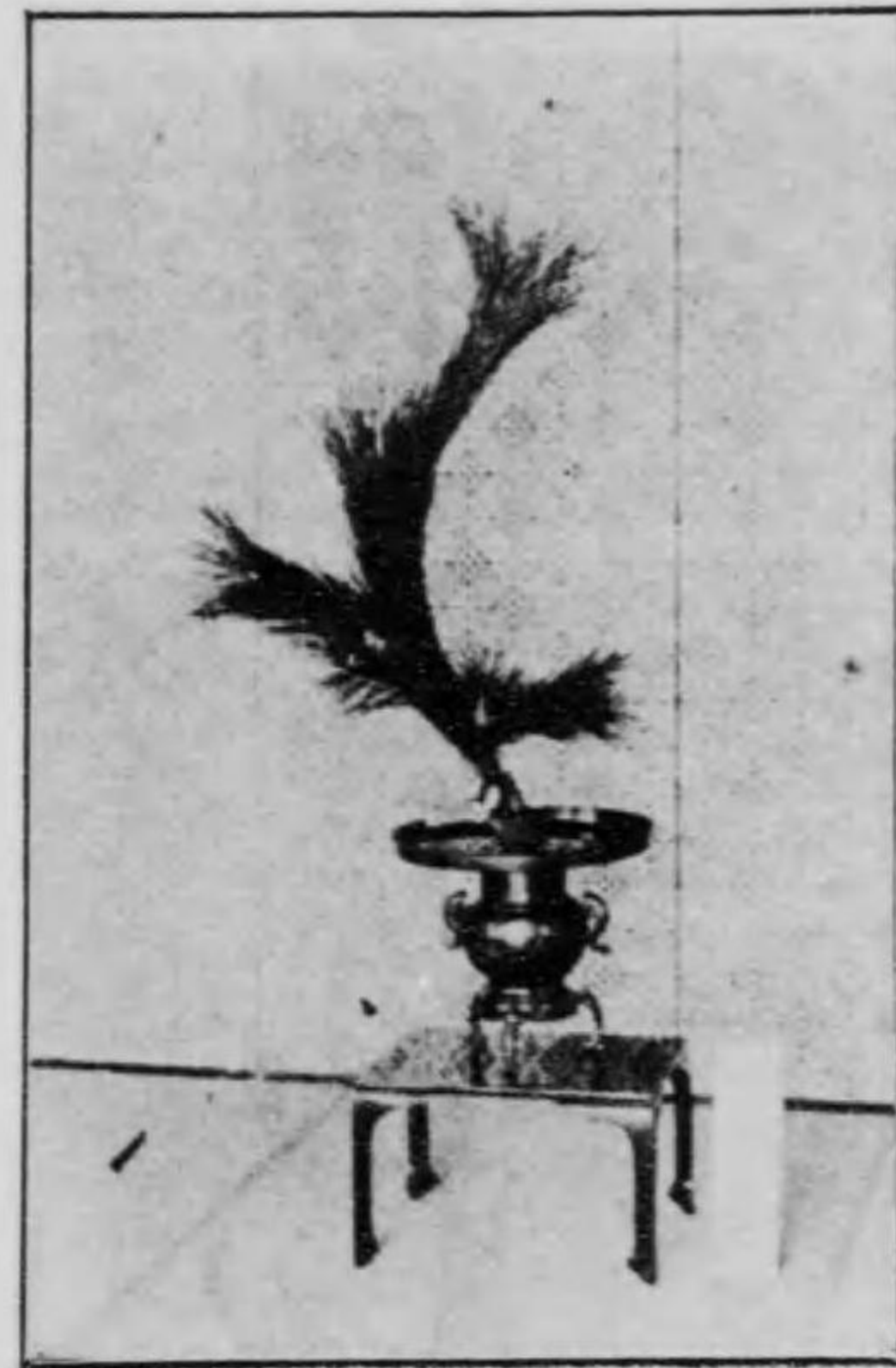


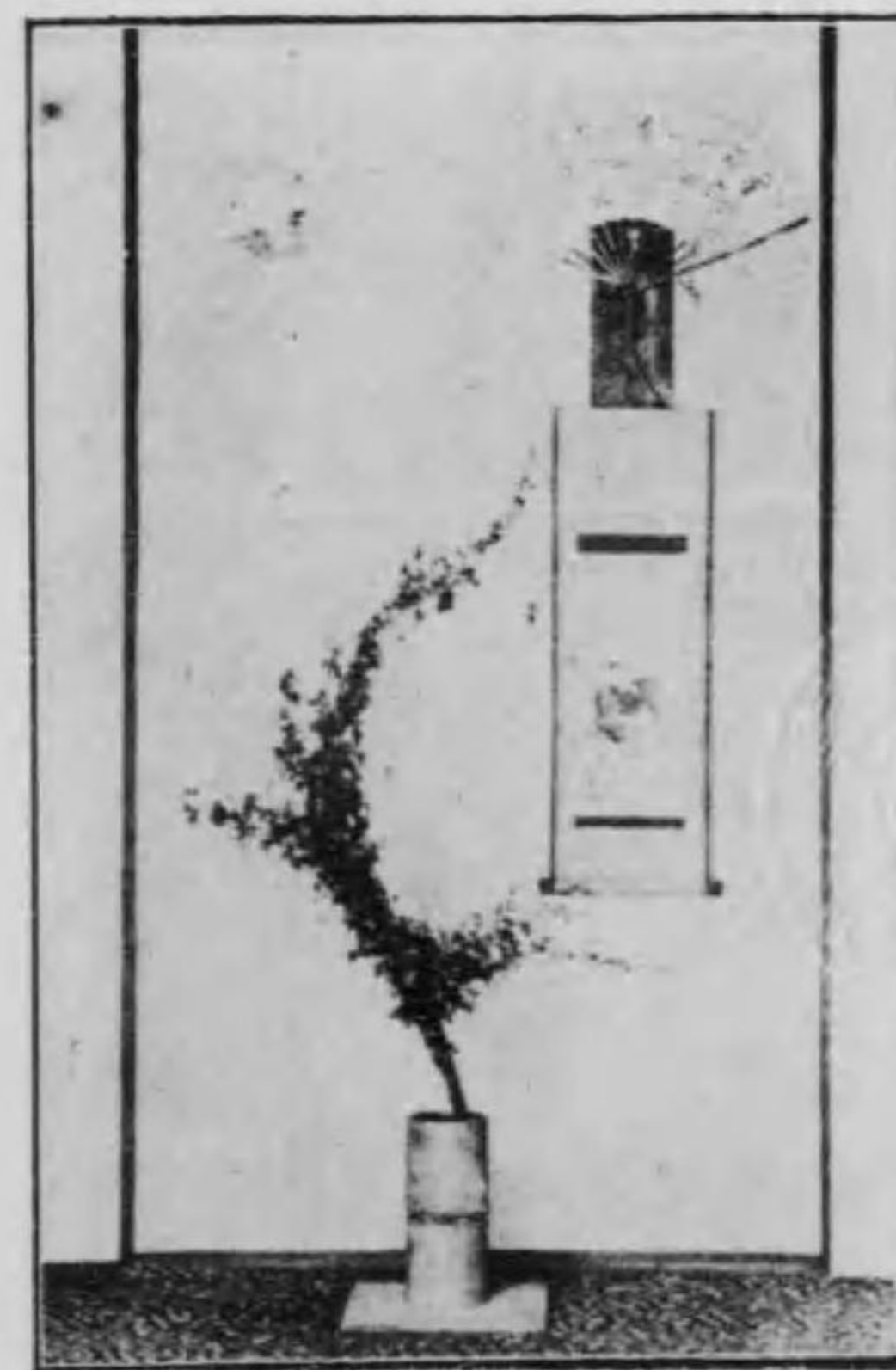
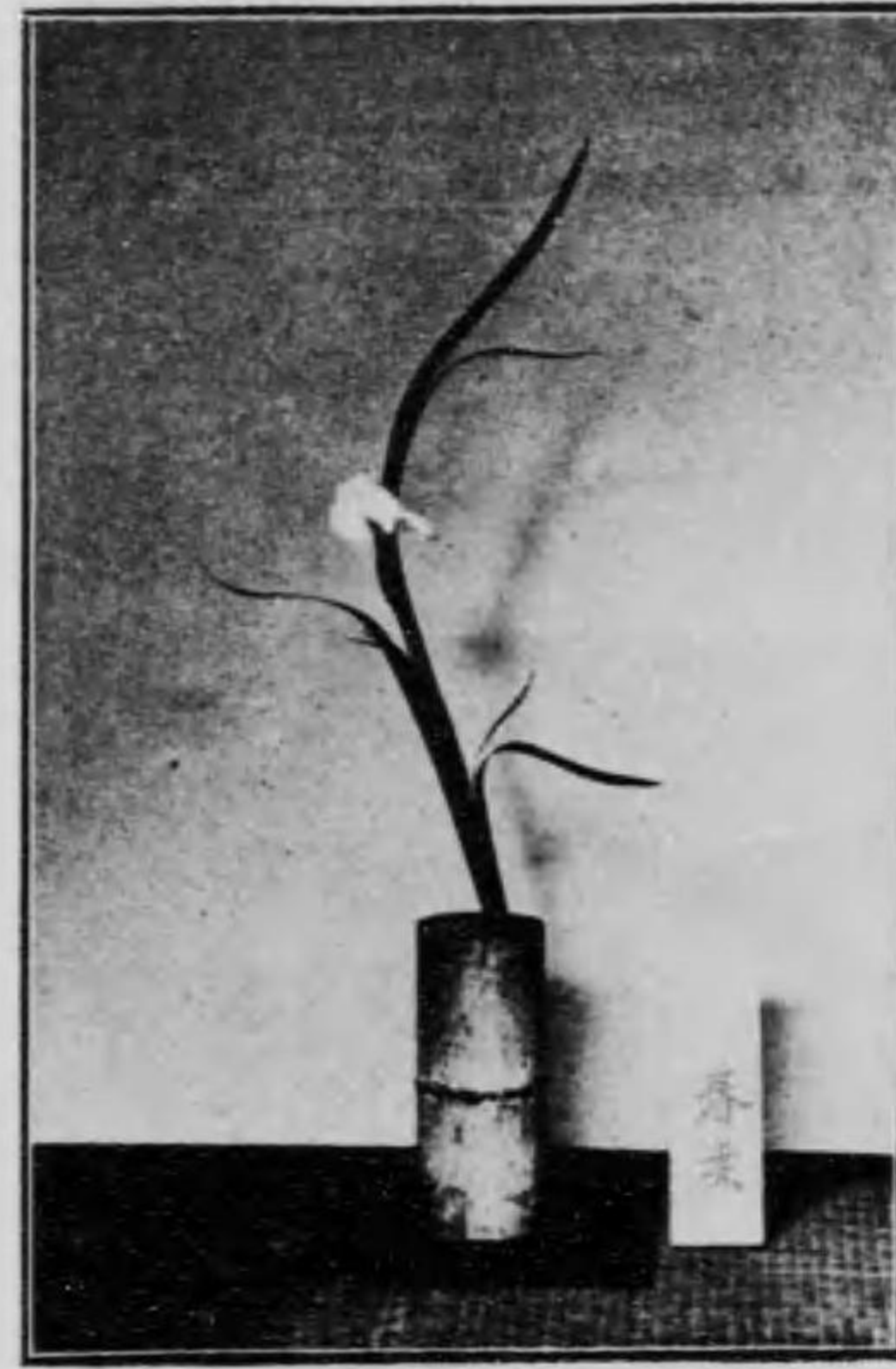
著者とその花挿













花道全書序

藝之可游者不爲不多而插花則其尤者也蓋插花之爲方以人力補天工化鄙俗爲高雅能使貪人廉暴客溫其爲所游之藝可知矣然而其施爲失宜姿態不整夙神不爽甚則昨挿而今萎朝植而夕褪往々爲孛蒙不潔之狀爾可憾也春秋菴主有慨于此著花道全書花卉之撰擇瓶盤之構造枝葉之脩短曲直瓣萼之疎密濃淡至整姿爽神坊萎救褪之方法詳錄無漏可以

爲插花之規矩準繩矣近者歐米人士愛吾插花學其方者日加其數菴主平生清貧自處家無餘財余欲菴主具加洋譯販之歐米諸洲一躍爲富家翁爲季蘭多作嫁衣裳也

大正丁巳菊月

七十五翁 兒山 櫻井勉撰

自序

世の進歩に伴ふて人は益々多忙となり、心は愈々實利的となり且つ輕薄となり行くは、何れ免れ難き現象ではあります、が、さりとして四六時中、たゞ東奔西走にのみ日を送る譯には行きませぬ。是に於てか諸遊技の必要があり、美術の必要が起るのであります。諸遊技美術は以つて其心を慰め、其鬱を散ぜしめ、同時に其品性をまでも感化して、自ら人心を優美高尚に導きます。されば世は何程に變遷するとも、所詮諸遊技の要なく、美術の要なきに至るなどは有り得べからざる事でありましょう。否近來愈々花道、茶道、香道等其の他の遊技、美術品の世に行はるゝを見れば、寧ろ益々其の必要を感じ

ずるの程度が高まる許りであらうと思ひます。こは畢竟人情の歸する所にして、多忙なれば多忙なるに従つて慰藉物を要求し、輕薄なれば輕薄なるに従つて矯風を要望するに相違ありませぬ。夫には他の事物と相俟つて、是等も同じ必須の價値を有する所以ではないであります。況して花道は實は草木自然の理を究め、引いては宇宙森羅萬象の眞理を悟り、之を世道人倫に及ぼし、神氣を養ひ處世の道義を知らしむるを以つて法とするに於てをやであります。

花道は單に花を活ける事のみにと止まらず、其關聯する所の範圍は極めて廣く且深くして、しかも一種超然の趣味が含まれて居るのであります。而して之を理解し、之を賞翫せん

は、一に其人の嗜好の如何に待つ外はないのであります。一度其趣味を味へば其心を娛ましめ、且つ品性をも自然高尚ならしめ、惹ては總ての物の趣味をも悉知し得て、遂には一物一草の其手に觸るゝや、忽ち其物本來の趣味を遺憾なく發揮せしめ得ると共に、萬事萬物の配合調和を自由にし、人をして興快措く能はざらしむるに至るのであります。されば之が要用は自ら釋然たるべく、亦茲に多く言ふを須るませぬ。予は元來職之に従ふものにあらず、盡く斯道の蘊奥を究め得たりとするものではありません。實際の經驗は、聊か自負するに足る者あるを信ずるので、年來の嗜好は漫りに本書を著すに至つたのであります。由來花道に限らず、總

て此種のものには秘傳密授と稱へて、容易に之を漏さず、坊間類書の多く刊行せられたるもありませんけれども、尙且之を披瀝したるものはありません。斯かる固陋なることは今の時世には適せず、此の道を修めんとする人に便り宜からずして、道の爲めにも遺憾少なからず思ふのであります。之れ予が敢へて此書を刊行せんとする所以でありまして、本書に於ては、即ち是等極秘の傳を記述して些かも餘蘊ありません。幸に世の同好の士の一顧を蒙るを得て、微衷を諒とせられなば、著者の本懐これに過ぎぬのであります。

一 柱の芳香床邊に起り、一 露の蓮花瓶中に笑ふの堂に於て

著 者 記 す

花道全書目次

〔一〕 緒 論

(一)	插花の濫觴	一
(二)	花道の變遷	七
(三)	花道の流派	一〇
(四)	花道の眞價	一五
(五)	花道の十徳	一八
(六)	花道の心得	二〇
(七)	插花の字句	二五
〔二〕 花道の規矩法式		
(一)	天地人	二七

(二)	五行五備	三二
(三)	陰陽和合	三五
(四)	虛實等分	三七
(五)	花矩の起原	四〇
(六)	花形と眞行草	四五
(七)	插花の寸法	四八
(八)	插花の骨法	五〇
一、三 体		
二、曲 花		
三、横 鱗		
(九)	禁 忌	六六
(十)	草木の性能	六九
一、枝葉の心得		

二、花の心得……………七三

(十一) 實物の故實……………七五

(十二) 尖針有る物の心得……………七七

(十三) 草木の扱ひ方……………八〇

〔三〕 四季の草木と其養ひ方

(一) 草木出生の心得……………八三

(二) 四季の草木……………八五

一、木の部……………八五

二、草の部……………九六

(三) 時候と養ひ……………一〇六

(四) 水揚の原理……………一一〇

(五) 眞行草の養ひ方……………一一四

(六) 諸草木の養ひ方……………一一八

一、春の部……………一一八

二、夏の部……………一二二

三、秋の部……………一二五

四、冬の部……………一二八

五、極秘三種の養ひ方……………一三〇

(七) 瓶水並に露の時候……………一三六

〔四〕 花の活け方附り各故實

(一) 挿花の心得……………一三九

(二) 花配りの仕様……………一四四

(三) 活け方の大意……………一四七

一、矯め方……………一四九

二、剪り方……………一五二

三、挿し方……………一五五

(四) 葉 蘭……………一六一

一、出性と時候の用捨……………一六五

二、表葉の挿方……………一七〇

三、裏葉の挿方……………一七六

四、眞向の挿方……………一八〇

五、曲花の挿方……………一八三

六、横鱗の挿方……………一九一

(五) 櫻……………一九三

(六) 紅 葉……………一九七

(七) 牡丹……………二〇〇

(八) 蓮……………二〇四

(九) 菊……………二〇七

(十) 松……………二一二

(十一) 竹……………二一六

(十二) 梅……………二一九

(十三) 水仙……………二二三

(十四) 燕子花……………二二八

(十五) 柳……………二三三

(十六) 藤……………二三六

(十七) 山吹……………二三八

(十八) 太 蘭……………二四一

(十九) 河 骨……………二四三

(二十) 萩……………二四六

(廿一) 薄……………二四八

(廿二) 女郎花……………二四九

(廿三) 玉簪花……………二五〇

(廿四) 芭蕉……………二五一

(廿五) 蘭……………二五四

(廿六) 萬年青……………二五六

(廿七) 批把……………二五八

(廿八) 花袖……………二五九

(廿九) 一輪挿……………二六一

〔五〕 花道の諸器具

(一) 花器……………二六三

(二) 竹花器……………二六七

一、切り方寸法……………二七二

二、取扱ひ方……………二七五

三、筒と花……………二七八

(三) 船の花器……………二八二

一、船の種類……………二八四

二、竹舟の寸法……………二九〇

三、船の取扱ひ方……………二九三

四、舟三体……………二九六

五、七種の船……………三〇〇

六、五趣向……………三〇四

(四) 釣瓶の花器……………三〇七

一、釣瓶井筒寸法と手繩……………三〇八

二、釣瓶の取扱ひ方……………三一

三、七種の傳……………三一六

(五) 廣口と馬盃……………三二二

(六) 籠花器……………三二六

(七) 瓠瓜の花器……………三三二

(八) 花手桶……………三三六

(九) 特異の花器……………三三八

一、茶奠袋物の花器

二、井筒

三、潮汲車

四、二段棚

五、逆傘

六、金龍寺形水鉢

七、網籃

八、櫻欄手

九、逆風鈴

十、草屋形の青筒

十一、三日月形の花器

十二、花袋

十三、花車

十四、花の慶

(十) 花臺と薄板……………三五三

(十一) 花の留具……………三六〇

(十二) 曲留……………三六三

(十三) 轡組方……………三六九

(十四) 飾り石……………三七七

(十五) 垂撥と掛板並に下竹……………三八一

(十六) 花衣桁と花棚と三つ筒……………三八七

(十七) 挿花の小道具……………三九一

〔六〕 儀式會席の花

並に花飾り物

(一) 祝儀に忌む花……………三九四

(二) 神前佛前の花……………三九六

(三) 五節句の花……………三九八

(四) 佳節の花……………四〇二

(五) 結納の花……………四〇五

(六) 婚禮の花……………四〇七

(七) 送別の花……………四一〇

(八) 出征の花……………四一三

(九) 佛事追善の花……………四一五

(十) 新宅移徙の花……………四一七

(十一) 誕生の花……………四一八

(十二) 夜陰の花……………四一九

(十三) 茶席の花……………四二一

(十四) 香席雅遊の花……………四二三

(十五) 藤 葛……………四二五

〔七〕 花道の禮儀作法

(十六) 藥 玉……………四二八

(十七) 茶 奠 袋……………四三二

(十八) 菖蒲御輿……………四三四

(一) 儀式の心得……………四三五

(二) 宴會の心得……………四三九

(三) 訪問の心得……………四四三

(四) 應接の心得……………四四五

(五) 談話の心得……………四四八

(六) 會席の心得……………四五〇

(七) 會日の心得……………四五四

(八) 挿花の手前……………四五七

(九) 挿花の見様……………四六一

(十) 會席の花見様……………四六四

(十一) 挿花所望の心得……………四六六

(十二) 客用主補の心得……………四六九

(十三) 床に花有る時の心得……………四七一

(十四) 庭前の花心得……………四七三

(十五) 贈り花の心得……………四七五

(十六) 花器の見様……………四七九

(十七) 花器取扱ひの心得……………四八〇

(十八) 飾り物の見様……………四八二

〔八〕 室内の飾り方

(一) 床の 間……………四八五

一、床の種類……………四八八

二、折釘の打方……………四九〇

三、床の飾り方……………四九三

(一) 掛 物……………四九六

一、掛物の懸け外し方……………四九八

二、對幅の懸け外し方……………五〇一

三、掛物の用捨……………五〇四

四、掛物と挿花……………五〇六

五、聯と塗簡板……………五〇九

(三) 卓……………五一一

一、卓の飾り方……………五一二

二、卓の扱ひ方……………五一五

三、卓下の花……………五一六

目次

(四) 香爐、香盒、火道具立 五一九

並に香 五一九

一、香爐 五二〇

二、香盒 五二三

三、火道具立 五二五

四、香 五二七

五、香手前と其炷き方 五二九

(五) 飾り方の心得 五三二

一、樂器の飾り方 五三五

二、壺の飾り方 五三六

三、文臺の飾り方 五三六

四、釣香爐の飾り方 五三六

五、七種竹花器の飾り方 五三七

八

(六) 書院 五三八

(七) 棚 五四三

(八) 額 五五〇

(九) 屏風 五五三

(十) 疊 五五八

花道全書目次終

花道全書

春秋庵薰甫講述

(二) 緒論

(一) 插花の濫觴

天地の開けた後草木は有つても插花の事はありませぬ。けれども其起原も極めて古いことで、既に印度では今から殆ど三千年の昔、釋迦如來が衆僧に大乘の經を説かれた時、傍らの瓶に挿してある草木を指し示して、此花も今こそは立派に咲き誇つてゐるが、やがて時來らば凋落して見るかげもなきに至ると、草木の生命天性よりさては人生の榮枯盛衰も、誠に權花一日の榮えに等しきものであるとの眞理に説き及ぼされたのが、即ち插花なるものゝ起りだと云ひます。



或時、釋尊御弟子達に向つて言葉はなく、只一朵の枯れ花を示されたが弟子達はいづれも其意を悟ることが出来ず、互に顔を見合せて暫し黙然としておました所が、大衆の中に迦葉といふ御弟子を一人破顔微笑したので、迦葉尊者に正法見相の心法を傳へられたといふことであります。それは彼の花も以前は鬱鬱たる香りを放つて、生々としたものであつたが、あはれや今は一塊の枯れ花となつた、我等もこれと同じ理で、何時までも青年では居らぬぞよ、との教理を授けられたのであると會得したので、これ心を以つて心に傳ふる所、志の切なる所以であります。又或る時、舍利佛の御弟子が一對の花瓶に花を挿して、是れは佛法の蘆山の眺めをうつしたものであると云つて献じた所、釋迦は之を見て、此の一瓶の蘆山は即ち須彌山を象りて自ら佛法に協なひ、又假りに花瓶を世界と見る時は、自然と陰陽も備はりて天地人の三才を象るもので、萬法皆此の中、供はらぬはないと、感賞された事があります。抑も是を挿花の始とするので、一朵の花にも佛法の妙理を含み、佛法の妙理は一朵の花に依つて示す。

とが出来、花を瓶に挿して佛前に供するも、卯月八日の花御堂なども畢竟此邊からして出たことで、佛道と挿花との深い因縁のあることも妙であります。我が朝では聖德太子が創め給ひし所なることは、人口に膾炙し、世人の普ねく知る所であります。佛法の傳來は第二十六代繼體天皇の朝、韓人が佛像、經典を持ち來つたのを嚆矢とし、其後幾何もなくして漸次國內に布教する様になつたが、其教旨が我國の文化を開發せしめ、人智の進歩を助けたのは、蓋し些少ではなかつたのであります。斯くて佛道は第三十代敏達天皇の御代に至つて、最も隆盛の極に達し、廣く普及する様になつた、時に偶々聖德太子には御歳十六歳にして、身は金枝玉葉の尊ときを以て早くより佛門に歸依し給ひ、師の惠慈に就いて佛教を聞こしめし、學架に就いて儒典を學ばせられ、遂に有名なる十七憲法を編制せられるなど、實明の英資をもつて、政教兩道の上に力を致されたる御治績は歴史に詳かでありませぬ。

太子傳補注に曰く、「二月天皇詔して曰く、汝太子聖德、生年幼稚と雖も、業

慮百歳の如し、朕思念する所あり、當に問ふべし、汝焉を答へよ。今佛法來り、
 儒文又至る、朕敢て異國の他經を信せず、吾が國神代の儀に異るを以てなり、
 汝の意如何。王子答へて曰はく。天皇一理を知りて、未其百處を盡し玉はず、
 臣幼昧なりと雖も、熟々儒釋乃神史の文を見るに、大方分明にして、之を疑ふ
 可き所無し、神道は神の根本、天地と與に發り、以て人の始道を説く。儒道は
 道の枝葉、生黎と與に發り、人の中道を説く。佛道は道の華實、人智熟して後
 發り、人の終道を説く。強いて之を好み、之を惡むは、是れ私情なり。理に隨
 ふは是天なり、私は天に勝たず云々」と。即ち神道は國の肇を説いて現世未來
 を説かず、之れを説くは神道の本色にあらず、儒道に於いても又然りて、唯現
 世を説くのみ、過去と未來を説かず。未來を説く者は獨り佛法あるのみ。而し
 三道各其説く所は異なるけれども、皆是れ等しく人道須要の教へであつて、三
 道協和して茲に全きを致すことを得ると云ふ。即ち三道一軌の理を草木の根、
 枝葉、花實、に仮へて勸答せられたので、正風挿花秘傳抄に、「聖德太子、敏達

天皇の勅問に應答し給ひ、草木の出生を以つて、神儒佛の三法に比し給ひて道
 を開き給ふ云々」とあるも即ち此のことでもあります。

其後太子釋尊が衆僧に示された、枯花の教へを聞かせられ、これを本として
 御自身にも工夫を加へられ、新たに我が國人の嗜好に適するようになり、瓶に挿し
 て、常に佛に供せられたのが、我が國に花道の起つた原であります。勿論其頃
 の事でありますから、挿花の法だの、規矩だのと別に定まつた事はなかつたの
 で、又其形体なども元より何等傳はつたものがないから、何う云ふ風であつた
 かは知るに由ないが、或る舊記に依れば、矢張り舍利佛の挿された様に、其形
 は須彌山に擬してあつて、陰陽も備はり、三才をも象つてあつたと云ふことで
 あります。花は極めて清淨なるものであると云ふ處から、佛前には必ず花がな
 ければならぬ。即ち香を燻くこと、臘燭を點すこと、共に、佛前の三つの儀式
 か始まつたのであります。尤も當今は挿花と佛花とに區別をつけて、挿花とさ
 へ云へば床の間の飾り物と早合點し。佛花とし云へば佛前の供華とのみ心得て

ゐるのは大いに間違ひで、原を云へば全然此の區別はない筈であります。

扱又生花初心傳には、「生花は昔地神四代彦火々出見尊、海神の館に入らせられたる時、饌百儿を設け、玉器に千木種々の麗花を取り入れ、之を尊に奉り、歌ふて曰く。此の花のこと榮えまじませ神の尊下略、是れ生花の濫觴なり。」と云ひ。或は伊弉諾尊、伊弉册尊の御時、二つの瓶に男松と女松を活けたのが始まりだとも云ひ。又國常立尊出現し給ふ時、焼物の壺の様な形の瓶があつて、其中に草とも木ともつかぬものが生じた。それがもとで、是れは今云ふ脚の事であつて、花を一瓶二瓶と云ふことも、これから始まつたものだとも云ひます。

或は又、天照大御神天の石窟に隠れましたる時、八心思兼神の獻策に従つて、天兒屋根命は天香久山の五百枝真賢大を根こじに抜じて、其上枝に天明玉命の作つた所の八坂瓊の曲玉を取り著け。中枝には天香久山命の作つた八咫の鏡を繋げ、下枝には彼の天日鷲命の作らへた木綿を垂れた。即ち是れを天太玉命が捧げて、太御幣として神前に供へ、天兒屋根命は太祝詞言を獻して祈つた。

此の太御幣こそ我が國にて花の始まりであると云ひます。大唐では唐の帝王、周の文王の代であつたと云ひます。正月元旦には天子が東西南北の土を盆に載せて、是れを櫛で打つ事が慣習で、之は我國の四方拜の如き吉例であります。或年の元旦、文王が右の通りに式を行つた所が、其土の中に小虫のゐたのを知らずに打つたので、文王は殊の外之を憂へて、天子の身として、假へ見へない土中の虫にもせよ、打殺したのは不仁の至りであると、いたく歎いて、其上に松と梅の木を差した、處がその木に根が生じた、是れが始まりで、即ち之を盆花と稱へると云ひます。尙斯様な説は數限りもありませんが、要するに皆牽強附會の説であつて、取つて以つて信するには足らないのであります。

(二) 花道の變遷

聖德太子からして生花法の教しへを受けて、廣く之を傳へたのは、小野の大

池の坊では、既に今日迄三十八代連綿として、今尙京都に家元があります。然し今からして其當時の生花法なるものを想像して見まするに、假とへ規則方法が備はつてゐたとはいへ、漸やく陰陽とか、天地人の三才を象つてゐたと云ふ位の事にすぎぬので、勿論今日の如くに規則正しい法式としては無かつたもので、即ち投生けといつて、當今の西洋風のさし花に近いものであつたのは、疑ひを容れぬところでありませぬ。其後累世種々研究を重ねた結果漸次に改良を加へ、大いに従來の面目を改め、稍々今日の插花法に近い活け方を案出したのが、今から丁度一千年程前の藤原時代の事でありましたが、其の當時も尙今日のやうに廣くは行はれず、漸やく優にやさしき殿上人の間に、花朝月夕の興には此上なく持て囃されてゐたと云ふ位に過ぎませぬ。爾後年を経たけれども、戰國時代の常として粗豪朴野の武人間には、斯道の趣味を解する者が少なかつたので、是れが爲めに花道のことは余り廣くは世に知られず。唯獨り九重の帝都にのみ大に行はれてゐたのであります。年變り星移つて、其後世は武家の手に渡り、

至る所太平を壽く足利氏中世の頃となつて、世は奢侈豪華を極めたので、月卿雲客は勿論、何時か武人間にも亦之を知られる様になり、盛んに廣く海内に傳はつたのであります。殊に八代の將軍慈昌院義政公の如きは、別して花奢風流を好み自ら其門に入つて、茶花の道を學びましたが、其頃池の坊では相阿彌、文阿彌等でありました、上に見習ふ世のたとへで、是からして風流の道益々盛んに行はれ、香の道も開けて正文文祿の頃には類に流行し。豊太閤を初めて時の大名小名は更なり、平武士町人に至る迄何れも圓に松風の音を聞きながら盆裡に花技を樂しむと云ふ程で、隨がつて茶人には南都稱名寺の僧隆光、大黒庵の紹鷗、千宗易、道安、數之内紹智等、其外古田織部に織田有樂齋、小堀遠江守や片桐石見守など、數寄を好む斯道の泰斗は多く此頃に出たので、實に隆盛を極めたのであります。夫れで勢ひ長足の進歩をなし、天地人の三才から眞行草の三體、花器の取り扱ひ方や書院の裝飾法、插花の作法禮儀に至るまで、皆此時代に至つて殆ど完成の域に達したので、又規矩法式の些か各自の意見に

異なる所あるをもつて、何流など、流派を唱へ來つたのも此時分からの事であり
 ます。然し其當時は尙自ら流名を稱へた譯ではなければ、又今日の如く多種多
 様に分れてゐたのでもありません。尤も花は茶席の賞花からして弘まつたので、
 夫故に千家、遠洲、石洲など、茶家の流儀を呼び傲はしたのであります。が、
 茶方に云ふ生花とは所謂折入花、投入花のみであります。それで遠洲侯、石洲
 侯などが自ら何流だなど、云つて傳授せられたのではなく、其花體法式の異なる
 處から、各々其流れを汲んだ後の人が、期せずして稱けたものであります。然
 るに明治維新以後に至りては殊更に自己に姿を作り出し、勝手に規矩を定めな
 として一派を創始する者が多くなつた。遂には何等の變化特色もなき流派が、昨
 今殆ど數へ盡せない程多くに分れてをります。

さもあらばあれ、今の世には都も鄙もおしなべて茶の湯活け花の道最も盛ん
 に行はれ、殊に各女學校には女禮式、技藝の一科目として此の兩道を教授し。
 共進會、展覽會の餘興として隨時各所に會席の催しあるなど、目下其流行の極

度に達したかの觀がありまして、都市の至る所、茶花指南の看板を見ないとい
 ろは殆どないといふ有様であります。

(三) 花道の流派

花道の流派も當時は中々數多いことで、何の流儀が一番によろしいかと云ふこ
 とは、皆それ／＼に得失があり、又人様々の趣向にも依ることでありますから、
 一概にそれと指して云ふことはできません。

尤も花道に流派と稱するものは、未生流、未生眞流、遠洲流、遠春流、池の
 坊、石洲流、其外東雲、太古、青陽、青山、花山、遠神、容眞、客眞、天眞、
 本眞、清心、旭、三光、水野、玉心、嵯峨未生、源氏古流など支流末派に至る
 迄之を數へたならば、殆ど枚擧に達しない程であります。強いて相違の點を擧げるならば、
 ては何流を問はず大凡大同小異であります。強いて相違の點を擧げるならば、
 其流派を創めた人が違ふだけそれだけ其人の嗜好が異つてゐると同一で、枝

の矯め加減が違ふとか、枝葉を引き締めて挿すとか云ふ位のこと、極く些細な相違に止まつてをります。

が併し其淵源の遠く古いことは勿論池の坊が第一であります。池の坊は以前にも述べました通り、既に聖徳太子の御時、小野専務(大臣妹子の法名)といふ人が太子の生花法の教へをうけて、之を傳授したのが其はじまりで、藤原氏時代、斯道もやうやく廣まり法則なども稍や調つたが、これは池の坊第十三世專慶の時であつたのであります。それからにはるかに下つて、足利の風流將軍義政公の頃になつた時は第二十七世で、今日の家元に至るまでは既に三十八代を経てをります。遠洲流の祖であるところの遠洲侯の如きも、自分がすでに修得してゐる茶道と、池の坊の花道とを互に交換して修業しようとして、遂に池の坊の門に入つて花道を修められたのであります。既に述べたる如く其の頃は尙生花法といふのみの事で、別に流派と稱するものはなかつたのであります。後人が漸次にこれを遠洲流と名づけ、或は石洲侯の流れを汲んだものは之を石洲

流と稱へるやうになつて、追々數を増しこれが又分れ／＼て多數に上ぼつたので、池の坊でも今日は或は玉集派、柳生派と云ふ様に多く派が分れてをるのであります。

未生流の始祖は未生齋田沼一甫といつて江戸の人であります。幼少なる頃からして挿花が好きで早くも斯の道の妙技を極め、草木山野の幽趣、自然の美景を瓶裡にうつして楽しみました。不幸にも眼病に罹つて遂に兩眼とも失明したのであります。さりながら好きな道は盲目となつても依然として捨てず、不自由ながら手探りに活けるのが又頗る巧みなので、之を聞き傳へて入門する者が多かつたのであります。斯くて日に月に隆盛を極め、花は未生に何とやら云ふごとく關の東西を風靡しましたが、越へて文政七年六十四歳を以つて遂に永き眠りに就いたのであります。次いで但馬の國人上田周防法眼源正行が第二代目を繼承して未生齋廣甫といひ、さかんに普及を圖りましたが、上田家は漸やく第三代にして廢絶して終ひ、其後は黒川義甫なる人が他から入つて第四代を

継ぎ、五代六代を経て當時第七代の未生齋勝甫に迄續いてゐるのであります。此の未生流にも當時幾多の支流分派ができて、流勢も以前の如くはなく漸やく衰へて來ましたが、其花の姿のごときも單に出生にのみ意を注いで、挿方は多く他流と混同したやうで、真正の昔の未生流の面影は殆ど見ることの出來ないまでになつてゐるのは誠に遺憾千萬であります。

未生流から分れて一時盛んに技術流勢を競ふた未生眞流の創始者、生々庵春甫翁も又但馬の國出石町の人であります。其頃浪華に居住する未生齋一甫に師事して斯道の淵奥を極め、日ならずして同門に並ぶものなき名人となりましたが、尙己が才術にまかせて技を案じ、特に葉蘭の挿方に就いて幾多の研究を重ね、百方苦心の結果、茲に種々花形を案出して全然其面目を改め一新機軸を出したのであります。されば技術の巧妙を極めたことは天下無比で、さすがの師にさへ歎賞せしめた程であります。同輩に疎んせられ師との中も常に面白からず意見の合はぬ所から、其技を慕つて入門する者が漸やく多きについて遂に

一派を起すに至つたのであります。一年洛中で挿花會を催した時、有栖川宮家から召されて花務職を仰せ付かり、爾後中國四國を經歷して盛んに流儀の普及を圖り後進を指導して一時は師家の未生流を凌駕するの勢でありましたが、惜しい事には業を繼ぐ可き子がなかつた爲め、明治二年翁没すると共にいつしか衰微しました。後門生の協議に依りて高弟相繼ぎ、第四代松風齋昌甫に至つて漸やく復興したが、四代逝きて又振はず、續いで興つた春秋派が殆ど同門の幹流たるの有様となつたのであります。

(四) 花道の眞價

風流の道に目的だの價値だのと云ふのは、或は語弊があるかは知りませぬが、もとより挿花なるものを一口にいへば、人生自然の美性を表はしたものであります。馨り床しい美しい花を見ては麗しいと感じ、幽遠閑雅なる山水を眺め

こで庭園を設け山容水態を作つて樂しみ、又草木花卉を培養しては春の晨、秋の夕べに愛で眺めるのでありますが、草木の花が未だ輪の盡きないのに、夜半の嵐に遇ふては枝を吹き折られ、晨の風には無残や花を吹き散らされるのを太く惜んで、暫時の齡を保たしめて遣らうと瓶に挿して眺め、又室内の裝飾としたのが、抑も插花の根本であつて、之則ち人生自然の通性を遺憾なく發揮したものであります。又これに依つて仁愛の情を養ひ、智勇の性を發作し、或は禮讓の徳を修むることをも得るので、決して輕々しく翫弄視すべきものではありませぬ。

古來人の性は善なりといつてあるが、換言すると善は人の自然であつて、彼の仁愛、智勇、禮讓も此の人の善性から起る所の自然の情なのであります。即ち山水の美、花卉の麗は天理自然でありますから、此の天理自然である所の山水花卉が、人の自然たる仁愛、智勇、禮讓の徳性を涵養する事は、疑ふことの出来ない原理であります。

又既に前項に於いて述べましたる如く。插花は實に佛道の眞理を含むのであるので、佛道の眞理は人生の自然に發し、人生の自然は天地萬有の自然と合するのでありますから、花道の歸する所は宇宙間に存在す森羅萬象、有りと凡ゆる天然自然をして感化せしめ、假へ一瓶の枝、一朶の花とはいへ、其精神神氣の動く所、發しては英雄豪傑ともなり、賢母貞婦ともならしむるので、花道の眞價も全く茲に存するのであります。かるが故に其眞理は天然自然の理に合する事となるので、其形態に於いても整然と陰陽の方位を具備し、又天地人の三光に則るのであります。抑も之は君臣父子夫婦の三綱、或は又智仁勇の三徳に象つたもので、且又神儒佛三教一軌の聖理に基くものであります。

されば插花は假初の慰み物ではありませぬ。之を以つて天地陰陽和合の理を辨へ、人畜草木因果の妙を悟つて斯道の蘊奥を極めたならば、挿したる花の枝葉にも自ら眞理を含み、三教五倫の道にもかなふ而已ならず、篤と心をこゝに止めて尙草木が天理自然に背くことなく花咲き實る様に蔭日向なく勉めて、誠

の道に違はなければ自ら幸福を得んことは疑ひないのであります。

(五) 花道の十徳

花道なるものゝ意義とも稱すべき事に就いては前項既にこれを盡しましたが、尙挿花をたしなむ者の餘徳として下の十徳があります。先づ、

高位賤交と云つて或は極く身分の賤しい人々とも交はることもありますが、時には又貴顯の人々も列座して交はることがあります。これ其の一徳で、

無意他念といつて挿花に向つた時には一意専心、此の事にのみ懸命になりますから、心の苦も何にも餘事は一切打忘れて終ふのでこれ其二徳であります。

不語獨樂といふは、別に何事をも語らずとも、又他人に些か煩ひを及ぼさずとも、自分獨りで楽しむことが出来るので、之れ其三徳であります。

草木名知と云つて色々の草木に接する間には、自然草木の名稱をも覺へ、又産地なり其花の出づる季節や性情をも知る様になり、これが爲めに見聞を廣め

るのは其四徳であります。

衆人愛敬といつて譬へば賤しい身分の者にしても、世の人に愛し敬まはれるやうに成るのは是れ其の五徳であります。

席上常香とは即ち床の間には常に馥郁たる香氣を放ち、華麗ならざるまでも瀟洒なる所に住んで、自ら其の香りに酔ふと云ふ工合で、他の人の爲し得ない

氣樂な生活をなすことが出来る、これ其の六徳で、

朝暮風流を旨とするを以つて、何事を仕ても優にやさしい氣風を養ふて武骨な、角張つた風がなくなり、それで自然と心がのんびりとして心安く、人に接するにも上下何れにも交際よく、明け暮れを楽しく過ごして、心を痛める

様のこともなくなるのであります。これが七徳。

諸惡離別といつて心に蟠まりあり、鬱々として樂まぬ時でも、花に向へばおのづと是れを拂ひ去り、忽ちすがすがしくなるのは其八徳であります。

精魂養性といつて花を挿んと思ふ時は、或は市に出で野山に歩み、材料を探

し求めて之を切りこれを燭め、手足を動かす間に自然に運動の一つともなつて、其身の健康を保ち精神を安らげるのでこれ其の九徳であります。

神佛拜像といつて花を挿ける時は神社佛閣に詣でたり、或は神影佛像に接する事多く、随つて知らずの間に神の大廣前に額いで拜禮をしたり、佛前へ花を供へる間に祈念を凝らすやうになるのは人の本意自然であります、只に形式ばかりではなく眞實崇敬の念を生じて來るのは、これ花を活ける者の十徳として數ふる所のものであります。

(六) 花道の心得

花を活ける時は人の顔が各々違つてゐる様に、假へ同じ花を活けるにしても自ら異なる所があつて、何うしても其人々の風流、氣色が自然に花の姿に顯れるものであります。常に粗暴の風ある者の活けたる花は其姿が亂雜になります、之に反して精神の落着いた人の活けたる花は緻密で細りよく誠に整然としてを

ります。豪放なる氣風は其花の枝幹に顯はれ、細心なる性質は自ら其の花葉にも表れ出るもので、是即ち前の花道の眞價なる章に於いて、挿花は實に人生自然の性情を發揮するものであると申し述べましたる所以であります。されば此の道に入る者は先以つて己の身を修め、心を正しく持たなければなりません。心身素直ならずして正しい花の活かる道理はありません。身も心も清ければ自ら花形も正しく、花葉枝にまでも其誠の心は必ず顯はれるのであります。

何も此の道に限つた譯ではありませぬが、尊きを敬ひ、賤しきを護らぬといふ心掛が大切であります。すべて事を成すには熱心でなければなりません。さりとして又餘りに泥んで自ら産を失ふ様でもなりません。先づ各自の家業を専らとして勉め勵み、其閑暇を以つて之をたしなみ、賓客來臨の響應に備ふべきであります。もとより花器の善悪を云爲するも由ない事で、器物の貴賤を論じ得がたき器や珍しい花等に金錢を費して傍人に誇るが如きは、眞に花道の心得ある者と云ふ事は出来ませぬ。只爽かにして駁雜しからず、清く活けて身の

程々に樂しむを本意とするので、畢竟花道は器財の高下を問はず、居常心の風流を旨とするのであります。

扱て如何にこれが面白い、風流であるからといつて、自分獨り合點して得手勝手な事をしてはなりません。尤もこれが我が流であると言へばそれまででありませんが、船が海を行くにも航路が有る如く、どの道々にも自ら一定の法則があります、此の法則に恃るものは道に協はぬので、其道の規矩法式は必ず確く相守らなければなりません。

夫れから初心の内は何に依らず多くの草木を活け試みて習ふがよろしい。技術さへ熟練すれば理屈はさうにでもつくものであります。初のうちには名も知らず、出生の様も譯らぬものを無暗に活けるには及びませぬ、有ふれたる草木を需めて活け習へば、その内には追々と名稱、性情をも理解するに至るものであります。自宅の後園に草花の貯へない時は、自然他に求めなければなりません。市中の花屋から買えば兎も角、其外から需める際などは、一枝一草た

りとも必ず断つて、其承諾を得てから切り採らなければなりません。自然の山川江澤にも皆悉く主はあります。

諺に「類を以つて集る」とある如く此道に入る者は多く期道の人に交はるがよろしい。然れば座談茶話の間にも自然裨益する所少からぬものであります。他人の短所を挙げ、又は己れの長ずる所を談することはなりません。人を誇つて己れに誇るは下賤のわざで、之が爲めに却つて己れの品格を下げるのであります。さればといつて又無暗に譽めそやすのも宜しくありません。「言はぬは言ふにいや勝る」とか、兎角多く語らぬ事が第一であります。問はれもせぬに諒々と辨じるに及ばぬ事は勿論でありますが、然し又問はれるにも拘はらず全く答へないと云ふのも不可ませぬ。之と同じ事で人の求めもなくして、わざと身ら花を活ける事はなりません。さりとていきりに所望せられるのを固辭するのも又禮に背きます。喧嘩口論は無論のこと、會席の花を見る時等は間違ひが起つてはなりません。囁き言をするのも互に謹まなければなりません。

すべて何事でも習ふ者の辛苦より、教へるもの、骨折は中々一通りではありませぬ。ですから假へ一枝の師恩たりと雖も決して疎かに思ふてはなりません。漸やく一通りを習ひ終るか了らぬうち、早くも巧者顔をなし、一かどの先生を氣取つて、弟子取りをする者などがあります。是は誠に心得違ひで、それでは充分自分の技を練ることは出来ませぬ。尤も人に教へる時は自然己れの研究ともなりませうが、兎もあれ人に教へるのは己れを修めて後の事で、況や一花の理をだに解せずして人の師となるなどは、大いなる間違ひであります。女性の花友には親しまぬがよろしい。總べて男女の間、間違ひの起り易いもので、勿論師にも弟子にも同じ事でもあります。要用があれば人を以つて傳へるがよろしい。流蕩すれば心敦一ならず、此の道は主一無適にして、よく己れを省く様注意するがよいのであります。尙自ら手輕足輕にして人に勞をかけない様にしなければなりません。迷惑を掛ければ自然疎んせられる事を忘れてはならないのであります。

(七) 挿花の字句

生け花通用の文字に生、活、挿の三字がありまして、各流派に依り用ふる所を異にしてゐますが。今これを字書によつて見ますと、生はいくで命を保ちてあること、即ち生存すること。活の字はいかすで蘇生せしめること、即ち助けて生命を全うせしめることでもあります。そして挿はさすで物の間にさし入れるの意であります。されば生花と云へば草木を生して器に入れる心で又出生の有様を生けるといふ意にも通ふ所から、古來多く此の字を用ひ來つたので。活花とは縦へば根を切るは殺すに似てゐるけれども、養ひ方、生け方によつて再びこれを生き返すといふ意をもつて之を用ふるのであります。然るに挿の字には此のいけると云ふ訓方はありません。それで之はさし花或はさし入れ花と讀むが當然であらうと思はれます。もとは矢張りさしいれ花と讀むだのを後に二字を略していれ花と稱へ、遂には又いけ花と唱へるやうに成つたものでも

ありませうか。もとより花を生るといふのは詳しくいへば地に生じたるまゝを云ふことで、既に切ればいくるものではありませぬ。又これを活けるといへば勝手にをいて養ひ置くことで、切つたが爲めに幾分勢力の衰へたのを改復せしむるのであります。花器に花を移すのは挿入れる、又單に入れるといふが至當で、これによつて見れば挿花と云ふが道理に協つてゐるやうに思はれます。さりながら何も斯様な字句の如何に拘泥するにも及ばねば、いづれを用ひても構ひはありませぬ。されども挿花はこれをいけ花とはいはずさう花と讀むが正當で、いけると云ふ時には活の字を用ひ、草木を指していふ場合には生花の字を遣ふがよろしいのであります。

花をとめるにもちみる又木にも或は花留とか花押へとか又は花配りなどの名稱があります。是れ又いづれを是とし、いづれを非とするといふ譯にもゆきませぬ。併しこれによつて枝葉を分ち花の形を定めることでもありますから花配りと唱へるが順當のやうで、かいはりと云ふのも此の花配からして轉訛した

るものであります。尤も水盤、馬盃などに用ふる特殊の器、或は龜だとか蟹だとか渦の如き形に作つたものは、之を花留といふて然るべきであります。

床上の瓶に花を移すことを入れるといふのは納れるので、則ち納める義なのであります。又前後左右に枝葉を扱かひもちふる事を遣ふといふのは隨へ送るので、別種の草木なれば勿論、同種のものでも交へ用ふるを添へると云ふのは益の義でありまして、又下種、會釋、根々など云ふは、先づ餘興とでもいふ様な意味なのであります。

(三) 挿花の規矩法式

(一) 天地人

各流派によつてこれを眞行草ともいひ、或は眞副體ともいひ智仁勇、陽中根、鎮、又体用止などとも云ひますが、其名稱こそ違つてをれ何れも天地人の三才の事を云つたものであります。天は地球を包圍する空球で、吾人の頭上遙か

なる方に青色の穹隆をなし、日月星辰は皆其中に配列せられてゐるが如く見へるのであります。其半徑の長さは測り知る事を得ず、形もなければ蓋し無限であります。地は大地則ち地球のことで吾人が棲息する所、其直徑は赤道に於て最も大きく、南北の兩極にてはや、短かくして扁平體をなしてをります。太陽からの距離は三千六百萬里で、春分點に對しては三六五・二四二二日、恒星に對しては三六五・二五六四日で太陽を一周します、夫して此の太陽を巡るに依つて四時を生じ、又自ら回轉するに依つて晝夜を分つので、全面積は凡そ三千三百萬方里といふ事でありませぬ。人と云ふは吾人々類を指して云ふことで、獨陽は生せず獨陰は長せずとかいふ如く、陰陽和合して萬物生するので天地陰陽の氣を放れては一として成就するものはありませぬ。是に依つて花に生るも天地陰陽を本とするので、陰陽和合して人を生じ、之を以つて天地人の三才と稱へるのであります。

切又天地人の三才は宇宙間萬物の稱であつて、又宇宙の萬物を主宰するところ

ろの靈宗であります。是を自然の道或は造化の法とも稱へるので、造物主即ち天地萬物の靈宗を神とすれば、天地人の三才は是れ取りも直さず神に通するものであります。神經に曰く。

「天無神道、則無有三光、亦無四時。地無神道、則無有五行、亦無萬物。人無神道、則無有三命、亦無萬法。」

と、則ち天地人の三才が共に相離れざるを神と云ふのであります。

總じて此の三と云ふ數は獨り花道には限らず、何事にまれ物事を成立せしめる基礎となるので、假へば鼎の立つたる如くであります。假りに圖を畫くにしても一つの線が三つ集まれば三角形となりますが、二つの線を以つてしては何なる形も畫くことは出来ませぬ。又一つの物體を据へるにも三脚であれば鼎立せしめる事が出来ますけれども、それが二脚なればすぐに倒れて了ひます。「三人寄れば文珠の智慧」「三人寄れば師匠が出来る」等と云ふ諺も畢竟此邊の眞理を云ひ表はしたものであります。或は時にも過去、現在、未來、の三期が

あり、位に上中下の三階級あり、形に大中小の三種があるのも皆此理に基づくので。山水の景も是を區別すれば前景、中景、遠景の三つに別つことが出来。人倫の教は君臣、父子、夫婦の三綱を本とする同一であります。

插花の法は抑も天地人の三才に則つたもので、天地人の三才は宇宙萬物の稱でありますから、則ち插花の形は天地萬物の形、插花の法は天地自然人倫の教であります。是を一家に假へたならば、天は主人の如く人は主婦の如く地は看屬の如きものであります。三才各々和合して花の形備はると同じく、家族一致和合して其家治まるので、此の心を以つてすれば其身を修め、家を齋ふることは勿論、四海平和に家富み國榮へんことは疑ひないのであります。

尙此の世の中一として天地人三才の恩を蒙らぬものとはではないので。我々は生れて父母に恩あり、國君に恩あり、師友に恩あり、其他我々が接する一事一物、悉く恩を受けてゐないものはありませぬ。是尙草木が天地寒暖雨露の恵みに依つて潤育すると同様で、天の恩、地の恩、人の恩、則ち此の三才の恩に依

らずしては一日片時も生活する事は出来ませぬ。故に草木が天道の教へに随つて花咲き實のるやうに、父母の大恩を顧りみ、國君の恵み重きを辨へ、且つ師友に對するに恭敬辭遜の禮儀を正しく、家業をいそしみ勵んで、天地人三才の恩に報いなければならぬので、是すなはち花道の本旨とする所であります。

(二) 五行五備

插花の形は、天地人の三才から出たものであることは、既に述べた如くであります。尙此の枝の設備は陰陽五行に準らへたので、之を五備と云ひます。五行は支那古來の學說で、天地の間に循環して暫らくも息まざる、木火土金水の五つの元氣の稱であります。宇宙の萬物は即ちこれに依つて組成せられてゐるので、木は育成の徳をつかさどり、方位にては東にあたり、四時にては春にあたるのであります。火は變化の徳をつかさどり、方位にては南にあたり、四時にては夏にあたります。土は出生の徳をつかさどり、中央の方位にあたり、

四季の主たるものであります。金は刑禁の徳をつかさどり、方位にては西にあたり、四時にては秋にあたります。水は任養の徳をつかさどり、方位にては北



にあたり、四時にては冬にあたるとしてあります。又木から火を生じ、火から土と、土から金を、金から水を生ずるとして之を相生といひ。木は土に、土は水に、水は火に、火は金に、金は木に尅つので之を相尅といひます。陰陽師などではこれを男女の性に配して、相生の者が相合して夫婦となれば即ち和合して幸福があり、相尅の者が相対すれば即ち不和であつて災難が来ると云ふのであります。

此の木火土金水の五つの徳を、花形に備へて活ける事を、五備の体と云ふので、五備とは株、株受、用、用添、留の五枝であります。すべて三の数は物事

を成立せしめ得るけれども未だ全からず、之に二を加へて始めて完備するので、天地の五行人の五體と云ふ如く、是れを和歌に例へば篇、序、題、曲、流といふ一首の五備と同様であります。

又此の五といふ數も、三才の三に於けるが如く實に意味が深いので、既に人體も筋、脈、肉、骨、毛皮を以て全身に通じて之を五體と稱し、視官、聽官、味官、嗅官、觸官の五感によつて物を識別し五指を以つて辨理するので、米、麥、粟、黍、豆の五穀は主要なる食物であります。而して喜、怒、哀、樂、欲の五情あり、人生の最も親しむべき間柄は君臣、父子、夫婦、長幼、朋友の五倫で、人の守らざるべからざるは君臣の間には義、父子の間には親、夫婦の間には別、長幼の間には序、朋友の間には信の五常の道、或は仁義禮智信の五徳であります。生、老、病、死、愛別の五苦は免がれ難き處で、殊に女人には一に梵天王、二に帝釋天、三に魔王、四に轉輪聖王、五に佛身となるを得すと云ふ五障あり。天人と雖も尙臨終には身光不現、華鬘萎頓、兩腋汗流、體便臭穢、

不樂本座といふ所謂五衰をまぬがれぬのであります。されば佛道では殺生、偷盜、邪淫、妄語、飲酒の五惡を堅く戒しめ、善惡の業因に依つて天、人、地獄、畜生、餓鬼の五趣に到ると悟し、一切衆生の皆無成佛の爲めに不動、降三世、軍吒利夜叉、大威德、金剛夜叉の五大明王をまつり佛陀の加護を祈るのであります。

それはさてをき彼の五輪の塔は最頂上を如意球形とし、次を半月次を三角又次を圓とし、下の臺を四角としたのは地、水、火、風、空の五大に象つたもので、五大は色、聲、香、味、觸の五塵から生ずる所の五つの性、即ち此世には一切普ねきものである故に大と名付るので、温、涼、寒、燥、濕の五氣も又この五大の作用に外ならぬのであります。尙書には象、隸、眞、行、草の五體あり、音曲に宮、商、角、徵、羽の五音あり、琴の手に擡手、片垂、水字瓶、蒼海波、雁鳴、五個の調べあり、是等をもつて五備の理數を悟るべきであります。

(三) 陰陽和合

天地の元氣分れて、茲に相反對の性徳を有する二様の氣となるので、一を陰と云ひ、今一つを陽と云ひます。都べて萬物の化育は實に此の兩氣の消長によるものであります。畢竟するに水火寒暖の外はありませぬ。暖氣滿つる時は寒氣之を鎮め、寒氣滿つる時は暖氣之を暖め、此の和合を以つて萬物を保生するので、之を惣稱して陰陽となづけるのであります。これを物に就いて云へば、日は陽で月は陰であります。又火は陽で水は陰、南は陽で北は陰、天は陽で地は陰、春は陽で秋は陰、夏は陽で冬は陰、晝は陽で夜は陰、上は陽で下は陰、男は陽で女は陰、等其外大と小、角と丸、表と裏、左と右の如く、すべて陰陽の備はらぬものはありませぬ。

扱又孤陰は生せず獨陽は長せずと云つて、和合せざれば物事は成就しませぬ。故に「天地の配は陰陽を以つてし、人生の偶は夫婦を以つてす。陰陽和合して

後雨澤降り、夫婦相和して後家道成る。」とかや、元來陰陽は和合しがたきもの様でありますけれども、此の矛盾したる二つのものを結合せしめる事は、必ずしも無理な事ではありませぬ、今日の物理科學でも遠心力と求心力、陰電氣と陽電氣、或は積極と消極といふやうに、互に相反してゐるものが相俟つて其効を奏すると云ふ事は確定義で、いづれ天地陰陽兩氣の和合に依らずしては、何一つとして成就することはありませぬ。

されば花道に於いても悉く是等陰陽和合をなすを本とするので、苟且も陰陽兩氣の通せざるものは決して用ひてはならぬのであります。苔める花は陰であつて開いたのは陽、半開は苔にあらす開きに非らず之れ和合の形であります。又苔一輪を入る時は陰中の陽とし、開き一輪は陽中の陰とするのであります。又右に指して出でたる枝を陰とし、左に指して出でたるを陽とするので、下なるを陰とし上なるを陽とし、左右上下共に縁をとつて和合せしめるのであります。右に進むの性あれば左にめぐる氣をそなへ、左に進む性あれば右にめぐるの氣

を備へるので、之又和合であります。葉も又同じことで、右を指すは陰、左を指すは陽でありまして同様にいでしは和合せず、左右に分れば自ら陰陽の位置はる故に、茲に縁を取つて和合するのであります。葉と葉とつき重なり合ふた處は縁なき故に和合せず、程よく離れたる處に縁をとつて和合するので、上下對ひ合ふたる處の陰陽も、其中に縁を取つて和合するのであります。

されば此の縁をとるといふ事は、是れ插花和合の法に於いて最も肝要なる點であります。もし萬やむを得ずして縁なき所にいて縁を求めるときは、肉眼を離れて心眼の通ずるところに依つて、和合せしめるのであります。尤も是等のことは、次に記述する處の虚實の取扱ひに依つて出づるので、巨細は茲に盡しがたく、實地修練の功によつて之を悟り得るのみであります。

(四) 虚實等分

抑も虚實は陰陽の兩氣の如く、萬事必然たるもので、而して互に孤立しがた

いものであります。元より虚を去り實を専らとするは望む所でありませぬ。たとへば陰陽の兩氣に依つても、それでは何事も出来るものではありませぬ。たとへば陰陽の兩氣に依つて萬づの事が成立するのと同様、虚實の二義によつて物事は成り立つので、又天地の巧用をなづけて云ふ所の造化の如くであります。造は造り出すので春季花葉を生ずるがごとく、化とは形を變へ或は又消え失せることで、是れは冬季落花落葉する如くであります。造は實で化は即ち虚。造あるが故に化し、化あるが故に造るので、造化は斯の様にして止む事なく、虚實も返還して互に暫時も相離れざるものであります。

『水至つて清ければ魚住まず、人至つて深ければ交友少なし』とやら。勿論人は正直潔白でなければなりません。同じく潔白といふ中にも中庸があります。其度を過せば頑固偏屈となり、所謂融通のきかぬ人となつて却つて爪弾される様に成ります。それで人と交際する上に就いても時には表裏と云ふことも是又罷むを得ぬ所のものであります。

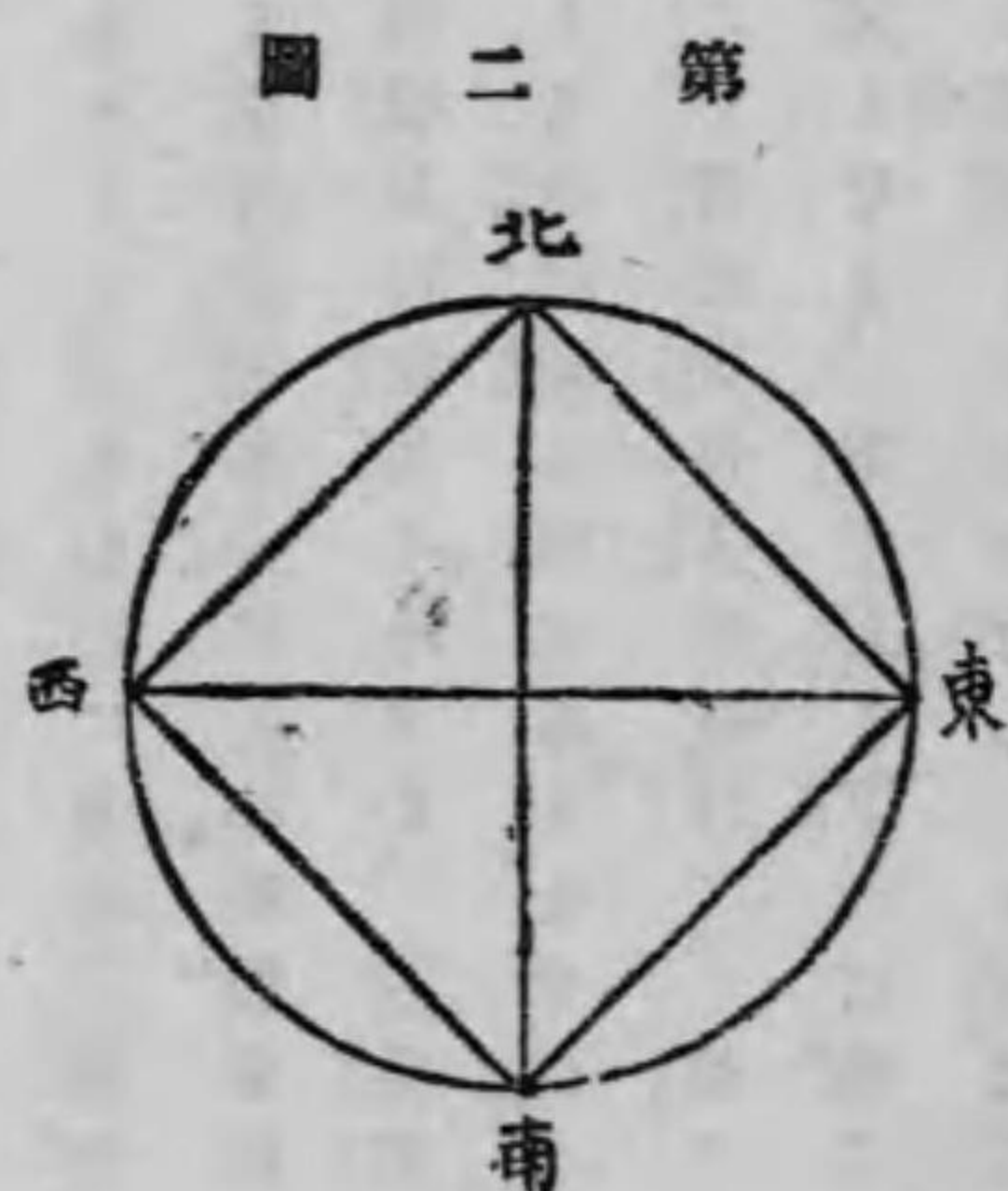
花に虚實を備へて活けることは、陰陽表裏の花矩に規つて出でたので、即ち草木が自然に出生するは實で、是を手折り切り挿花として用ひるのは抑も虚であります。始め活けんとする所の草木は、切り亂して形の備らぬものでありますから、之れ實から出た所の虚で、これをして今實なる花矩を以つて虚なる花の姿を組立てるのは、即ち虚から實に移るのであります。既に組立て、草木自然の姿形を備へる時は、元の實に返つて花矩は即ち虚に返るので、是又實から虚に移るのであります。斯の如くに虚實は絶へ間なく繰り返すもので、一花一葉さては一つの花瓣にも皆虚實があつて、熟練の上は虚を活けて實とし、實を入れて虚となし、虚々實々變化自在で而かも自然の矩に叶ふ事となるので、彼の數百瓶同じ花を活けても同じ姿の出来ないのは、つまるところ此の虚と實の二つを以つて花矩を扱ふが故であります。

さて又花道に於ては、虚實を等分にするを以つて真理とするので、偏重偏輕は何れも之を避けなければなりません。何事に依らず、一方に偏ることはよろ

しからず、實に過ぎて虚にうとければ、技術としての價値を認める事が出来ず、虚に偏して實を失へば全く私の作り物となつて、夫れは死物であります。強ちに草木出生の自然にのみ拘泥すれば技巧を施すの餘地なく、技術の巧妙なること許りに重きを置けば、出生の自然に背く事となり、共に花道の本旨に違ふものであります。さればあく迄草木本性の實を失はず、法を守つて而かも巧みに姿を調へたる處、是れ挿花の本義でありまして要は虚實等分の外ありませぬ、これに依つて花を活けるには此の心を守るを第一としなければならぬのであります。

(五) 花矩の起原

「大極別而、清輕者上爲天、是陽也。濁重者下爲地、是陰也。冲和氣者爲人。謂之天地人三才云々。」
茲に圓形あり、東西南北の方位を假りに定めて各其方向に線を引きますと云



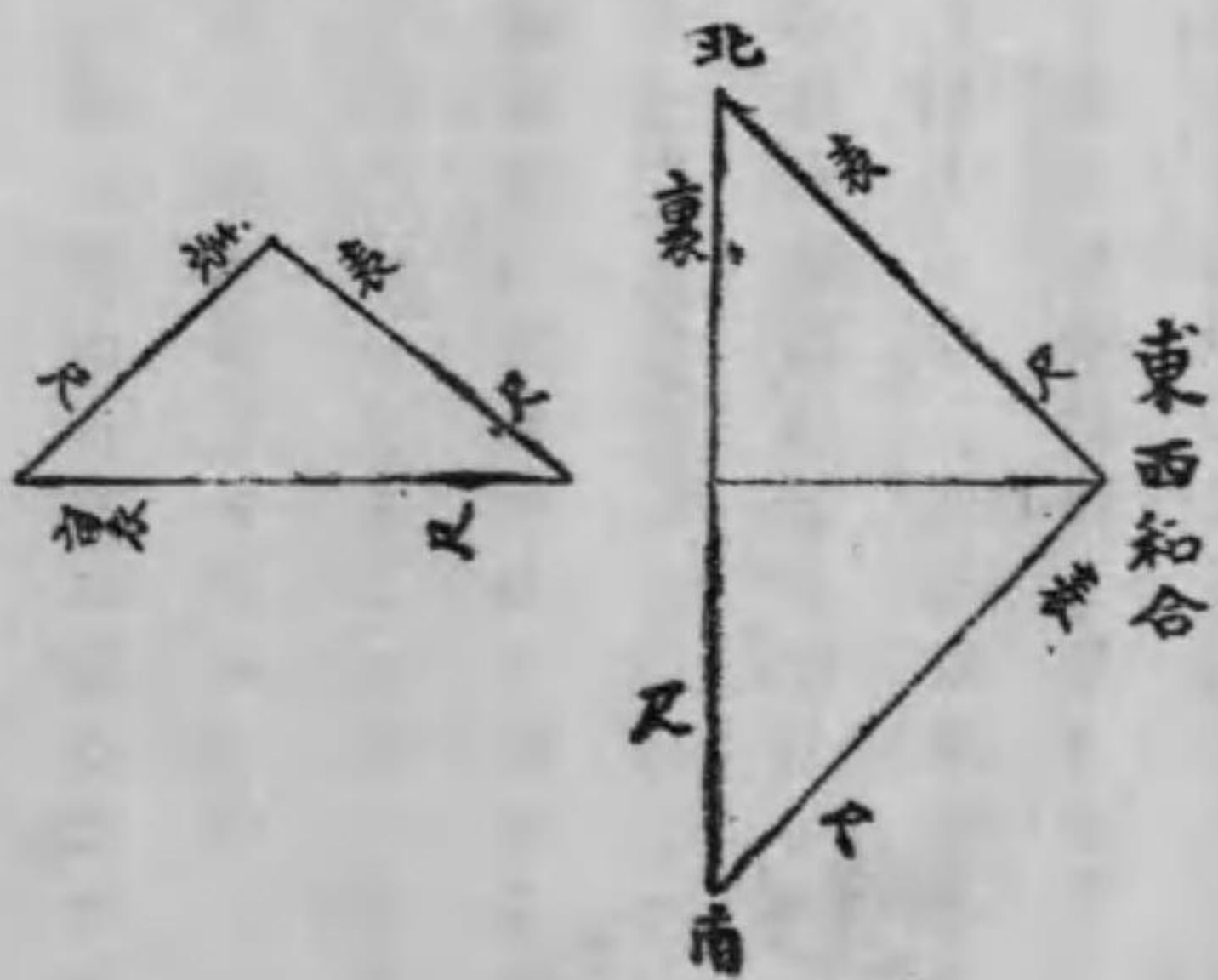
回花矩の起原

ふと四角形となります。天地の元氣が分れて陰陽の兩氣となる理由に基いて、之に南極から北極に向つて縦に線を引きますと左右二となります。左右は即ち陰陽であります。陰陽は和合せしめなければなりません。東西の兩極を合せ、即ち陰陽を和合せしめますといふと、茲に三角形が出来るのであります。此時和合した所の二等邊は表の尺であつて、南北の縦に引いた線は裏の尺であります。即ち二等邊の長さが表尺の一尺

ならば南北の縦の長さも又裏尺の一尺となるので、表裏の尺が相合して備はるのであります。(第二圖参照)
扱又此の三角形を東西相和合した所の角から二つに切り、即ち左右陰陽を和合せしめると、又小形の三角となります。然し以前の表尺は却つて裏尺となり、裏

尺は即ち表尺と變るので、表裏は陰陽虚實
 であります。此の様にして三角形を二つに
 して左右陰陽和合せしめて行けば、表裏の
 尺は交互に反覆しますが、三角形は幾度す
 るとも遂に變る事はありませぬ。此の三角
 形こそ實に天地人の三才で、軽くして上れ
 ば天となり、重くして下れば地となり、冲
 和の氣即ち陰陽和合したる所は人となるの
 で、又陰陽和合する毎に表裏の指尺の交る
 事が、取りも直さず虚實變化の起る所以な
 のであります。(第三圖参照)

第三圖



插花の形は即ち此の萬代不易の三角形を以つて其の基となし、句弦の姿を圓
 へ魚鱗の形に備へて、和合虚實に取り扱ふを規矩とするので、之を縦にしたの

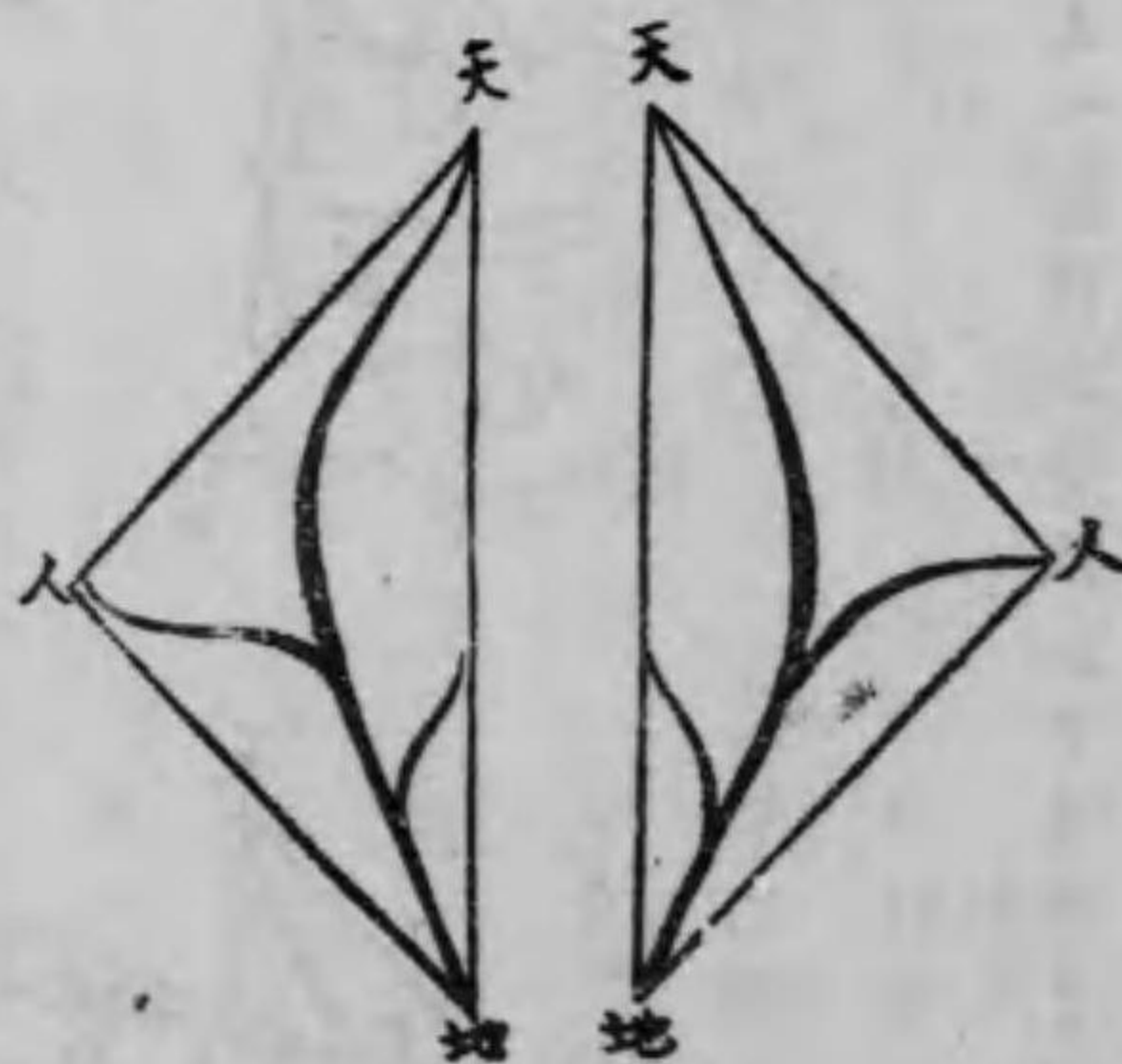
横鱗客位

陽の入方



縦鱗客位

陽の入方



同主位
陰の入方

第四圖

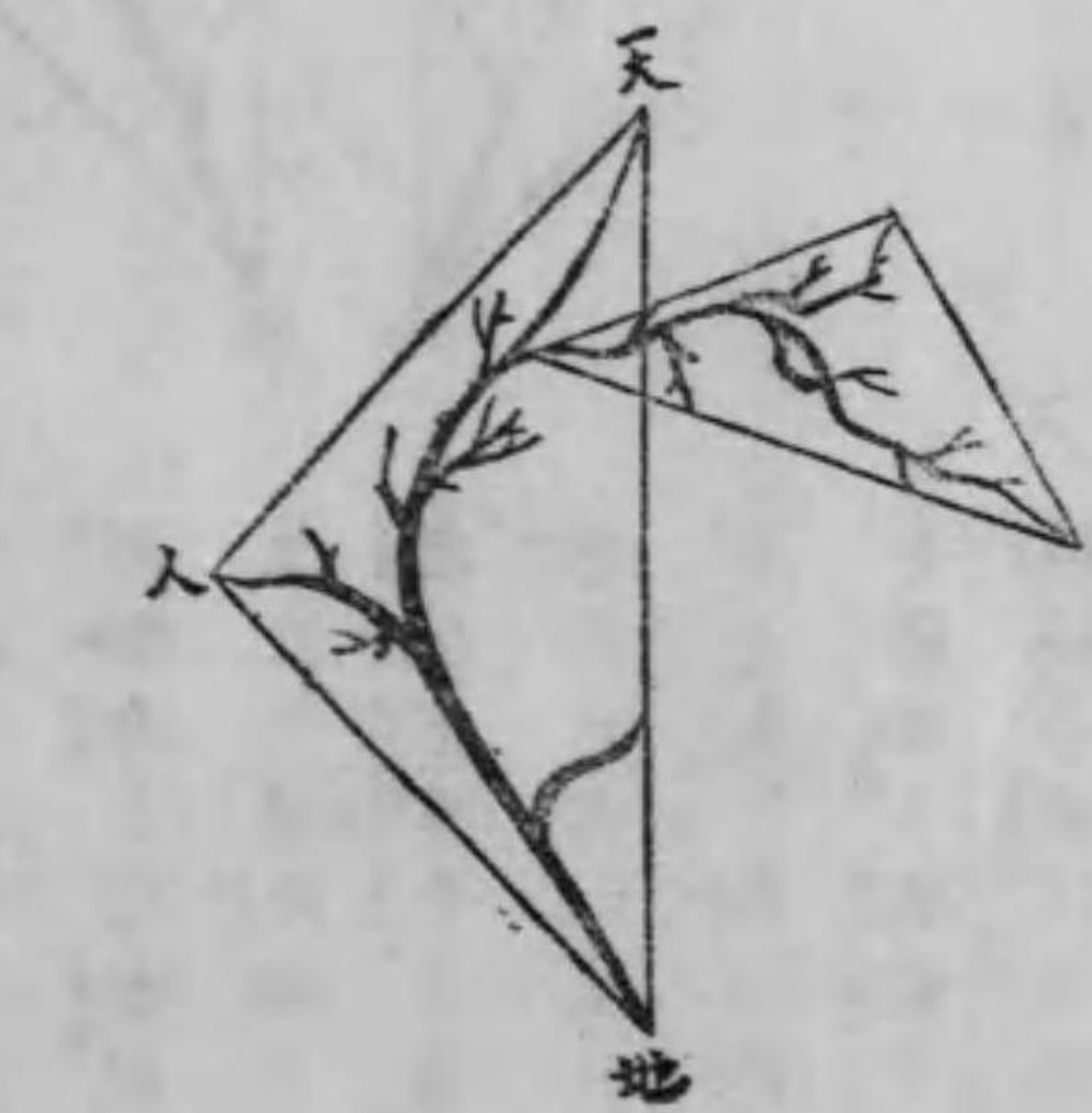
いふのであります。(第四圖参照)

扱又花を挿るには、天地人の三枝をもつて其形を備へる本とするので、之に
 随つて或は扣、添なぞ幾つも増し加へて、鱗の如くに姿を作るのであります。

を縦鱗といひ。横にし
 たのを横鱗と稱するの
 であります。夫から東
 西和合した所が左に向
 ふたのは陰即ち主位で
 之を本勝手とも或は右
 勝手ともいふので。此
 の反對に右に向ふたの
 を陽即ち客位で、之は
 逆勝手或は左勝手とも

それで天地人の三枝ををいて其他の小枝は数を限らず、天に五七本、地人に三

圖五第



五本と入れて行けば、たとへ數百本を入れるも全く規矩に悖ることはありませぬ。尤も曲花即ち流しの枝は三才の規矩に背戻するがやうに思はれるけれども

所謂虚實の法で、既に其枝は三才の格より伸びてはをるが、其風流なるを捨て

圖六第



二重切掛花器
縦横鱗花矩圖

たるごとく、一つの花に二つの格を作つてゐるのであります。(第五、六圖参照)

(六) 花形と眞行草

花形の起因概説は既に前項に申述べました通りであります、尙其姿の作り

かたに依つて三種の体に分れ、九様の態に區別することが出来るので、之を三
体九形と稱へるのであります。

東坡曰く「眞生行、行生草、眞如立、行如行、草如走。」と即ち眞の花といふ
は三才正しく、稍立ち氣味にスリとした形で。行の花は枝の矯め方フツクラ
とゆたかに幾分か趣きを添へて、如何にも楚楚として歩んでいもゐる様に、恰
も中庸に活けたる形であります。又草の花といふは出来得るだけ風流に、充分
に枝を矯めて入れるので、宛然人が走つてゐるやうな形に見えますから、或は
之に走の字を用ひる流もありません、眞は物事を思慮することがごとく、行はをだや
かに、草は勇ましくと云ふ心からして、眞行草を又智仁勇ともいふので、三體
の骨法を示せば第七圖の如くであります。而して眞の花は体に勢強き枝葉を多
く用ひて用留の枝を軽くするので、行の花は花の半ば用の枝に強き勢ひをもた
せ、草の花は留に花葉を多く入れ水際を清潔に挿けるのであります。

九形は譬へば立花に九品のさし方があると同様で、先づ眞に眞行草あり、行

に眞行草あり、草にも又眞行草があつて、則ち眞の眞、眞の行、眞の草と。行

の眞、行の行、行

の草と。草の眞、

草の行、草の草と

の九となるのであ

ります。眞の眞と

いへば眞の躰の花

を今一層直ぐに活

けた形ちでありま

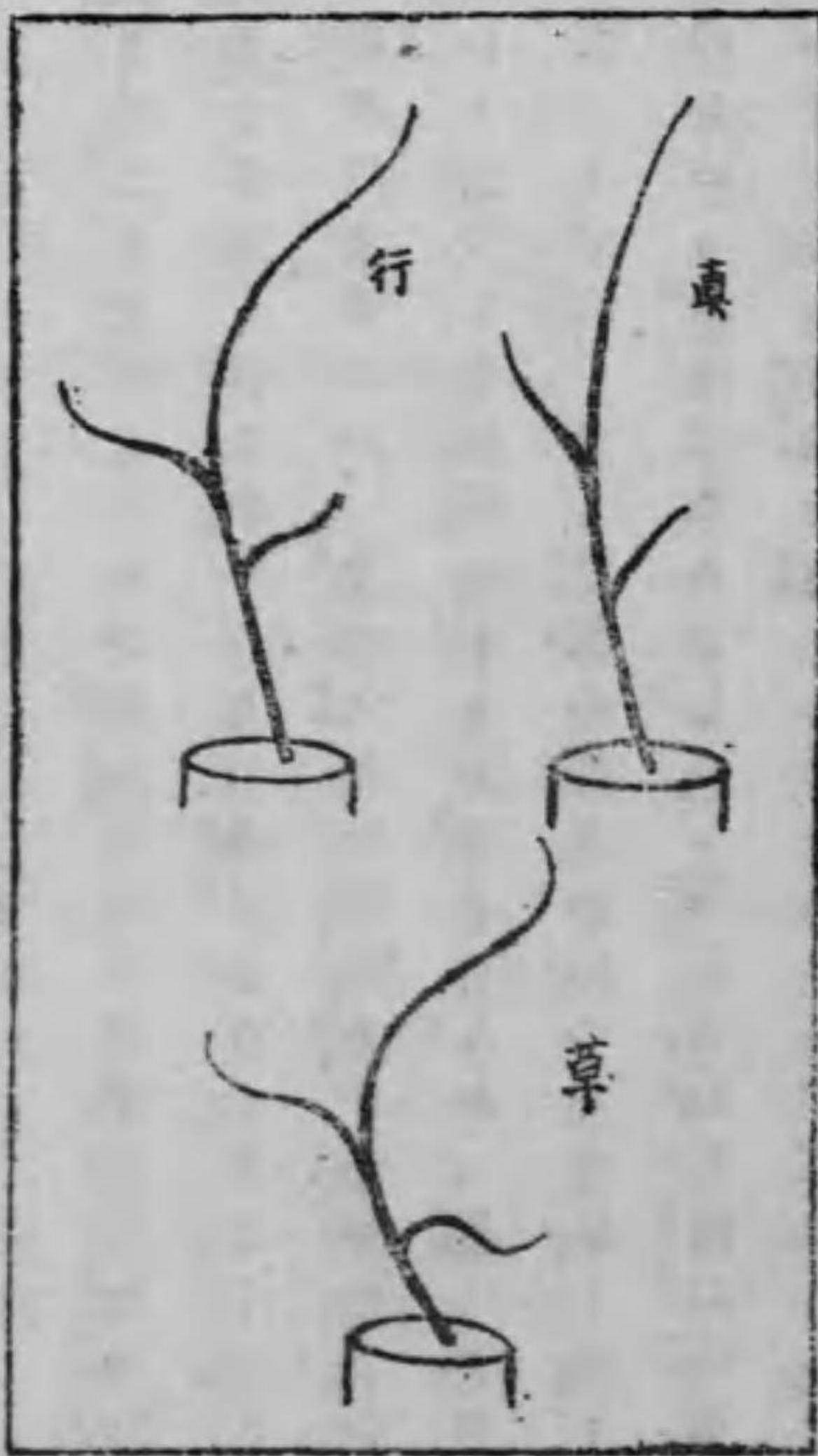
して、行の眞は行の躰の花に眞の形を稍や加味したるもの。草の眞も又草の躰

に眞の花の風致を和したもので、其の他は推して知るべしであります。

尤も横鱗の花形にも、三体九形の品あることは、勿論堅鱗の花同様でありま

す。

第七圖



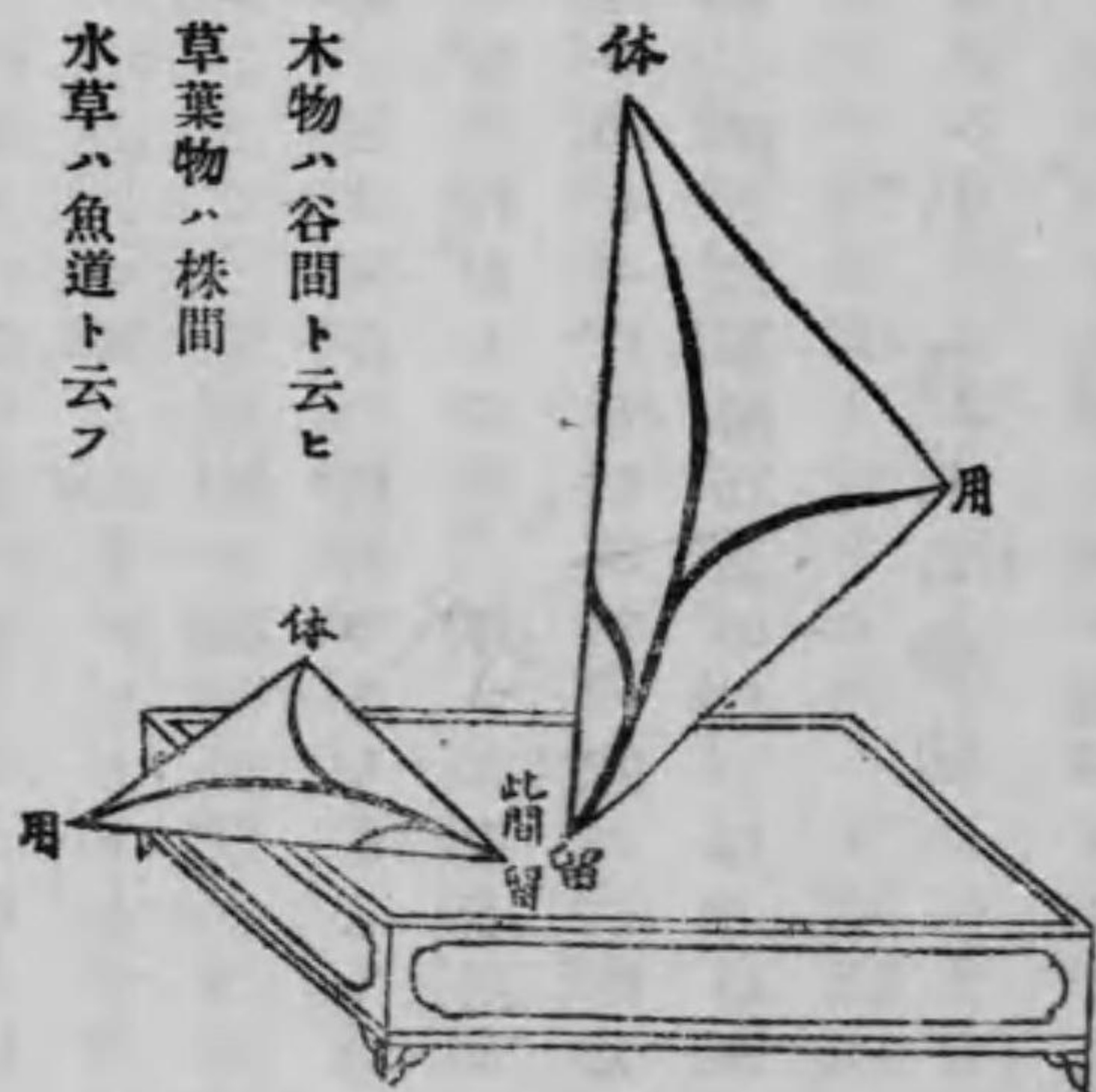
(七) 挿花の寸法

挿花の大小寸法は花形の如何にはよらず、花器に相應してゐなければならぬので、花器の割合よりも花の大き過ぎるも不恰好でありますし、又小さくても見悪いものであります。

凡そ花の寸法は、花器の高さの二丈ケとするが定法であります。勿論花器の恰好によつては是より大きくて能く移る事があり、或は小さくてよく移ることもありますから一概にも申されませぬが、先づ大きい位の方が恰好のよいものであります。大きいがいと云つても法外の事も出来ませんが、花によつては花器の三丈ケ迄は苦しくありません。尤も花器の高さを以つて標準とするのは、寸渡切などの様な細形のものゝ場合であります。薄端其他の廣口物なれば、其口の差渡しの際によつて、花の寸法を定めるのであります。併し花によつては、花器の二丈ケに足らぬこともあり、足らぬものは挿さぬとい

ふでもありませんが、それは花の本式ではなく、又風情も備らぬものであります。水盤、馬盂等も矢張り此の寸法に依らなければなりません。木物なれば兎もあれ、草物を活ける時には花器相應の丈ケに足らぬことが多いあります。

第八圖



木物ハ谷間ト云ヒ
草葉物ハ株間
水草ハ魚道ト云フ

回挿花の寸法

されば斯様な時には二株三株、或は五種も七種も花を活けて、是等の丈ケを合せ、其惣高さをもつて二丈ケとすればよろしいのであります。花の形は或は堅鱗とし、横鱗とし、草木により移りよく考へ合すべきで、堅鱗兩隣客位の花入方は第八圖の如くであります。

扱又天地人三枝の寸法は、以

上花器に相應した所の花の高さが、則ち体の寸法でありまして、これからして用、止の寸法をも割り出すのであります。通例体の枝の三分の二が用の枝の寸法でありまして、又其用の枝の三分の二が止の枝の寸法となるのであります。これ天地人三才和合の規矩でありまして、これによつて正しく活け上げたる花の姿は自ら三角形となり、体から用と用から根本への尺は相等しく、又用から留の枝迄の尺も一致するので、体から用又用から本までは互に表の尺となり、体から本へ指したる所は裏の尺となるのであります。

(八) 挿花の骨法

挿花の根本たる句弦三才の花矩は如何なる場合にも決して變ることはないけれども、其花形は所謂虚實の理法に依つて種々多様に分れるので、大別すれば縦横、三体、五變化、七曲二十一種となります。縦横は即ち縦鱗と横鱗、三体は表葉の体、裏葉の体、真向の体で是れを正体と名稱します。七曲は縦鱗の用流

し、体流し、体添流し、内用流し、体受流し、留流し、と横鱗の用流しで、五變化といふは体流し變化之曲、体添流し變化之曲、用流し變化之曲、同鈞花入之曲、横鱗變化之曲、是等に尙一つの變體を加へ、三体を各々の曲に配して總て二十一種の花形となるのであります。

是等花形の大略を圖に示したるものを骨法と稱へるので、勿論實際花を活ける時は枝葉の數は限りませぬが、大体其枝葉の配置を之に準據すべく定規の役枝、總体の骨格を顯すものであります。茲に流しといふは三才の花矩より伸びたる枝をいふので、もとより不要の枝ではあるが、さりとして又其枝振りが頗ぶる風流で切り捨てるに忍びず、その儘止め置いて之を愛弄するので挿花の本意ではない、故にこれを曲と稱へるのであります。總じて挿花はこの流しの枝の遣ひ方によつて色々變化の形容を作れるもので、枝葉の模様により様々風流の形容に活けるを手練とも巧者ともいふのであります。されば熟練の上は一定の規矩に拘泥せず、姿の變化は自由自在で挿花の妙味は實に茲に在るのであります。

す。去り乍ら初心の間は勉めて正体を能く活け習ふことが肝要で、さすれば曲花を活ける場合にも、花形を作るに誠に都合のよいものであります。以下項を願つて申述べませう。

一、正体と變体

三体のことを説きまするには、單に骨法のみを示したのでは解り兼ねはしないかと思はれますから、便宜上茲に葉蘭を活けたる圖を掲げて説明いたします。勿論三体は葉蘭に限つた譯ではなく、すべての草木にわたつて活けるので、場席の模様、花器の風流、挿花の材料即ち枝葉の格好に應じて、いづれとも定むればよろしいのであります。併しこれを葉蘭で活けるには非常に難易の相違があるもので、稽古の順序をいへば先づ最初は表葉の体、次ぎに裏葉の体を活け習ふのであります。其間には又曲花、則ち流しの遣ひ方をも練習するので、眞向の体は一番六ヶ敷く餘程習練の上でなくては活らぬものであります。第一表葉の体は最も普通の活け方でありまして、第九圖の様に体用止三才の葉

が、いづれも相互に向ひ合ふ如く葉蘭の日表を出して入れるので、是れ即ち和合であります。体に副うて稍や低く入れたる葉は体受で、用に着いて日裏を見せたる葉は用添であります。則ちこれにて五備調ふので、花の姿勢は立ち過ぎず倒れず、体は弦弓の形に矯めて而して其の格先は根元に垂直になる様にするのであります。

第九圖



裏葉の体是れは体の葉莖の矯め方が逆になるので、姿は第十圖の如く大分變りますけれども、全たく花矩に異動はありませぬ。裏葉は名のごとく日裏を用の方に向けて入れるのであります。全たく日裏ばかりを出したのでは、体

第十圖



合にいふ体受は、即ち体添といふのであります。されば裏葉の体は表葉の体が
 一轉して向きを更へたこととなるので、自然体受と体添も轉動して其位置をか
 へるのであります。表葉と裏葉の差違は唯体の變化するのみで、其外少しも變
 りはありませぬ。但し体の格先を水際に戻して垂直にするには、葉を矯め返し
 たる部分を少し前方に振り出す様にしなければならぬのであります。

用相反して和合せぬ
 故に、其葉を又矯め
 返して日表を顯はし
 三才互に向ひ合せる
 ので、体の葉の下か
 ら出て向ひ合ふた葉
 を体受といひ、用と
 對した表葉の体の場

眞向の体は讀んで字のごとく、体の葉の日表を眞正面にして直立せしめる
 ので、体受、体添も又日表を顯はして之に並列せしむること、第十一圖のごと
 くであります。而して
 体の矯め方は莖の中央
 と葉際之二箇所を、反
 對にくの字なりに矯め
 るので、体は正しく直
 立して、其格先は矢張
 り水際に垂直にならね
 ばなりません。体受、
 体添も又体と同様に矯めて着かず離れず、同じ程の間隔をとつて並行せしめる
 ので、体の格先より体受迄と、体受の格先より体添までの寸法は、凡そ三と二
 位の割合で丁度格好であります、尤も此の花は少し低い處より体用が分れて出

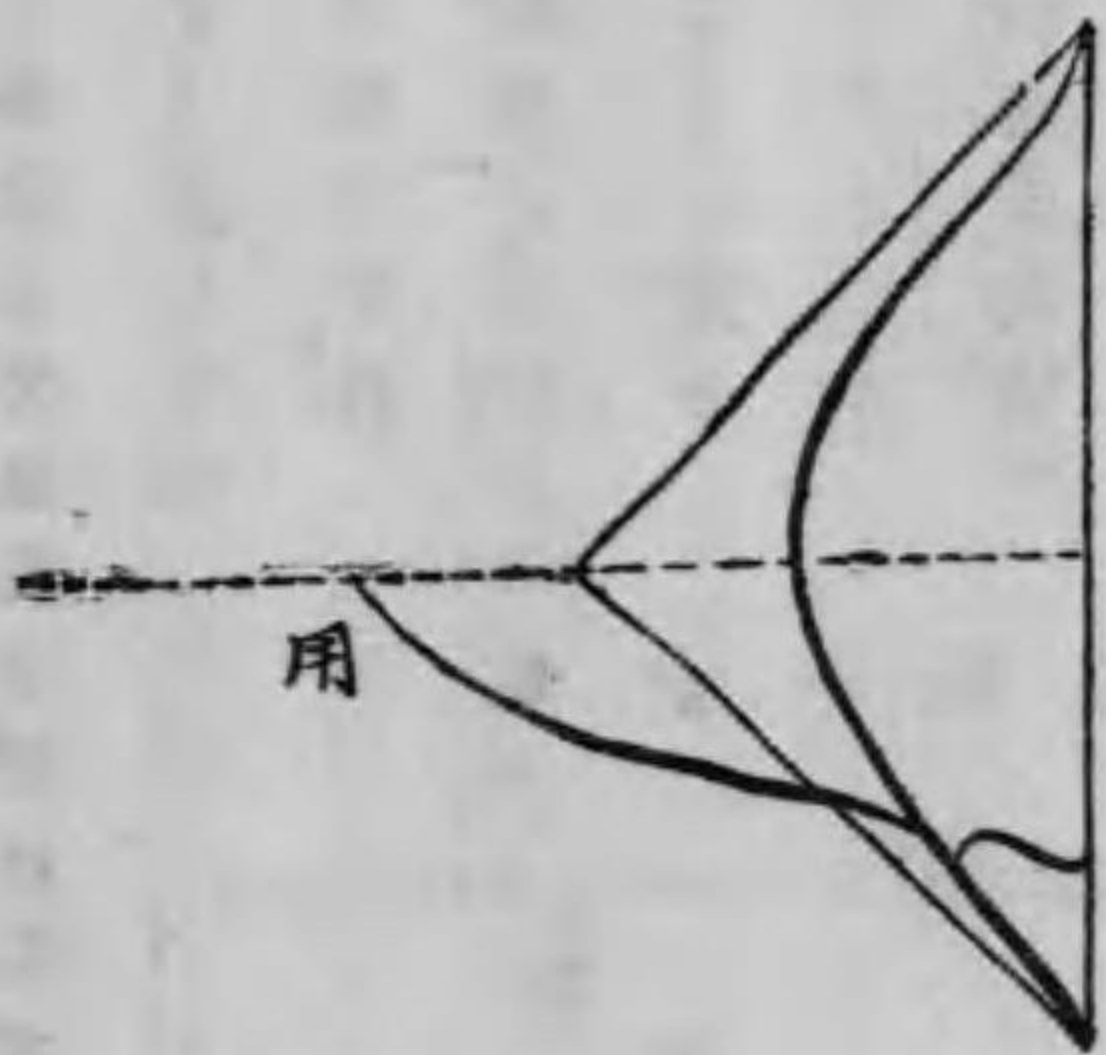
第十一圖



る故に、用を些か短かくし、体と相對するやう格先を充分前に廻して入るがよいのであります。

變体の花は好んで活くべきことでもないが、正体の花を入れるに枝葉の都合悪しき時に用ふる活方で、其骨法は第十二圖の如くであります。即ち体及び留の

体 止



あるが、正しく向ふて見れば其格先は矢張り花矩に符る譯であります。此の花

は用の枝が長く伸びてゐる爲めに、奥行の深い床の間には別して差支へはありませんが、浅い床の間には枝が差し出で置くことができませぬ。

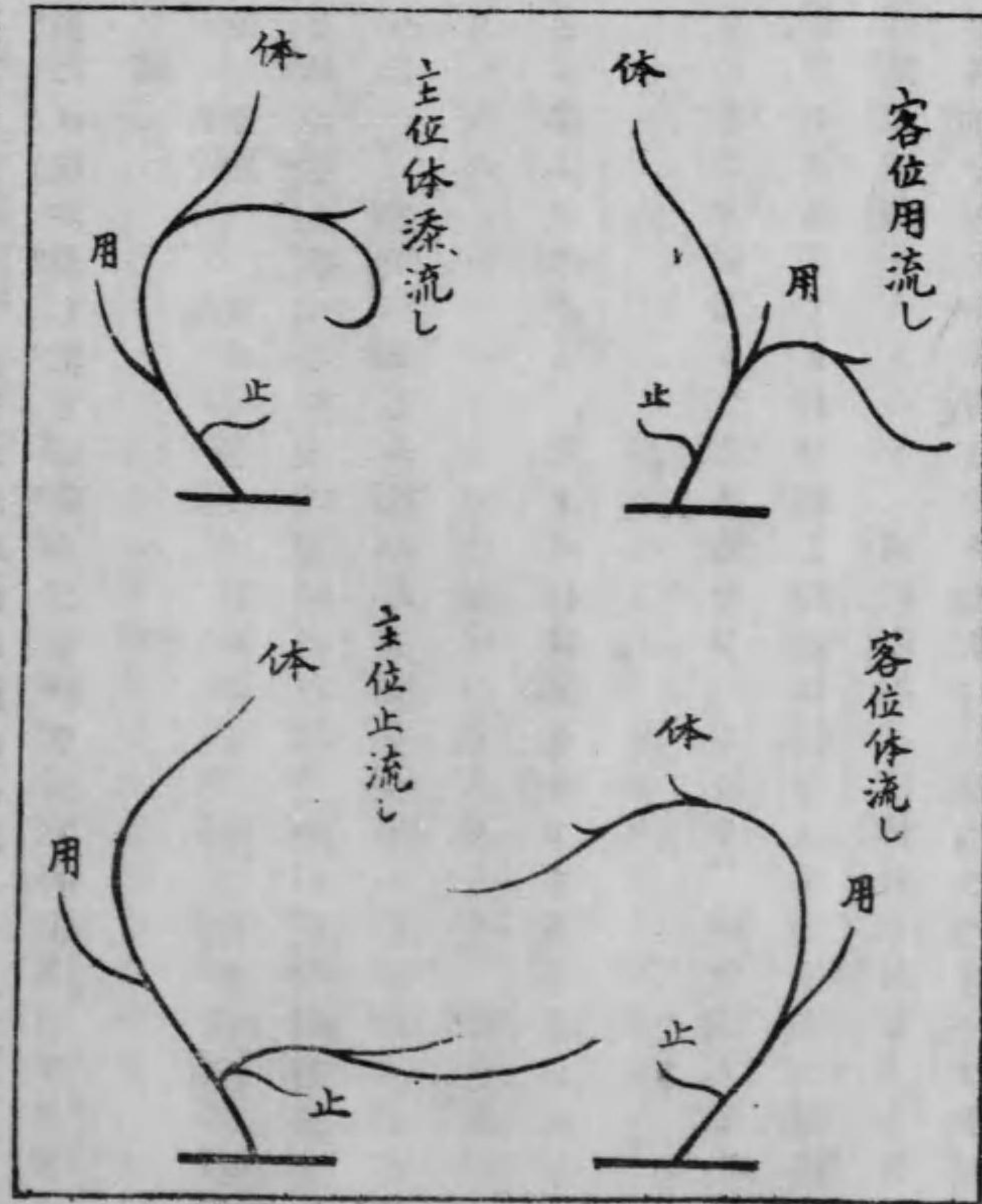
二、曲花

總じて曲花の用は眞の形容で、其格先を上にかはせ、体は花草の形で充分に矯めて成るべく多く用に寄り添へるやうに入れるので、留も正体の花よりは少し小振りなのがよろしい、是即ち流しの枝のある故で双方に手を擡げたる形容とならぬやう、又流しの枝の障りにならぬ用意なのであります。此の様に三枝共其入れ方は正体とは違ふけれども、三才の格は堅く守つて異なることは無いのであります。

流しの枝は此の三才の格より出で、又別に格をつくるので、一版にして二つの格をなすが曲花の法であります。されば流しの枝は何處たりとも一箇處に限るので、体に曲あれば用留に曲をもちひず、用に曲あれば体留に曲をもちひず、又留に曲あれば体用には曲をもちひる事はなりません。流しの遣ひ方の骨法は

あらし第十
三圖並に第十
四圖の如くで
あります。体
流しと体添流
しとは只流し
の枝の少し高
く出ると低く
出るとの相違
があるばかり
で、格先は真
直に伸ばすも
内へ曲るも随意で、

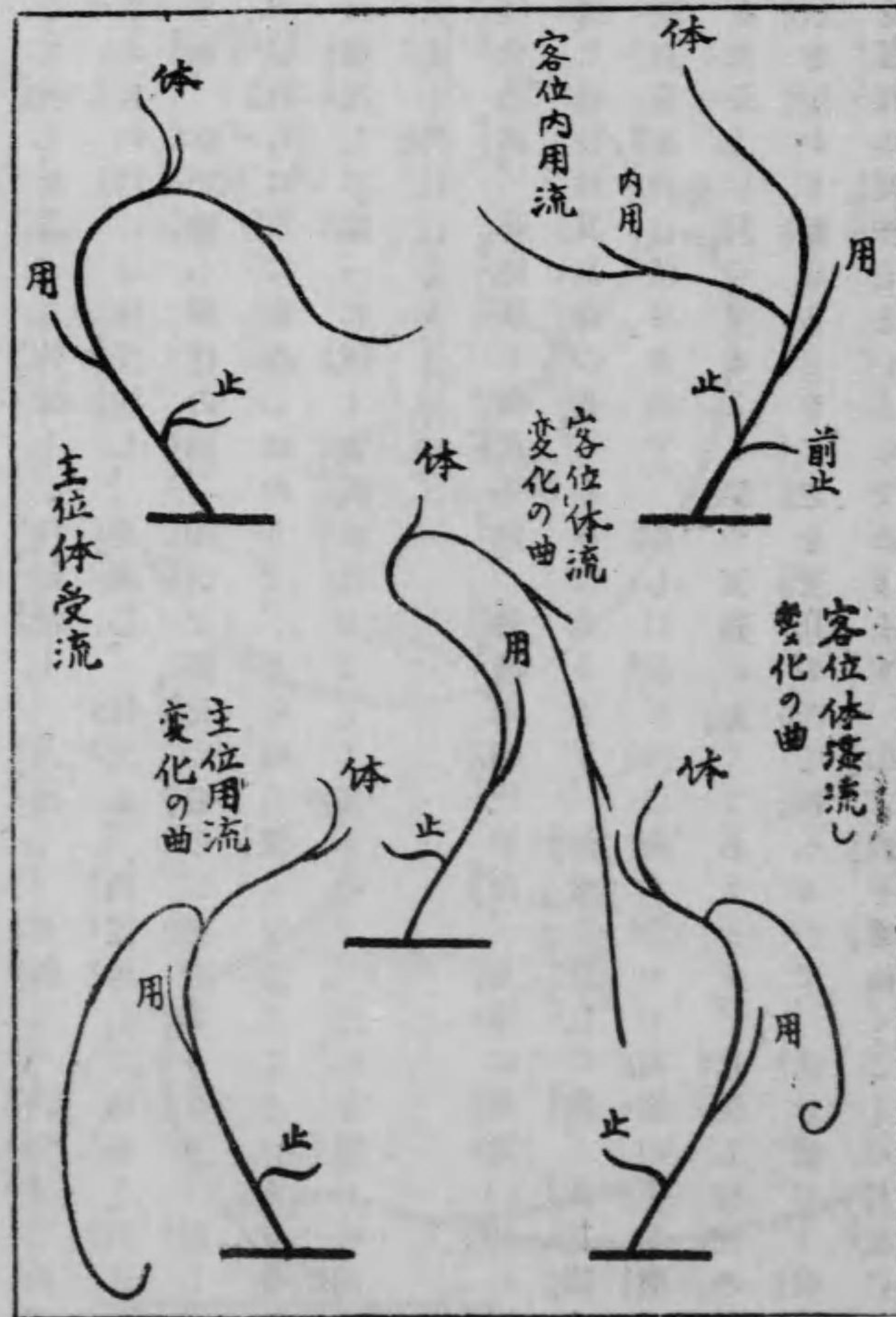
圖三十第



体受流しといふも又流しの枝の遣ひ方に大なる變りはなく、

これは表葉の体の時と裏葉の体の場合との相違に止まるのであります。通例表

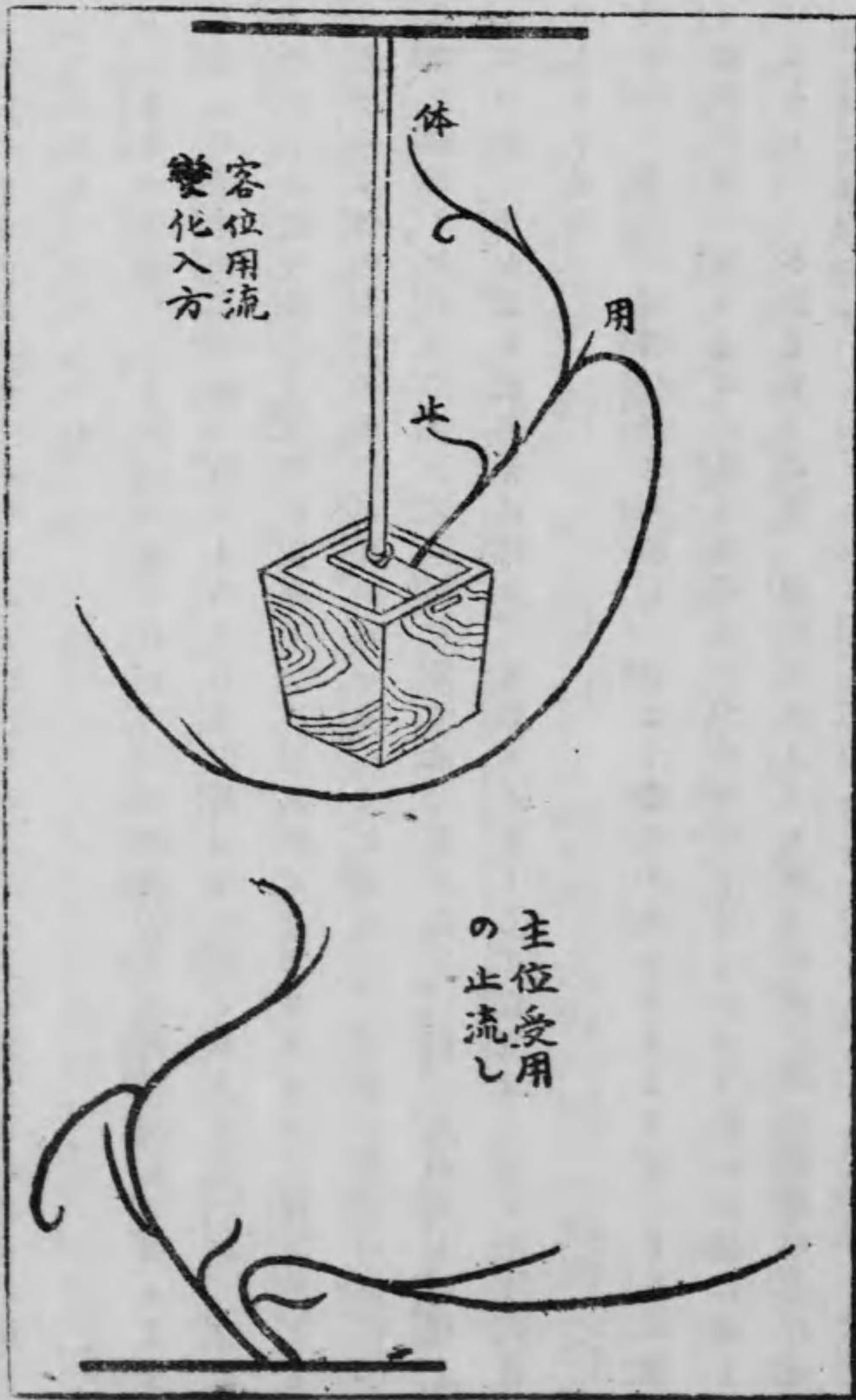
圖四十第



葉の体にして流しを遣ふは体流し、体添流し、用流し、止流し、内用流しの五
 種で、裏葉の体の時には体受流し、用流し、留流し、内用流しの四種と外に体
 流し變化の曲、体添流し變化の曲、用流し變化の曲の三種があります。而して
 真向の体の場合には單に留流しばかりで、其他に流しを遣ふことはありませ
 ぬ。されば留流しは第一に沢く實際活けることも多いので、三体を通じて遣ふ
 流しの枝は此の外にはありませぬ。

用流し變化の曲、体添流し變化の曲、体流し變化の曲、是等は裏葉の体に限
 るので、流しの枝は其出處の異なるのみであります。用流し變化の曲、釣花器の
 本方は表葉裏葉兩体に活けるので、流しの枝は内に強く矯めて花器の下を潜ら
 せ、格先を充分上に向はせること第十五圖の如くであります。用流し變化の曲
 は流しの枝を短かく縮めるときは之を受用の花と稱へるので、株を預けて留流
 しに入るを受用の留流しといふのであります。曲に曲を重ねることは挿花に禁
 ずること故に、これは株を分け二つの花として取扱ふのであります。尚双方

第十五圖



客位用流
變化入方

主位受用
の止流し

に枝を擴げぬやう用の流しの枝を成るべく短かくし、其格先を充分前付に振り出してをかねばなりませぬ。

以上曲花の大体のことは述べましたが尙一種特異の花は内用流しであります。内用流しは表葉裏葉兩体に活けるので三才の格は他の花と更りはないが、体の後方中央より枝を流して又別に前留といふを入るのであります。内用流しと稱する所以は体の句弦の内に又用の格を備へるが爲めで、常規の三才の外に体と内用と前留とを以つて又三才の格を象る故であります。但し此の花も兩枝とならぬやう、用を成るだけ体に添せ、本留も小さくして直立せしむるやう入れねばなりませぬ。

此の外の曲花には尙横鱗の用流し、同じく變化の曲がありますが、それは便宜上横鱗の項に譲ります。凡そ曲花は一つの形容とならぬやう色々の様に廣く活けるをもつて本旨とするので、規矩はありても無きが如く手術熟練の上は花形の變化自在であります。されば七曲五變化とはいへども夫れは只大体の骨法

に止まり、彼此應用して活けるならば百十餘種にもなるので、四季様々の草木を手練に任かせて隨機應變虛實をつくして活けるときは、縦へ數百瓶を置き並べるとも決して同じ姿の出来るものではありません。

三、横鱗

横鱗は三才の花矩を横にしたる形で多くは掛花器、釣花器或は二重切三重切に活け、又は廣口、馬盃等に他の花の應合ひに入れる花であります。其骨法は第十六圖に示したることく、用の枝を句弦に矯めて其の格先は根元と水平の位置にをくので、体の枝は用に對はせその格先は用の格先より根元までの中央に備へるのであります。而して留は斜めに前に出して入れるので、用の格先より根元までの差し矩より伸さぬやうにしなればなりませぬ。掛け花器に活けるときは少々体の枝を高くしたが移りよろしく、二重切三重切の下口等へ入れるときは稍々低い位が上の花の障りにならなくてよろしい。又掛け花には花矩を正しくして用の枝を充分に矯め、其の格先を根元と水平に入れなければなりませぬ。

横鱗客位 用



圖 六 十 第

せぬが、置花の場合には花体は真で少しく立気味に入れた方が活けよくもあり
 又移りのよいものであります。

用流しの花形は圖の如く用の下に枝を流すので、これは多く蔓物を活けると
 きの入れ方でありませぬ。其の長さは別に制限はなく姿も一定してゐる譯でもあ
 りませぬから、大凡堅鱗の曲に準ずればよろしい。尤も草木の何物に限らず枝
 先のだらりと下つた儘では弱き性となり、天にむかへば勢ひ強くなるので、枝
 先きはいづれも皆上に向はせて置かねばなりません。

變化の曲は全たく變態で、横鱗の花を留の枝の上より矯めたる姿であります。
 これは矯めたる部分を別にして体用留の格先をもつて花矩の格を作るので、用
 の枝を真直に其格先を矯めたる處と水平にするのであります。掛花器にも置花
 器にも是を單獨にして活ける事はなく、前第十五圖のごとく留流しとして株分
 に活ける時か、或は船の鱗花、置釣瓶の應合ひ花等の場合、又は寄せ筒活けの
 ときに用ふる花形であります。(是等のことは後章に詳しく説明いたします)

(九) 禁忌

草木を花瓶に移すにいか程花体が立派に挿してあるとしても、枝葉に禁忌ありては花にはなりません。禁忌とは即ち忌み嫌ふことで、軽々しく看過すべからざる事項であります。禁忌はたゞ其花の美を損ふのみならず人をして不快の念を生せしめ、祝儀等の場合には之が爲めに如何なる支障を生じないとも限りませぬから、花を活けたる時は慎重の態度をもつて充分の注意を怠つてはなりません。

第一挿花に禁するものは五穀、野菜類でありまして、其外名の知れぬもの出生をも辨へざる草木は、決して活ける事はなりません。

何程美麗に活けてありましても、其枝葉が僅かたりとも花器や其他の物品に觸れてゐてはよろしくありません。草木共に根元の捻れた枝を左右へ入れ違へたのはひがきと云つて忌む事でありませぬ。枝葉が真直ぐに伸びて人を指し、地

を指し、掛物を指すのは悪しく、枝先きは皆上に向つてゐるがよろしい、併し又真直に直立して天を指すのも不可ませぬから、品よく矯めて置かなければなりません。兩枝といつて双方に枝が出て引張り擴げた様にならぬやう、右に枝が長ければ左の方は短く必ず一方に定まるので、左右に同様に垂れた枝や、残らずうづむけになつた枝も禁じます。一つの枝を他の枝で横に見切る時は十字の如くなつて姿よろしからず、又見切りは則ち身きりに音が通じるをもつて大いに嫌むことであります。弓を引く形になつた枝は客に不敬であるから禁じるので、等しく丈の揃つた枝や、手箒木のやうに一方のみ枝葉の繁くついたのは陰陽分ちがたきを以つて忌むのであります。水際に枝と枝の間が隙くのは最も嫌ふことでありまして、後から前へ又前から後へ廻つた枝も不可ませぬ。甚しく屈曲したる枝は一寸面白く見へますけれども、病の枝で性悪き故に用ひるものではありませぬ。

色切といへば上下赤色の花ある中に白色の花を遣つて、赤い花を見切ること

でありまして、見切りは禁忌でありますから色々の花を取り合せる時は、白、紫、黄、紅、赤、と云ふ順序で上からして遣ふのであります。鏡の様に真向きになつて花の真中を見せたのはよろしくないで、一樣に揃つて大小のないのも不可ませぬ。同一の間隔をもつて段々となつたのを嫌ふので、尙紙を打つた様に並んだ花や、葉蔭に隠れた花、うつむいた花や、振り返つて顔を見合せたやうに向ひあつた花などを禁じます。

葉物等は大葉で水際を覆はぬ様、或は同じ様に何枚も重らぬやうにし、大小の葉を取交へて遣はねばなりません。就中劔葉といつて平たく細く見へたる葉は大禁物で、長葉物には別して注意しなければなりません。中葉の物を活けるときは枯葉や穢れた葉を取り除き、性弱く下がつた葉もとり去るのであります。木に草を應合ふ時は、草花が後から出て寄り木の様に見へるのは悪しく、又木を包んで終ふことも不可ないので、双方共に根本を顯はして入れなければなりません。木と木の間に草花を挿んで入れる事もならぬのであります。

(十) 草木の性態

すべて草木の出生を辨へ其本性を愛して活けることが挿花の第一義であります。諸の草木を活け花に取扱ふときは、其性を正しくして法を備へなければなりません。もとより草木は皆それ／＼に花に三段の性あり、葉に三段の性あり、枝に三段の性あるもので之れをこれ三段九性とは稱するのであります。則ち花には蒼と半開、満開の三あり。葉は芽含んで後青葉となり遂に紅葉となつて散るので、是又三つの性であります。而して枝にも幹、枝、梢と大中小の三段に伸びる性あるもので、是等の軌範を脱するものとは一つもないのであります。

此の三段の性といふことは誠に大切なることでありまして、陰陽虚實の理も皆此のうちに含まれてゐるのであります。何事にまれ大小、長短、強弱があれまこそ宇宙の萬物象ちをなし、國治まり家齊ふので。男女長幼の序なくして人

倫の道を全うすることは出来ませぬ。諺に「兩雄は並び立たず」とある通り、同様のもの許りでは當底平和を保つ事能はず、大小強弱があつてはじめて和合するのであります。之を一家に譬へて見れば、家族が各々皆主人の如く振舞ふ時は家内に風波絶へずして穏やかなるを得ませぬが、主人は恩威並び行ふて家族を扶養すれば主婦は貞順にして之を補佐し、其他一同能く主人の命に服従すれば、誠に齊然として家庭は圓滿に治まるのであります。又これを譬へば三味線の如きも三筋の糸が太細あればこそ、各々異なる音を出してこれが十二律七十二音となり、彼のやうに微妙なる音曲を奏することができるので、同じ太さの糸を用ひては決して調和しないのであります。

されば花に活けるには草木自然の性態に鑑み、枝を見立るには体の枝は三味線の一の糸のごとく、用の枝は二の糸、留の枝は三の糸の太さに隨がひて、体は長く止は短かく、而して用は其の中庸をとり、花は蒼、半開満開を取り交せ、葉も又大中小を遣ひ分けて入れたならば、陰陽五行自ら悉く備はつて茲に挿花

の法に適ふのであります。前節に述べたるとほり花葉枝ともに大小長短のそまへなき時は理屈花、理屈葉、理屈枝といつて、和合せざるが故に大いに忌むこととであります。

一 枝葉の心得

枝にせよ葉にせよ自然に曲り屈みたるはなか／＼に趣味がありまするが、殊更に爲したものは自然を損じて却つて厭味のするものであります。縦へ自然に出来たるものと雖も直なるべきものが甚だしく屈曲したのは、それは病的に出来たので草木の本性ではありませぬから、かまへて珍奇なるものを好んで、花に入れる事はよろしくありませぬ。高く直に伸びた枝は性强いけれども、天に逆ふもので詠めにならず、尤も横に伸び出で、少し末の上つたのは、性強くして詠よろしきものであります。併し同じ様に二三本も重つて出たのは面白くありませぬから、後より添ふて出たのは直なるがよろしい。曲尺のやうに急に折れて出た枝は折釘又はひち金などいふて嫌ふので、下に直ぐにさがつた枝は露

落しといつて忌むのであります。葉物は總じて大葉を体に中葉を用い、止には小さい葉を撰んで遣ふので、添扣、などもそれ／＼体用止に應じて按配しなければなりません。水草類には蓮河骨の如く開葉、半開、角葉の三性がありますから、開葉を体に半開の卷葉を用い、角葉を止に遣ふので、其外草木の出生に應じ本性に随つて或は切れ葉、裂葉、卷葉、枯葉、虫喰葉、照葉、泥葉なども用ひなければなりません。事々物々に就いて各々其性態を能く究めておなければなりません。凡そ平らかに天を受けたる葉は性強く、天を受けない葉は性弱いものであります。それで大葉物などは日表の葉が二枚なれば、日裏の葉を一枚の割合に入れるので、木物の葉を透かすにも、二枚は平らなるを用ひ、一枚は天を受けない性の衰へた葉を置くやうにするのであります。日受悪しく捻れ葉や枯葉などの多い時は性の弱い花となるもので、葉先の繞れた様なのも性の弱いものであります。

色違ひの花を一瓶に活けるときには、其區別を明らかにしなければなりません。互に枝先の行き合はぬ様にし、又色見切葉といふて花のない大葉を境に入れて花の隔てとするので、丁度二種の葉で活けてあるごとく見せるのであります。

二 花の心得

苔は未だ其色を包み藏してゐる故に、これは陰でありまして、満開は其色を表はし、盛んなるをもつて陽であります。そして半開は此兩部によらず、未だ全く發せず廢れず最も勢ひ強きものであります。苔、半開、満開と花が揃ふてゐるときには、半開を体に遣ひ、満開を用い、苔は止に遣ふがよろしく。三性を取り雜せて數多く挿す時も又之に準じて、体には苔や半開を多くし、用には半開と満開を多くし、止には苔を多くして満開を入れるがよろしい。何程數は多くとも満開なれば既に性弱く、これに反して數は少くとも、苔や半開は性の強よい理であります。又莖は短かく低くとも半開などは勢ひ強よいけれども、

満開で稍々衰への見へる時は長く、高くとも性の弱いものであります。されば是等のことを勘考して、体には充分勢ひを持たせる様にすることがよろしいのであります。さりとて又強よい許でもありませんから。半開を体に遣ふときには、稍や性の弱いところの葉を添へて入れ、満開を遣ふときには、性の強よい葉を添へて入れるがよろしいので、これすなはち和合の法であります。花は葉よりも延び出で、咲くが通例で、大抵の草花は、葉よりも花を高く入れるが常法でありますけれども、或は河骨、燕子花の如く異常のものもありませんから、草木の出生によく注意しなければなりません。極く大輪の花は取扱ひ方頗る困難で、巧者でなくては協ひませぬから、初心者は中輪小輪のものより活け習ふがよろしい。大中輪の花一輪入れるときは体用の間に挿すのが普通で、二輪の時は体と用に一輪宛つ、三輪ならば体用止と三才に入れるのであります。五輪の時は体に二輪、用に二輪、止に一輪、七輪なれば体に三輪か或は用に三輪入れるか後は二輪づつで、九輪は各々三輪宛

入れるか或は体に四輪用に三輪止に二輪と挿してもよろしく、兎角花の数は多くとも、又少なくとも、三性の配合を考へて強弱を調和し、天地人の三才共に殆んど均勢を保たしめなければなりません。体或は用止にても、輪入れるときは、一輪は高く一輪は低く陰陽と備へるので、下の一輪は其花の上に少し葉をかざしてをくのであります。則ち葉の下になる花は露を受けず、性氣の通ふ事少なき故に、これ陰の花であります。併し葉をかざすとはいへ僅かに覆ふといふ位に止めて、花は全く見へてゐなければなりません。見へ隠れの花は確かならずして忌み嫌ふことであります。故に葉を以つて花を隠さぬやう注意せねばなりません。

(十一) 實物の故實

古來一切實物はこれを輕々しく挿花には用ひざるものと定めてあります。其故を如何にといふに、凡そ天地間の萬物、すべて其形に陰陽の備はらぬものは

ありませぬ。然るに木の實には此陰陽がそなはらぬのであります。陰陽は度々繰り返したることく角と丸、大と小、長短、表裏、内外、左右、上下で、何物にも是等陰陽の差別がありますけれども、實物に於いては只形圓くして、陰陽分ちがたいのであります。陰陽備はらぬものは自ら用を辨せず。用を達せざるものは死物に等しきものであります。されば挿花のごとき殊に陰陽消長の理を重んずるが故に。これをもつて神佛に供し、賓客の席上に移すことを忌むので、要は陰陽備はらざるが爲のみ、陰陽を備へ得るならば、又決してこれを禁ずるには及ばぬのであります。然れば一切の實物は、これを挿花として愛するには、必ず其實に陰陽を備へなければなりません。さてそれは何うすればよいかと云ふに、之には抑も故實のあることであります。

むかし茶道遠州流の祖小堀遠江守政一が、書院前にあつた所の南天燭が實のつてまことに麗しかつたので、是れを剪つて活け花にしたいと思ひましたが、如何にせん件の如く實が圓くして陰陽備はらず、さらば其のまゝで活けること

もなしがたく、何とかして陰陽の備へ方はないものか、これを活け花にする工夫もがなと、日毎に眺めて考案を巡してをりました處が、折節一羽の鶺鴒が庭前に飛んで来て、一聲鳴くよと見る間に、彼の南天燭の枝に一嘴あて、ばらばらと葉を散らしさま何處ともなく飛び去つたので、政一は急いで庭にをりたち子細に其有様を見れば、そのうちに半ば實を喰ひきつて内部を顯はしたのがありましたので、はたと手を拍ち、さてはこれでこそ陰陽備はると大いに歡こび、早速切り取つて花に入れたのが即ち實物を花に挿ける事の起りであります。

これよりして、すべて實物をも挿花に用ひることゝはなつたので、實の上皮は陽で中は陰、即ち少しく實の中を見せたるこそ陰陽であります。されば南天燭にはかぎらず、いづれ實物を愛して花に活けるには、其實の二つ三つ少しく疵をつけてをくので、これを鳥の嘴當りとは名づけるのであります。

(十二) 尖針有物の心得

尖針ある物はすべて調伏の花であります故に、儀式には勿論客席會席へも決

して活けてはなりません。單に獨樂の爲めならばいざ知らず、是れを活けんと
 なれば必ず三光の徳をそなへなければなりません。即ち三光の枝葉を備ふれば
 調伏とはならず、されば正花には活けることはなりません。會釋ひに用ひる
 位は、たとへ客席にても苦しくありません。

三光といふは地、火、水の三つで、すなはち日、月、星、の稱であります。
 これを象つて花を活けるには、水盤、砂鉢などの花器がよろしい。黒白の砂石
 をもつて水陸を分ち、三才の石を飾つて（是等の事は後に述べます）白砂則ち
 陸の方天石の後ろへ花を活けるので、尤も花は赤色に限りません。赤は火の色で
 あります。ゆるぎを火に象り、水陸の景色を移すによつて地、水、火、即ち三
 光備はるのであります。三光備はつて萬物生ずる故に凶を變じて吉とするので、
 然らば客席へ出だすとも差支へありません。但し何の花でも尖針は必ず取り
 除けねばなりません。薊なれば其まゝでもよいのであります。
 さて又三光を備へるには、枝葉の遣ひ方に心得べきことがあります。それは

圖七十第



用の葉、添の葉、止の葉此の三枚を大中小とそなへるので、用は大葉をつかひ
 添に中葉をつかひ止に小葉をつかふこと、第十七圖のごとくであります。たゞ

し茲に云ふところの添の葉は、体添のことに
 て、用添ではありませぬ。木物の枝でも、葉
 でも、尖針あるもの、
 形によつて、花の中程
 より下にて三光を備へ
 るのであります。五
 徳の足のやうに、等し
 く三方に相並ぶのはい

けませぬゆゑ、花の振りを見て移りよく遣はねばなりません。

尖針あるものは縦へ三光を備ふるといへども、之れを床に直すことを、遠慮しなればなりませぬ。座敷の縁側に置くか、或は透棚の下に置いてもよろしいが、床の間に松、櫻、紅葉などの傳花あるときは必ず次の間に下げて置かねばなりませぬ。

(十三) 草木扱ひ方

草木を陰陽に分つときは、木花は陽で草花は陰であります。而して各々四季に盛衰の時があつて、春は花に神あり、夏は葉に神あり、秋は實に神あり、冬は枝に神あり、皆これ天地自然の道理そなはる所であります。故に花を活けるには、春は花を主とし、夏は葉を主とし、秋は實を主とし、冬は枝を主としてこれを愛し、其勢ひ盛んなる様を賞するを法とするのであります。一日中に於いても尙そのごとく、もとより花は陽性のものでありますから、日出より正午迄が最も盛んでありまして、午後二三時頃よりは既に勢ひ衰へて賞翫うすきも

のであります。しかし乍ら藤、夕顔、玉章の花、闇の梅、夜の蘭などは例外で(奥に記す)其時々賞翫すべきは勿論のこととあります。

木と草を主客に別けるときは木を以つて客とし、草を主とするので、時の正花は客で、残花を主と心得るがよろしい。それで主客共に花を入れるときは、木を客に進めて主は草を活けるを法とするので、決して残花を客に出すことはなりませぬ。すべて正花は上に、残花を下へ活けるもので、二三重切又は寄せ活けにするときなどは、此の心を失なふてはなりませぬ。正花は時候の花でありますゆゑに花葉も多く、勢強よく入れなければなりませぬが、残花は却つて花葉も些なく寂しく活け、如何なる場合にも、残花の應合ひに正花を用ふるやうの事はなりませぬ。

木物は一瓶の花を一樹と見立て、草花は一瓶の花を一叢の株とみなすので。木は水際より其幹を顯はし、草は一叢の中より高く立ちのびたるを心と見るのであります。凡そ挿花は草木の出生を心得ることが第一で、山林幽谷或は野澤

の形容を席上にうつすを本意とするので、此のころを會得したらば木物でも草物でも花様は誠に自在であります。

木は高く、草は低いものと定まつてをりますけれども、或は草を高くして木を低く用ひることもあるので、これは遠近山里の差別に依るのであります。しかし好んで活くべきことではありませぬ。木に木の應合ひを遣ふのは柳に椿、松に椿、白頂花等がある許りで、其外多くは草花の應合ひであります。又草に木の應合ひをするのは鶏頭花に白頂花の類のみで、廣口物に二種以上も活ける時は鶏頭花に跋柏杉などを應合ふこともあり、一子重切に活けるも是に準じて入れますけれども、たゞすぐに一瓶の花に應合ふときは、草に木を副へることはないのであります。

草木を持ち運ぶには、木物は根本を下にして立て、持ち、草物は根本を上にして上げて持つもので、尤も燕子花、花菖蒲、射干の類は木物同様に取り扱ふものであります。

(三) 四季草木と養ひ方

(一) 草木出生の心得

凡そ花を自在に活けるには、草木出生の有様、山澤、陸岡等各々草木の好む所、其本性を知ることが第一大切な事は、屢々繰り返して述べたることくであります。十種二十種のことなれば兎も角、数かぎりもない数多の草木にわたつて悉く其出生、性質を究め盡すことは、容易のわざではありませぬ。本草家に寄つて習ふたならば知ること出ませうが、元と本草の書は彼れに似たものである、略々是れに等しいなど、只其の要を摘んで書いてあるのでありますから、不得要領のことが多くあります。今日植物學の教ふる所に依れば、花葉枝幹根莖の各部を解剖して、其構造、形態、生理、生態など、系統を立て類別を設けし研究するので、大いに吾人を啓發し、此素養あれば便宜多大なるは言ふをまたぬけれども、而かも插花としては、又格別に知悉しなければなら

の向きがあるので、此點に至つては矢張り古老、花屋、植木屋など、草木を取扱かふ人々に就いて尋ね覺えると共に、自己實地多數の草木を探り、仔細に注意して詮議することが肝要で、こうして研究して行くうち、數年上達の後には自然と會得するものであります。

初心のうちは何によらず、多く活け習ふがよろしいけれども、名も知らぬ草木を無暗に活ける必要はありません、成るべく得容くして有りふれた、夫して出生をも熟知したるものを需めて活け習ふがよろしい。後園又は山野の草木でも、経験のないものを活けるときは、其出生の有様、花實の状態を實地についてよくよく調べた上、其出生に應じ、本性に随がつて、その性情を失なはぬやうに活けなければなりません。

後園に培養したるものや、市中の花屋に貯へたるものは、莖ふとく花首も強よいけれども、枝が脆くて觸め悪いものでありますゆゑ、よくよく觸め習はねばなりません。之に反して山野江澤に自然に生育したるものは、花も莖も共に

力らなく懦弱にして、取扱ひ自由ならぬものでありますから、随分養ひを施して後に活けるがよいのであります。

(二) 四季の草木

一 木之部

松は即ち常盤木で、四季青々としてをりますから、若松、老松共に儀式の花に用ひるので、口傳即ち許し物と云つて花道には却々八ヶ間敷さもので、自然挿方にも熟練を要する木であります。多くは一種挿して應合ひをもちひることもありますけれども、松に傍近の習ひといつて、故なき花を應合ふことはないのであります。

梅は八重、一重など種類多く、花の咲くにも早いものもあれば遅いものもあり、色にも紅、白、濃、淡、種々ありますが、木の性質は大抵同様で、小枝の澤山ある嬌め悪いものであります。若し誤まつて枝を折つたとしても他の木と

は違つて、木皮さへ離れなかつたならば水を揚げるので、急に枯れる様なことはありませぬ。(矯め方は別に述べます、以下これに倣らふ)是は置花、掛花いづれにもよろしく、一種二種或は他のものと一瓶に活けることもありませぬ。南性の梅、北性の梅、臥龍梅などはいづれも許しものに屬してゐるので、餘程熟練の上でなくては活からぬものであります。

枝垂れ柳は極く矯め易いけれども、時々折れることがありますから、注意しなければなりません。活け方は色々ありますが、すべて水邊を好む心で、下には池川などの有る風情に働かすがよろしい。

椿にも種々ありますけれども、白玉椿を最も高尚な花と致します。枝は矯め易いけれども花の至極脆ろい早く落易いもので、(花の養ひ方先きにて述べます)花は葉の日裏に咲くのが本性であります。一種挿のものであります。又多く他の花の根添にも用ひます。

山茶花は椿の變種で、大概椿と更りはありませぬが、是は一種活けのもので

あります。

連翹は黄色の四瓣の花で、誠に粘り氣のない脆ろい木でありますから、矯めるには注意を要します。多く掛花で置花には面白くありませぬが、しかし大竹の花器には、置花としても活けることがあります。

彼岸櫻は早く咲くから此の稱があるもので、至つて脆い木であります。花の配り方が大切で、一種入れに限るのであります。

金雀枝と云ふ名はもと、フランス語から出たのださうであります。枝は自由になるものであります。餘り矯め過ぎると獅子の尾のやうになつて不可ませぬ。花のあるときは、一種入れにして面白いものであります。

粉米櫻は、關西地方では笑靨花と云ひます。小米の様な白い小さい花の咲く木で、掛花や釣船に移りよく、木の質は稍々粘りがあつて能く矯められます。

桃には中々種類があつて、木質も各々異つてをります。普通の桃は至つて脆いものであります。白桃、緋桃は稍々粘り氣があります。いづれ巧者でなく

ては活け悪いもので、殊に二種の取り合はせなどは難かしいものであります。桃の枝は天を突いてするどきものがありますから、菜種、若我などを應合つて活けるがよろしい。

黄梅は黄色の小さな花の咲く木で、矯め易いものであります。釣舟、二重切などによろしい。

梨の木は白色にや、青味を帯びた、淋しい花が咲くものでありますから、他の麗しい草花をあしらふて活けるがよろしい。木の質は至つて折れやすいものであります。

杏子はや、淡紅色が、つた白の花であります。木質、活け方は梨と少しも更りはありませぬ。

李も小さい白色の花で、前同様であります。

木蓮花は、一種挿しの置花には格好のものであります。質が至つて脆いで、これは矯めることを致しませぬ。やさしい草花を應合ふたのもよいもので

あります。

辛夷、幣辛夷は、二種共にすべて木蓮と同様で、これは枝を打つに心を用ひなければなりません。

木瓜の花は、禁忌の章でも説きましたとほり、自分に活けて眺めるだけなればよろしいが、儀式饗應の花などには、忌みて用ひぬ事になつてをります。

小梅の木は枝の細い梅に似て、淡紅の小さな花の咲くもので、掛置ともに用ひますが、質は粘りのある矯めよい木であります。

海棠は春の末頃に咲く紅白の花で、木質は桃に似て折れ易く、手練ものであります。

櫻は幾種もありますが、通常櫻といふのは山櫻のことで、制花でありますから印可の上でなくては活けられませぬ。兎角折り得たまゝで鉄を入れず、尤も一種挿しにかぎり、他のものを應合ひに用ひることを確く禁じてあります。

山吹には、八重、一重があつて、莖は矯め易いものであります。陸木ではあ

りますが水邊を好むので、掛籠、釣舟などに活けてよろしい。

躑躅は其種類却々多いもので、木皮がはせて嬌めにくい木であります。全体これは好んで活くべきものではありませぬが、當今は會席などでもよく見掛けます。霧嶋躑躅を唐銅の古い器などに入れたのは、又捨てがたき風致の存するものであります。

石楠花は薄紅の頗る美事な花で、木は嬌めやすく、置花として至極よろしい。

卯の花は白色の小さな花の咲く木で、随分花を白く見せるやうに、器の取り

合はせが肝要であります。脆い木でありますから、注意して嬌めねばなりません。

箱根空木は、白色又は紅紫色の花が咲きます。弱そうに見へますけれども實

は却へつて強よい枝で、自性を顯はすには掛花としてよろしい。

沈丁花と云ふのも、白或は赤紫の花の咲く常緑ものであります。これは軒

んで活けるものでありませぬ。

手鞠花は白い小さな花が、手鞠のごとくに咲くから此の稱があるので、枝は嬌め易いもので、置籠の花器に挿してよろしい。

鈴懸の花は紅白二種あり、挿方は手鞠花同意であります。

馬酔木は小さな白色の花の咲く木で、牛馬がこれを喰ふと、中毒をおこすと

云ふことであります。根鎖に何か他の美しい花を應合ふて活けなければ、淋しく

て見られないものであります。

藤は白、紫の二色あります。二重切などの掛花器か、水盤に活けるがよろし

く。掛置共に喰ひ出しの半開を賞美するのであります。殊に夜の挿花としては

格好のもので、應合ひには金銭花、美人草などがよろしい。しかし芍薬は決して

用ふることはならぬのであります。

下野の葉は葡萄に似て、花は紅紫色であります。挿方は手鞠花と同様であります。

紫陽花は色の更りやすいもので、祝儀には嫌ひます。花が大きく重くて俯向

き易く、根止めの甚だ困難なものでありますから、少々花を透して活けるがよろしい。

狭竹桃は一重咲きがよろしい。餘り花の多すぎるのは、紫陽花のやうに少し取りすかして用ひるのであります。掛置共によろしい。

未央柳の葉は柳に似て、花は黄色で梅雨の頃に開きます。金糸梅とも云へば又金糸桃柳ともいふので、木の性質は至つて脆いものであります。

夏黄梅は、黄色の小さな淋しい花でありますから、多く二種ざしで掛花によろしい。

連玉の花も黄色で葉は至つて細かく、細い枝の多く出る木で、程よく鉢を入れぬと、活けるに困難であります。

山茶躑躅は之も黄色な小さな花で、成るべく他の麗しい花を取り合せて活けるがよろしい。木は折れやすいものであります。

錦木は初冬の頃、葉が紅や紫に染むが故に此の名があるので、花は黄緑色木

質は粘りがあつて矯めよいものであります。

百日紅は猿江りともいつて、紅色の花が随分久しく咲きます。一種挿しにしてよろしいが、枝は矯め悪くいものであります。

木槿は禁花であります。獨樂には活けることもあります、然し水の揚げ悪くいものであります。

八朔梅は枝ぶりの如何んに拘はらず、珍らしいのを愛するので、七八分の働らきに活けて、枝を餘りに切り落さぬを肝要とします。

紅葉といへば黄櫨、黄揚、蕙、柿など、秋季紅葉となるものは多いけれども、就中て楓を専ら紅葉といふので、これには三体三枝の挿方があります。制花の一で口傳おほく、一種挿しのものであります。春や、夏は應合ひを添へることあります。木質は矯め悪くいものであります。

亥の子柳は猫柳とも云つて、紅皮を去つた白い花を賞美するので、粘りのつよい木であります。

梅嫌きは葉を悉く取り除いて、實ばかりにして活けるので、蔓梅嫌きと二品あります。蔓梅嫌きは釣花によろしい、頗る脆い質の木でありますから、矯めるには困難であります。

南天燭も又極く矯め悪く悪いもので、結び南天燭は斯道に秘する事であり、南天燭を禁花とすることは茶席にいふ事で、書院には構ひありません。

茶の木は上皮的にはせ容いものでありますから、梅の木と同様で、水はよく揚げます。

枇杷の花は白の小さいものでありますから、他の花を應合つて活けてもよろしい。口傳多く、木は矯め悪く悪いものでありますから、注意しなければなりません。

八ツ手は止に他の花を應合つて、大花器に入れたのがよろしい。冬至梅は早咲きの梅で、冬至の頃に咲くから名付けたので、すべて普通の梅と更りはありません。

寒竹は新しい葉の出かけたのを愛するので、眞の体に活けたのがよろしい。櫻欄は大花器なれば幹のまゝ二本三本迄活けるので、小器なれば葉許りを用ひます。いづれにせよ他の花を應合ふがよいのであります。

檜は一本は入れず、三本は面白からぬので、二本挿すがよろしい。これも多く應合ひをつけるのであります。

伊吹木は、葉の繁くこもつた枝を見立てるがよろしい。木は矯めやすいもので、掛置ともに用ひます。

猿猴杉は、長い一枝に趣きあるのを見立てゝ入れるがよろしい。これも矯めよいものであります。

糸杉も杉の一種で、柳などと同様のものであります。

樺は其實の形が羅漢に似てゐる所から、羅漢松ともいへば、又いぬまきとも云ひます。葉は松に似て巾廣く扁たいものであります。高野樺は高野山に多く産するから斯ういふので、木はいづれも矯め易いものであります。

柏横には二種類ありまして、立柏横は掛花にも置花にもよろしいが、葡柏横は多く會釋ひものであります。粘り氣のつよいものでありますから矯めるによろしい。

蘇鐵は二本以上五七本以下、大抵廣口の器に活けるので、葉許りは常には用ひないことであります。

檜は何か他の花を應合ふて、置花に活けてよろしい、木は粘りのある質であります。

二 草之部

福壽草の花には、淡黄色、淺黄色、の二色と、又八重咲きと一重咲きの二種があります。至つて莖が短かいので、歳旦の挿花の根もとか、卓下の花或は廣口、砂鉢等の添に用ひ、其名の目出度いのを賞するので、根遣ひに傷があります。

葉牡丹は四季を通じて挿花に用ひますが、重に葉を賞翫して花は餘り用ひま

せぬ。葉の大きくなる程莖が短かく、莖の細く延びたのは葉の小さなもので、いづれは他の花の應合ひものであります。

菜の花は梅桃などの應合ひにするので、一種挿しにはせぬものであります。

春菊も多くは應合ひもので、一種挿しとしては至極閑靜なものであります。

高麗菊は、又朝鮮菊とも云ふ單瓣の花で、小さい花器には一種活けにもしますが、多くは應合ひものであります。

長春花は一名薔薇、又茨牡丹ともいつて、花に紅白色々あり、種類も數多あります。普通初夏に開花しますが、所謂四季咲きと稱するものは、殆ど一年を通じて花の絶へ間はありませぬ。されど枝に刺ある故に、禁花として儀式等には挿すことはならぬので、これも多く應合ひものであります。

一八は又鳶尾とも書きます。始めに四五枚葉を組んで入れ、夫れから花を挿して又追葉を入れるので、花は三本又五本も用ひます。一種挿しにもしますが、多く木物の應合ひに遣ふものであります。

胡蝶花は 一八同様であります。

紫羅蘭花は 莖の長さ二三尺、花は大きい紫色の頗る美事なもので、縞葉蘭を
應合ふてよく移ります。

紫蘭の葉づかひは葉蘭に類したもので、少し優しく活けたがよろしい。鈴懸
と取り合はせたのも、移つりのよいものであります。

櫻草は莖の短かいものでありますから、卓下の花か、又二三重切などの取り
合はせに活けるがよろしい。

岩藤は花葉共に、普通の藤によく似たもので、小形のやさしいものでありま
すから、前同様で籠花器にもよいものであります。

金銭花とは午時花の唐名で、午の時(正午)に花開ひて子の時(後十二時)に落
ちるのであります。有毒草でありますから、花に活けるものではありませぬ。

金盞花は名が同じことなので、よくまじうものでありますから、是れは一名を
長春菊ともいつて、高さは二三寸、花は壺形の淡黄色で、毒草ではありませぬ

ので、木花の止などに用ひます。

薊には刺があるので禁花となつてをりますが、之を活けるならば、三光の徳
を備へなければなりません。

芍薬は掛置いづれの花器にもよろしいが、殊に籠花器によく移ります。是れ
は一種入れに限るので、余花を應合ふものではありませぬ。但し木と草の差別
をすれば、廣口、馬盃などに株分にして活ける時は此の限りではありませぬ。

燕子花は、葉の自性を失はぬ様にしなければなりません。芽吹葉いつて陰
陽二枚の中に又一枚生ずるので、これを三枚葉とも云ひます。尤も一枚宛挽ぎ
放ち、更に組合せて入れるので、その葉組、花配りなど、余程熟練を要するも
のであります。

花菖蒲は其活け方、大概燕子花と同様でありますから、燕子花の花は花莖が低
く、花菖蒲は伸び出で、咲くが自性でありますから、これは花を高く入れるの
であります。

牡丹は傳花であります。活け方は凡そ芍薬と同様のものですが、これ
は用に葉を多くして賑やかに入れるので、自性の黒木遣ひ方等、詳しくは別
述べます。

百合にも種類が多々あります。普通のものは餘り莖の長いものではなく、又
強よいもので、初心の人には活け易くてよろしいが、竹島百合、爲朝百合、
鬼百合など云ふものは莖が細長くして弱く、而かも花が大きくて俯向くので、
活け悪いものであります。姫百合は小さいもので、重に卓下の花であります。

鐵線花は蔓物で、白と紫の二色あります。多く釣花器に入れるもので、置花
に活けるときは、枯れ木に纏とはせて入れるのであります。二本以上五本まで
用ひてよろしい。

美人草は一名をヒナゲシともいつて、小さな美麗な花であります。満開と
なれば早く散りやすいので、花に活ける時は、中開きを用ひるがよろしい。
芥子の花も前の美人草と同じく、祝儀には忌むものであります。籠花器に

活けて移りのよいものであります。

萱草は又忘れ草とも云つて、葉は長く花は鬼百合に似たもので、葉の綴ぢめ
を解いて高低をつけて、左右からびつたりとつけて挿すがよろしい。

檀特草の葉は芭蕉に似て稍々少さく、初秋の頃に深紅色の花を開きます。葉
組は葉蘭に準ずるので、止には曲ある葉を低くつかふがよろしい。

水葵は又小なぎともいふので、その花も葉も玉簪花に似てをります。活け方
も又大抵同じで、水盤馬盃などの花器に入れます。

澤瀉は一名を花慈姑とも云ひ、葉の表に高く模様如きものあるによりて此
名あり、夏の初めに白い三瓣の花が咲きます。

河骨は又萍蓬草とも書きます。三性を愛して体に開葉、用に半開、止に角葉
を入れるので、花は二花以上五花迄遣ひます。葉裏に花の咲くのが自性で、水
の揚げ悪くいものであります。

蓮も、大概河骨と同様であります。是れは傳花で、花道には却々八ヶ間敷

いものであります。

玉簪花の葉は十方に分れて出るので、花はその中に咲きます。入方は略々葉蘭と同様で、葉と葉と對ひ合ふたる中に花を入れるのであります。

檜扇の葉は燕子花或は胡蝶花、一八の様に並び生ずるもので、檜扇を擴げた形であります。活け方もそれらと別に更りはありませぬ。

夏菊は刈り込みに活ける事を禁じます。葉の青々としたのが夏菊の本性でありますから、照葉があれば除ぞかねばなりません。三本五本をもつて随分葉の勢ほひを見せるやうに入れるものであります。

大明菊は瓢盞などの掛花器によろしく、茶室に活けて閑靜なるものであります。

仙翁花は秋の頃、石竹に似た花が咲きます。山城國嵯峨の仙翁寺から出たので此の名があるので、葉蘭などの應合ひによろしい。

朝顔は蔓草でありますから、釣り花掛花によろしい。又筒花にも活けますが、

いづれにせよ枯木竹の枝などに纏はせて、格を作るのであります。

太臈、燈心草など、すべて蘭の類は大株小株と魚道をあけて、三段五段七段と段取りにして活けるので、花形は總じて眞の体であります。蘭物一株入れるときは、何か應合ひの花を遣ふがよろしい。

木賊も直ぐに立つて出るのが本性で、大概蘭物同意であります。小草物を應合ひに入れますが、又一種挿しも雅致あるものであります。小草物を應

萩は置花には薄端の花器などよろしい。秋の景色を移すに好適した花で、大廣口には、他の花と雜せ活けにしてもよいのであります。

薄は類の多いものであります。中でも十寸穂の薄を賞し傳花とするので、達者に非ざれば活けがたきものであります。

桔梗は、一種挿しにもしますが多くあしらひもので、花首弱く、俯向き易いものでありますから、注意しなければなりません。

女郎花は野山に生ずるときは數少なく、まばらに出るのが自然でありますか

ら。餘り多く入れないがよろしい。廣口などに活ける時は株を分けて、出生の親葉を用ひなければなりません。

撫子、石竹などは花澤山に入れたのがよろしいので、多くは應合ひのものであります。

葦は傳花であります。應合ひの花で風情をもたすので、活け方に別義ありません。

萩は花葉共に茅に似たもので、五本七本數を限らず、薄、葦などに入れ方は略同じことあります。

美人蕉は姫芭蕉ともいふて、芭蕉そのまゝのものでありますが、葉が小さく、花は茗荷に似て朱色であります。挿方は檀特同様であります。

岩非は葉厚くして先が尖つたもので、赤肉色の花が咲きます。これは手早く活けなければ、花が萎みやすいものであります。

笹龍膽は重に止に遣ふもので、蔓龍膽は釣舟などによろしい。

雁來紅は水揚げの困難なるもので、いづれは暫時の詠めであります。

秋海棠は祝儀には用ひないものであります。莖は手弱く花葉重くして、根本の止まり悪いものでありますから、露あるうちには活けられませぬ。

蘭は莖をあらはに見せぬがよろしいので、多く傳があります。これも祝儀には忌むので、香りが高いから、茶席香席にも遠慮するがよろしい。

萬年青も葉遣かひに傳があります。實は河骨の花のやうに、葉裏に出るのが自性で、兎角性を愛して出生を過らぬ様に入れなければなりません。

紫苑は大抵玉簪花の如くであります。葉遣ひの至つて難かしいもので、多く葉數を入れるときは段々にならぬやう、氣をつけねばなりません。

葉蘭は四季共に用ひるもので、花とさへいへば葉蘭といふ様に、挿花の總てを代表するものであります。各流共にこれをもつて挿花の手解きとするので、活け方はその章に詳述するを以つて、茲には之を省きます。

菊は花を主とするので、その勢ひを顯すやうに充分強よく活け、用の葉を多

く遺ふがよろしい。尤も大菊小菊の性情をよく辨まへて、大菊を短かく切り、小菊を丈け高くする様なことはなりません。二種三種も一瓶に活けることもありますが、一種で体、用、止と揃へて入れた時は、虫喰葉、或は枯葉を應合ひにつけるものであります。但し切り葉を用ひてはなりません。

残菊は花のつき際から莖の曲がるもので、掛花によろしい。

寒菊は照葉のおほいもので、照葉がなければ寒菊にはなりません。當今は種々の色がありますが、もと寒菊は黄色に限つたものだそうであります。

水仙は葉の拵へ方に傳があります、ハカマ即ち根元の白皮を抜き取つて、燃れた癖を直し、又元の様に組み合せて白根を被せるので、これは余程手練を要します。一種挿けにすることもあれば、又他の花の應合ひに入れる事もあります。

(三) 時候と養ひ

都べて草木を切り取る時は、何によらず必ず幾分か生氣の衰へるものでありますから、充分養ひを施して、篤くと水が揚がつてからして花に活けなければなりません。もと挿花は、將に廢物たらんとする草木を惜しんで、再びこれを活物たらしめ、之を愛翫し、或は賓客の饗應にも供するをもつて本旨とするのでありますから、出來得るかぎり一ツ時も長く保たしめるやう、手段を盡くさねばなりません。如何に手練をつくし、巧妙を極めたる花といへども、精氣衰へ潤色うすらぎたる時は、自から挿花の本意に悖つて苦心の甲斐もなく、徒らに識者の一笑をかうにすぎませぬ。殊に會席などでは、一つにても凋落したる花があつては、一般の花の風致を損すること一通りでありませぬゆゑ。各々よく心得なければならぬことであります。

抑も花に活ける草木を養ふには、先づ一年の季節を考へて、その季節相應の養ひを施すことが最も肝要であります。時候のわきまへもなく、季節不相應の養ひをした所が一向勞して効はありません。一年は四季に分れてゐますけれど

も、花道に於いては水火寒暖、即ち天地自然の道理に随つて之を眞行草と分つので、それ／＼その時候に適合したる所の養ひを施こすのであります。

先づ眞の時候と云ふは、冬至より(十二月下旬)春分(三月下旬)迄で、行の時候は春分から夏至(六月下旬)までと、秋分(九月下旬)から冬至までの兩度で、又草の時候は、夏至から秋分までをいふのであります。眞の時候は太陰に當れば、之を陰中陽とし、草の時候は大陽にして之を陽中陰とするので、行の時候は二つに分れますから春を少陽の時とし、秋を少陰の時とするのであります。これ四季陰陽の旋ぐり通する所でありまして。春は生じ、夏は長じ、秋は收まり、冬は藏くる。これを晝夜に配すれば朝は生じ、晝は長じ、暮に收まり、夜は藏くるで。皆是れ造化のなす所であります。此の四時の季節が一切草木に通ずるが故に剪るに刻あり、養ふに時季があるので、要は陰陽消長の原理に符合したる取り扱ひをなすのみであります。

すべて草木は朝夕に剪り取るがよろしい。則ち朝は生ずる時、暮れは收まる時で、共に精氣が強くて養ふに都合がよろしいけれども、日中は長ずる時で、やゝもすれば精氣衰へて、花葉のいたみ易いものであります。或はものに依つては剪り取つて稍々久しく置き、漸やく衰へたる時をもつて養ひをすれば、奏功の著じるしいこともないではありませんが、多くのものは矢張り精力の強弱なる時に於いて、速かに之をなさねばなりません。

生溜に養ふときも、又活けたる花も、密室に蒸し、或は強き風に當てることはよろしくありません。尤も風位も草木の養ひに大關係があるので、風の陰陽をも辨へておなければなりません。そも／＼東風は陽でありまして、萬物を養ひ潤ほすことが多いけれども、西風は陰でありまして、萬物を害ない損するものであります。又南風は陽中に陰あれば、強く吹くときは、性あるものに害があります。静かに吹くときは、却つて養ひとなるので、北風は陰中に陽あつて、強く吹くときは養ひとなり、弱くときは衰へることの多いものであります。故に床花、會席等にも養ふ風の入るときは精氣強くなり、害する風に當れば

次第に衰ろへるので、先づ第一に養ひの法を行なひ、風位を考察して適應の處置をしなければならぬのであります。

(四) 水揚の原理

前に述べましたる如く、眞の時候は陰中陽の時でありまして、萬物表に陰を發して裏に陽を含むので、一切草木は、内に精氣を貯へて元氣頗る旺盛であります。然るに草の時候は却つて陽中陰の期でありますから、すべて萬物は内に陰を含み、外より過度の陽氣をうける故に萎れ衰ろへることが多いのであります。云はゞ内なる陰が外なる陽に制せられて抵抗し得ないので、之をして中和の氣たらしむるには、内なる陰を助けて外なる陽を制せなければなりません。夫故に外なる陽を制するには、同じく陽を内に含めて對抗せしめますといふと、即ち茲に中和の氣となり、忽ちにして精氣潤澤となるので、陽を制するに陽を以つてするが、水揚げ法なるもの、原則であります。

斯様にいへば可笑しいことのやうであります。決して無理ではありません。即ち同じ種類のもの、同じ性質のものがお互ひに制し合ふといふ働らきは、何事にもよくあるもので、酒を飲み過ぎして二日酔をしたときには、もう一度酒を飲むと直るさうであります。路を多く歩いて草臥れたときには、もう少し歩くと癒るさうであります。又金剛石を磨くにも、矢張り金剛石でなければ不可ないので、毒虫に螫されたときには、毒虫の油を附ければ癒るさうであります。同じ物を同じ物で押へて行く、此の同類相制するといふことは如何なるものにも具はつてゐるところの眞理であります。夏季暑さの砌りに、水を浴びればその後には以前よりは一層の暑さを覺へますが、湯に入つて充分身體を暖めますと却つて後には非常に清涼となるものであります。草木水揚げの原理も又これと同じ道理で、眞即ち大陰の時候には、陰を制するに極陰を以つてし、草即ち大陽の時候には、陽を制するに極陽を以つてするので、極陰は凍り水、極陽は熱湯及び火であります。

さて又水火は相反の性質をもつたものであるにも拘はらず、水揚げをなすに火を遣ふといふのは、一應首肯しがたきことの様であります、換言すればかよわき花を養ふに、本来草木の忌むべき火に突き入れて、その切り口を焼くといふのは道理に協はぬことのやうにも思はれますが、是れ全たく反對の作用であります。この反對の作用といふことも矢張り又一つの眞理でありまして、すべてのものに備はつてゐるところの性質であります。これが例證を擧ぐれば何程でもありますが、彼の湯を沸かすに下から火を焚けば、上から熱くなるのもその一つであります。赤飯などを蒸すにも、下から蒸すと云ふと上から蒸さつて來ます。我々が河を飛び越さうと思ふときには、先づ一步退いて後ろへ向つて力を入れなければ、向ふへ飛ぶことが出來ませぬ。或は又井戸水は冬は暖かいけれども、夏は却つて冷たいもので、雪路を歩くと始めは冷たいが、後には暖かくなるのも皆これ反對の作用であります。されば此のやうに何でも反對の作用といふことはあるので、花道の水揚げ法も之を應用し、之を活用したるも

のに外ならぬのであります。

すべて諸の草木は、吾人が鼻より大氣中に酸素を吸ひ、口に食物を攝るが如くに、その葉によつて大氣中の炭素を吸ひ、根より養料を吸収するので。水草なれば水に接した部分は其皮を透しても吸収しますけれども、陸物は養料を攝る所は根に限つてをります。かるが故にこれを剪り取れば、養分を攝取することが出來ず、能むを得ずその切り口からして水分を吸収しますけれども、如何なる吸収力強き草木と雖も、尙養分の不足をぐるをもつて、漸次に花葉が萎凋するので、況してや吸収力に乏しき而かも多量の養分を要する花盛りの草木に於ては、片時も保たず凋落するは誠に餘儀なき次第であります。されば多くの根より養料を攝つたものが一朝僅かなる切り口より吸収しなければならぬことゝなるによつて勢ひ衰へるので、その水分を攝る部分を多くし、吸収を使ならしめるならば、急に枯衰するやうなことはありませぬ。彼の少陽、少陰の候、水に浸す部分に鋸り目を入れ、或は針にて皮に傷つけ、又は切り口を割り、打

挫ぎなどしてよく水を揚げ得るものゝは、即ち此の理によるのであります。

(五) 眞行草の水揚法

草木の水揚げは眞、行、草の三法があるので、時季に依つて多少取扱ひの異なるところがあります。草の時候は前にもいふごとく夏至より秋分に終るので、暑氣甚だしく、一般草木の全盛期でありますから随がつて精氣を發散することも多く、之を剪り取れば萎凋することも又早いので養ひの最も困難なる期であります。されば草の時候の水揚げは却つて眞の法を行ふのであります。その法は先づ花の大小に随つて適宜の爐を構へ、(或は焜爐にてもよろしい)それに炭をよくくゝ起して鍋を掛け、水の深さ一寸二三分ばかり盛つて煮沸するのであります。その傍らには養ひ桶に水を一杯湛へて備へ置くがよろしい。さて切り取つたる草木の根本を揃へて一つに束ね、竹の皮か油紙の様なもので包んで柔かに括り、濡雑巾で根本を巻いて手に持ち、右の熱湯に莖のもと五六

分ばかりを浸すのであります。煮るに随つて全體に温氣めぐり、根本の白くな

るまで煮立てたるとき取り出して速かに養ひ桶の冷水に移し入れ、眞直に動かぬやうに据へをくのであります。もつとも油紙の包みを解き、強き日光の當らぬ静かなるところに置くがよろしい。荒い風に當てることは悪しく、又蒸せることも忌むのであります。それから五六時間を経てから取り出して花に活けるので、朝養ひ

圖八十第



たれば晝、夕方に養ひたれば翌朝これを用ひるのであります。行の時候は既に述べたるごとく春分より夏至までと秋分より冬至までの二期でありまして、春を少陽とし、秋を少陰とするのであります。此の兩度の時候は寒暖に偏せず、中和の節でありますから草木一切精氣順調でありますけれども、ひと度折り折つたるものは幾分か勢力の衰へるの自然の理で、養ひをもつてこれを恢復せしめなければなりません。行の時候の養ひは行の水揚げをなすので、春秋共に同じ法であります。是又草木の大小に應じて火爐を備へ、少陽の時候には堅炭を用ひ、少陰の時候には消炭をもつてよく火を起すのであります。その外の準備はすべて眞の法と同じく、花葉に火氣、湯氣のかゝらぬやうに油紙か藁で包んで置かねばなりません。用意が出来ましたならば草木の切り口を五六分ばかり右の火中に差し入れ、火になるほど焼いて、火氣が循つて全體に温まりの出でたるとき、直ちに冷水に移し入れ、前のごとくして貯へておくので、その後の取り扱ひはすべて眞の養ひ方と同様であります。即ち第

十八圖は行の水揚をなしつゝある處であります。

眞の時候は冬至に始まつて春分に終るので、太陰にあたつて陰中陽の節であります。一切の草木は内に精氣を貯へて元氣頗る旺盛であります。落花落葉したるものも早く既に萌へ出で、或は芽ぐみ又は時を得て花咲くもあり、性強ければ剪り取つても夏のごとく急に凋れ損ずるやうなことはありません。さればとても切り手折つたるものは精氣保たず、早く枯衰するは勿論のこと、尙養ひを施さねばなりません。此の節の水揚げは草の法で別に仔細はありません。凍り水など至つて冷たい水を撰んで篤くと浸し、五六時間養つてから花に活けるので、冬期汲み立ての井戸水は返つて温かでありますから、生花に用ひては草木を損なふことが間々あります。故に成るべく寒冷なる水、譬へば流れ水とか汲み置きの水に貯へ、養ひ桶は火氣のある附近とか、温かなるところに置かぬやう注意せねばなりません。

(六) 諸草木の養ひ方

草木の養ひ方に就いて注意すべき要領は前三項に於いて大概申し述べましたから、是から四季草木のそれ／＼個個について養ひ方の大要を説くことに致しませう。尤も水揚げ法は秘傳と稱して師家の容易に教へないものでありますが、以下記述する所のものは著者が實地経験のものばかりでありますから、これによつて前に述べたるごとく、手落ちなく養ひを施したならば決して過つことはないのであります。

一 春の部

梅は別に水揚げをせずともよく水を揚げるもので、早く苔を開かせる爲めに室咲きにするには、人のよく知る所でありませんが。これを室に入れて早く咲かせるには、挿したる花瓶の中に湯を注ぎ、押入か何處かの暖かい處に一夜置くか、又枝を束ねて井戸の水際に吊り下げてをいてもよろしい。此れとは

反對に半開の苔を開かせず、其儘に保たせようとするときには、白蜜を鍋で暖め和らかに解かして、筆をもつて塗つてをけば、半開或は苔のまゝで數日間保つものであります。

櫻は太ければ根本に鋸り目を入れ、小枝ならば切、口を鐵槌で叩き挫いで冷水に貯へ、二三時間の後に取り出して活けるのであります。

海棠は薄荷の嫩葉で切り口を包んで置くか、其瓶中に薄荷の葉の絞り汁を入れて活けるので、乾葉を煎じ出した汁でもよく水を揚げます。

芽出し柳は水の上り悪いもので、嫩葉が早く萎れますから、是は枝を逆まにして水を注ぎかけ、荳か菰の類で包んで置き、暫らくして取り出せば葉は生々として活もとりまします。或は鋸目を入れて水に漬けてをいてもよろしい。柳は刀物で剪ることはよろしくありません。手折つた儘の方が水を揚げよいので、又却々矯め悪いものであります。風吹柳は吹上げ吹下ろし其枝の矯め方が第一で、此枝を矯めるには灰火にくゞらせ、思ふ様に矯めて所々を括り、大盥に水を充

して三四日も漬して養ふのであります。

椿の花は保ち悪くいものでありますが、それは臺と花瓣との間に水氣のない故でありますから、花の蓋に鹽を少し差し入れて置きますと、其の潤ひによつて永く花が落ちないのであります。

貝母は編笠百合ともいふので、行の水揚げをして逆水を灌ぐがよろしい。

辛夷は切り口を割つて山實を挟み、水に養つてをいて篇と水を揚げてから活

けるのであります。

葉牡丹は五月から八月頃までは誠に保ち悪いものであります。眞の法か或は行の水揚げをして逆水を灌ぎ、首際迄冷水に漬けて養ふのであります。

桐の花の養ひも葉牡丹同様であります。

山吹は切り口を叩き挫いで行の養ひをするか、又は酢をもつて眞の水揚げをするのであります。

菜の花、太根の花は剪つた儘で置けば専らに凋みますが、逆水して暫時養へ

ば又立ち直ります。

蘇枋の花は切り口を割つて養ひ置き、切れるときに根本の根皮に蠟の先きで紙を付けるのであります。

をだまき草は切り口を少し切り捨て、逆水をすればよろしい。

躑躅は切り口を打ち挫ぎ、或は割つて養ふのであります。

紫羅蘭花は酢をもつて眞の養ひをするのであります。

若楓は根本に鋸り目を入れて、汲み立ての水で逆水を注ぐのであります。

藤は殊に水を上げかねるものであります。これは切り口を割つて艾を挟み行の水揚げ法を行ふので、又切り口を挫いで酒をもつて眞の法によつてもよろしい。

薊は切つて暫らく日に充て、稍々萎れて柔かになつたとき、思ふ儘に矯め曲げて、木か竹に結び付け、水に深く浸して置けば能く水を揚げて勢強くなり、花に活けるに好都合であります。

二 夏の部

牡丹を養ふには伐り取ると直ちに切り口を打挫いて眞の水揚法を行ふので、冷水に移して日の當らぬ土藏にでも置くか、或は桶、箱などで覆ふがよろしい。朝早く切り取つたものは花が小さく咲きますが、八九時頃に切り取つたものは大きく咲きます。又切り口を燈火で焼いて、花瓶に白蜜を解いて入れて置きますと、花が久しく保つものであります。

芍薬も眞の養ひ方で、勢ひ衰へて稍々葉の凋れたものでも、水揚をして葉に水を注ぎかけ、一夜露をうけさせれば又元のやうに勢強くなるものであります。尤も是に至つて鐵類を嫌ふものでありますから、切り取るにも、眞鍮の鉢か竹の筒を用ひるがよろしく、手で折るにも成るべく爪を觸れぬやう注ぎしなればなりません。随がつて花器も金屬製のものを使用せぬがよいのであります。百合は行の養ひをして砂糖水に活けますと、葉の光澤を宜くし花も永く保ちます。

紫陽花は眞の養ひであります、朝切り取つたものは晝、夕方に切り取つたものならば、一夜露をうけさせて翌朝活けるのであります。

額草の水揚げは、紫陽花と同様であります。

葵は行の養ひで、花瓶の底に石灰を沈めて置くによろしい。

一八、胡蝶花は、共に眞の養ひをしますのであります。

紫羅蘭も眞の養ひをしますので、又莖の小葉のある所を、即ち節を堅に少し割いて置けば、永く花が凋みませぬ。

燕子花、花菖蒲などは別に養ひをせずとも水を揚げますが、尙勢ひよくするには前同様の法で、此の種のものに火氣を忌むは勿論であります。

水葵、澤潟の養ひは、番茶を能く煎じて冷やし、水上筒をもつて切り口から突き入れて水に養つて置くので、又昆布を煎じて用ひることもあります。或は澤潟は朝夕に切り取り、細い楊枝を以つて根から葉の際まで、上皮を裂き割つて養ふてもよろしい。

水引草は、朝早く露のあるうちに切り取つて、眞の法を行ふのであります。
 太蘭、燈心草などは、逆水を注いで養ふのであります。
 瞿麥、石竹の類は、午前八九時頃に切り取つて、花首の際まで、冷水に漬して養ふのであります。

檀特草、美人蕉などは、夏季は眞の養ひ、秋は行の法をもつて水揚げするのであります。

玉簪花に芭蕉も前同様、但し切り取つて直ちに薄い糞紙などで包んで、水揚げすることが肝要であります。

夏萩、夏菊も、又眞の水揚げをするのであります。
 芥子、虞美人草は行の養ひ方でありまして、花瓶の底に石灰を入れて置くによろしい。

萱草、麥門冬の類も又同じく、これは泥を少し入れてをくと永く花が保つのであります。

圖九十第



朝顔の養ひは眞の法であります。切り時は午後八時頃が一番よろしいので、朝剪り取つた花を養ふには満開の花の中へ、白砂糖と上酒とを混ぜ、火にかけて解き合せたものを冷して、匂ひに二三滴指し入れるがよろしい。又明日開かんとする苔に、既に凋んば花殻の先を切つて、前夜のうちに第十九圖のごとく被け置き、翌日花の壳を取り除いて楊枝に水をつけ些か介借して開かすれば、思ふ時に開花を見せることが出来て妙であります。花に被けるものは花壳には限らず、葱を程よく切つて用ひてもよろしい

三 秋の部

萩は行の法を用ひるのでありますが、或はぬるき湯に根本を差し入れて置いて、その湯が普通の水程に冷へるを待つて、湯を注いでその儘に活けてもよろしい。湯を冷えるに随つて水を揚げるものであります。但

し湯加減は指を差し入れて、堪へられる程の度をよしとするのであります。芒、荊萱は切り取ると直ちに行の養ひをするので、火は消炭を遣ふがよろしい。

桔梗は行の水揚げをすればよし、又切り口を叩いて乳の様な汁の出るのを度として、水に浸してをいても水を揚げるものであります。

槿の花は朝養ふことはなりません。明日咲く花を撰んで日暮れて後に切り取り、根本一寸ばかりを艾に包んで行の養ひをするので、その焼いた所を切り去り、再び同様にして養ひ桶に貯へ、翌日取り出して活けるのであります。

葭、蘆は朝夕に切り取つて、葉のふちを少し切り捨て、全部水に漬けて置くこと、一二時間にして活けるのであります。夏秋なれば眞の水揚げをしてもよし、又針金などで根本から末の節まで差し貫いて、昆布と鹿角菜とを煎じて冷した汁を注ぎ込み、根の口を紙などで詰めて、冷水に養ふもよろしい。

雁來紅は灰汁をもつて眞の養ひをするので、その煮た所を切り捨て、冷水

を注ぎかけて養ふのであります。又即活けには、葉の節々を針にて突き、切り口を割つて活ければよく水を揚げます。

秋海棠を剪るは朝未明がよろしい。刃物を忌みます故に笹か爪をもつて切り取るがよろしい。切り口に艾を入れて、葉の萎れる程に行の水揚げをして、其節々を篋で裂き割り、全部を冷水に浸すこと一時間にして取り出し、其後は根本ばかりを差し入れ置き、花葉の露の乾くを待つて花に活けるのであります。

露あるうちは頭が重くて根本の止まり悪くいもので、尙花器は竹の筒などはよろしからず、成るべく陶器を用ひ時々水を取り更へなければなりません。

萬年青の養ひは四季に應じて春秋は三四日、夏なれば二三日、冬は四五日も陰干にするのであります。さて一枚宛瓜をもつてよくしごき、紙捻の如く捻り込んで假括りをして組み上げるのであります。花に入れてから眞葉より水を注せば、暫らくにして水を揚げますから、能く水を揚げて後假括りを取り除くのであります。即席には日に乾すか、根本を煮湯にさし入れ、其後一時間も

捨をいてから活けると、賊に遣ひよいものであります。

鳥頭は切り口を叩きつぶして、行の水揚げをしますのであります。

岩路も行の養ひ方でありますが、或は早朝に剪り取り、一本宛いづれも根本を針で傷つけて置けば、よく水を揚げるものであります。

秋菊は剪ると直ちに行の養ひをしますので、葉は水に浸さぬがよろしい。二岐三岐にもなつて長い枝のある節茂きものは水揚げ悪いものでありますから、これは其節を打ち挫ぐか、枝を折取つて傍芽を去り、一本立とすればよく水を揚げます。

紅葉は葉の凋みやすいものであります。これは朝早く剪つて風に當てないやうに冷水に貯へ、根本に鋸目を入れて活けると可成永く保つもので、或は行の法をもつて養ふてもよろしい。

四 冬の部

梅嫌は別段水揚げをしなくてもよろしいが、成る可く寒冷なる水に養ふがよ

ろしい。これを矯めるには紙を酢に浸して柔かに絞り、枝に巻きつけて火にか

け、強く焼いて矯めつけると心のまゝになります。

南天燭を矯めるには熱灰に入れるか、火にあぶつて充分温ためるので、矯めたるまゝ水に入れて冷やせば、矯め口を緩めても決して戻ることはありません。結び南天と云つて幹を結んで遣ふことがありますが、これは大根ををろし酢を加へて鍋にて煮き、結ばんと思ふ所を其中に差し入れ、強く煮いて後靜かに矯めて結ぶのであります。尤も南天は若木の直條のよいところを見立て、至つて古い木や、節のあるところは避けなければなりません。南天のみには限りませぬが都べて葉の茂りたる物を矯めるには、其所を濡れた紙で巻き、蠟燭の火に暖めて矯め、其儘水中に葉諸共に深く入れて冷やすのであります。

野梅、蠟梅、迎梅、枇杷、是等は皆草の養ひで取り立てゝ水揚法を行はずともよろしいが、いづれも枝の切り口を一寸ばかり皮を削つて活けると、一層勢ひよく花も永く保つものであります。

水仙の切り立ては、極く柔らかなものでありますから、これは鹽水で養ふてをいて、冷たい清水で活けるのであります。

山茶花も椿と同じく花のしんに鹽を少し入れて置きますと、永く花が落ちませぬ。

茶の花は花瓶に鹽水を注いで活けるとよろしい。

葉蘭は全部水中深く差し入れて置きますと、萎び衰へたる葉も又忽ち強くなるもので、花留桶に貯へたるときも日々水を替へ、根本を少し宛つ切り捨て、養へば、何時までも遣ふことが出来ます。又酒に根本を浸すか、葉に酒を注いで一夜をき、翌日酒を拭きとつて活けますと、葉に艶が出て勢ひ強よくなるものであります。

寒牡丹、寒菊などは至つて寒冷なる水に浸し、度々水を替へて一日一夜養ふのであります。

(五) 極秘三種養ひ方

〔竹〕竹を切り取るには早朝か夕暮がよろしい。若竹は水持がよろしいけれども、古竹は水持の悪るいもので、五六月は若芽の吹き出すときでありますから、別に水揚げをせずとも更に枯れることはありませぬが。早春や極寒、嚴暑の候は至つて保ち悪くいものであります。すべて水揚げ悪くいものは、伐りとつて直ちに水揚げをしなければなりません。時経てからしても其効はないので、これは其切り口から氣を發するが故であります。

竹を切るときは入用の分よりは少し長く、節より五六分上にて末を止め、本の節から一尺七八寸、二尺許りも下つて伐るので、先づ無用な枝や枝先をあらまし切り去り、竹の皮か油紙で枝を包んで括るのであります。そうして上の切り口には飯を詰め、下の切り口には節まで堅く艾を詰めこんで水揚げをするので、夏なれば眞の法、春秋は行の法であります。眞の水揚げをするには常より

は深く湯を湛へて、下の節まで浸すがよろしい。よく煮て上に詰めたる飯が少々色づく迄を度として、速かに養ひ桶にうつすので、行の水揚げをするときは、節より下が全たく火になるまで焼くのであります。

冬季の水揚げは格別の法であります。先づよき程に竹を切つて、細い鐵の棒などで末の方から節を打ち貫き、下の一節ばかりを残して切り口から水を差し入れ、大根か紙で確かと詰をするのであります。或は酒を注ぎ入れて置けば、暑中でも寒中でも其潤ひのある間は決して枝葉の凋れることはなく、又塩水を煮沸せて注ぎ入れてもよろしい。細竹ならば砂糖水か鹽汁を葉に吹きかけて活

圖 十 二 第

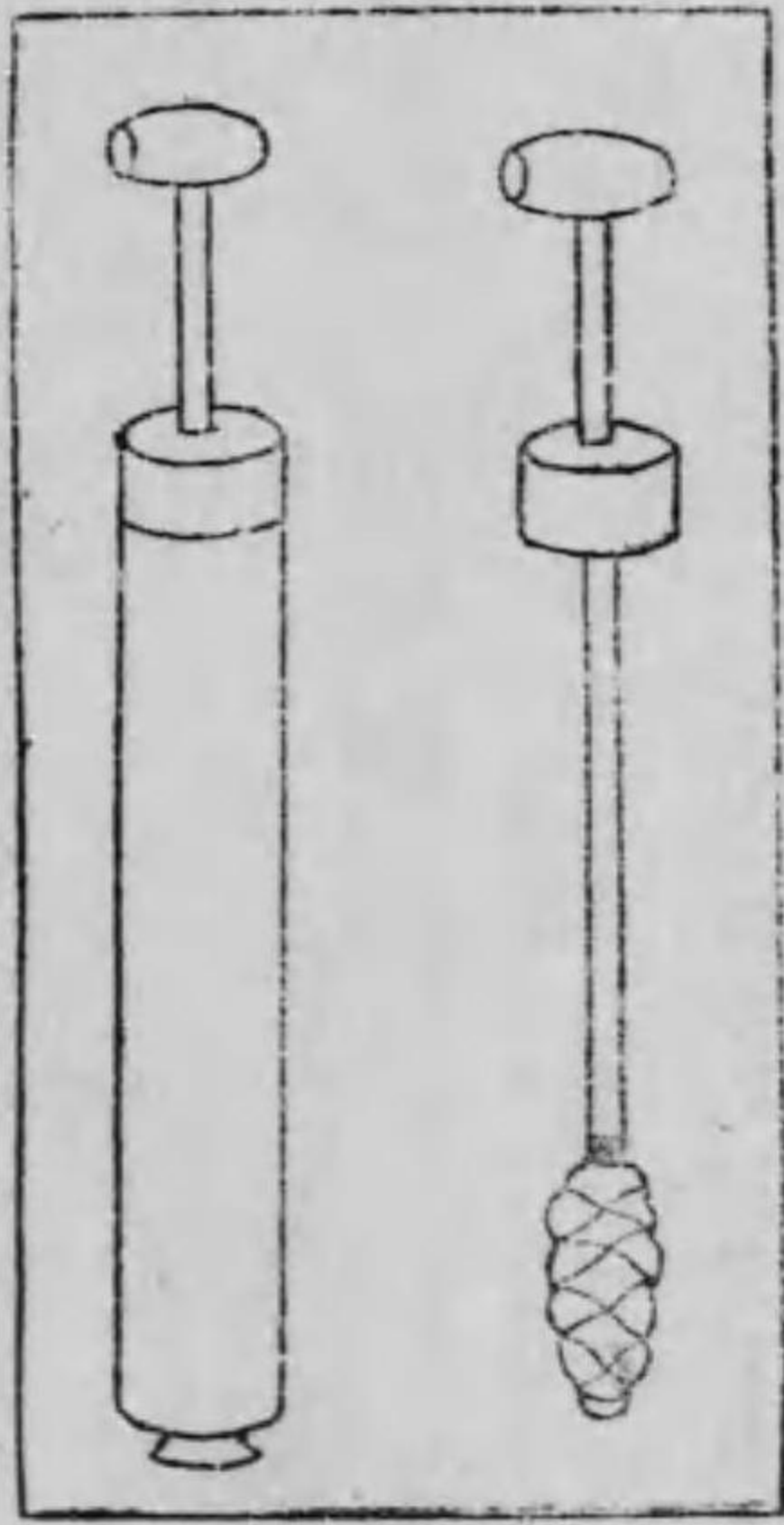


けるか、早朝露あるうちに切つて、酒をもつて眞の養ひをしても能く水を揚げます。第二十圖は青葉附竹花器といふので、此他青葉附自在竹など各種ありますが、皆青竹を切り、枝葉の附いたるまゝに用ひるので、節の間又上下に水を差し置く故に、一ヶ月をいても枯れることはないであります。

〔蓮〕蓮は水草のうちでも殊に養ひ悪くいもので、切り取つてから一時間も経てば、もう養ふことが出来ませぬ。至つて古葉や、巻葉のほぐれたばかりの新葉は永く持たぬものでありますから、葉をよく見立て、切り取らねばなりません。これは朝早く、日の出るまでに切りとつて直ちに眞の養ひをするので、花葉に火氣、湯氣のかゝらぬ様に取り扱はねばなりません。それから冷水に入れ置いて時経て取り出し、煮たる根本を切りすて、前もつて胡椒の粉を水に浸してをいて、此水を強く切り口から突き込むのであります。尤も花活ける間も切り口は少しも水から放すことはなりません。すべて水中にて取り扱ひ、手の温氣にも萎れる程のものでありますから、余程氣をつけなければなりません。

一説には水に一割の酒を混じて少し暖め、水上筒をもつて注し込むともいひ。又山椒と甘草を茶にて煮出して用ひるとも云ひます。水揚げ筒は第二十一圖の

圖一十二第



如きものでありまして、これを竹で製らへてもよろしいが、金の板で製らへ水の出口を漏斗のやうにして置きますと、莖の太いものにも細いものにもよく合うて最も

便利であります。

〔河骨〕河骨も其取り扱ひ方はすべて蓮同様であります。極暑の候は上茶を煎じ出して、凡そ人の肌程の温味に冷まして、水揚げ筒をもつて突き込むので、秋季に至れば石膏を水に調合し、その上に煎じた茶を合せて、前同様にして差し込むのであります。いづれ茶の煎じ様は薄い方がよいので、餘りに濃ゆければ

葉が腐れ痛む憂がありません。水揚げをしたならば、直ちに井戸の中へ下て置か、土藏にでも入れて冷して養ふのであります。

河骨を水なき瓶、又は第二十二圖のごとく、紙の折形などに空活けにするには、前のやうに水揚げをして一時間許りも養ひをき、のち取りいだして、根元を一々糸にて確と括つて活けるので、大抵一日位は持つものであります。これを河骨の空活けの傳といふのでありますが、併し、好んですべき事ではありませぬ。

圖二十二第



併し、好んですべき事ではありませぬ。

(七) 瓶水並に露時候

花器に水を注ぐときは、時候によつて加減しなければなりません。眞の時候は凡そ八分目に注ぐので、就中寒中は七分目位に止めて置くがよろしい、薄端ならば中の筒ばかりで、縁に水の上らの程度にするので、寒中はすべて花留迄注ぐのであります。春秋は即ち行の時候で、暑寒に偏らざる故に此兩期には九分目に注ぐので、草の時候には十分に満々と、而して暑中に於いてはあふるゝ許り十一分に注ぐのであります。尤も花器の縁、外の廻りに油を少し指の先で塗つて置いて水を注げば、水は洩れずしてよく盛れるもので、曇の油なれば最も妙であります。兎角水は冷涼の感を起さしめるものでありますから、寒いときにはなるべくこれを顯はに見せないやう、又暑いときには是れをもつて一見して清涼を覺えしめる爲めに、足し水の増減をなすので、彼の四季花器の用捨、眞行草花臺取扱ひの時候なども、畢竟此の氣候、寒暖の關係に外ならぬの

であります。(此等の事は後の章に詳しく述べます)

尙これに關聯して露の時候には花を活け終つてから、花及び花器に露を打つことがあります。露の時候とは夏至より秋の彼岸迄の九十日間をいふので、即ち草の時候であります。この間は土器の類ひに花如露をもつて露を注ぐので、暑氣つよく雨露を渴望する時季だからであります。もつとも土器の外金物の花器などは一切無用で、青磁の花器にも露を打つには及びませぬ。青磁はもと支那の越州で製作し始めたもので、淡綠色又は淡藍色の釉を全體にかけたる磁器でありまして、其性として常に水氣を含み、久しく箱に入れ置いても、矢張り多少の濕氣を失はぬものなる故であります。

活けたる草木を養ひ、永く花を保たせる爲めには、度々瓶水を取り替へなければなりません。草木を養ふ水は既に述べました通り、四季共に流れ水が一番よろしいので、花器の水を取り捨てるには、護謨の管をもつて少し吸ひ出しこれを通じて別の器に受けて取れば、花に觸れ動かさずして静かに替へ出すこ

とが出来ます。夏季は水の腐敗し容易いものでありますが、これを防ぐには、梅雨の頃雨水をもつて煤と土を練り合はせ、小さい塊りにして火に焼き、これを貯へて置いて、花器の中に一つ宛入れるとよろしい。又冬季火氣なき室内では、水が凍つた爲めに花器を破ることなどがありますが、これは硫黄を少し入れてをきますと、水の凍る恐れはありません。

古來花瓶の水は有毒であるとして『本草綱目』と云ふ書に『花瓶水飲之殺人、臘梅最甚』とあります。又『考盤餘事』にも『梅花、秋海棠、瓶水有毒云々。』とあり、又建蘭の瓶水にも毒あること『五雜俎』にも書き記してあります。其外毒草木といふにあらすして毒を生ずるものも多く。たとへ然らずとするも、永くをけば水腐敗して毒となることは當然でありまして。人がこれを飲むといふことはあるまじきことではありますけれども、急にのぞみ宴席などにて渴する場合、或は又小兒などにも過つて飲むことがないとも限りませぬから、心得をいて注意しなければならぬことでもあります。

〔四〕 花の活け方附り故實

(一) 挿花の心得

花を活けると云ふことは、見て居た許りでは何の事はない様であります、さて遣つて見れば存外思ふ様に成らぬといふことは、多くの人から聞く言葉であります。誠にその通りでこれは必ずしも挿花許りではなく、世の中の一切萬事が皆さうしたものであります。

すべて何事にも熱心といふことが第一肝要なることは申す迄もなく、上手になるには如何して稽古すればよいか」と聞く人もありますが、矢張り「熱心に稽古せよ」と答へるより外はありませぬ。古人の歌に、

成せば成り、成さねば成らぬ、成るものを、
成らぬといふは成さぬなりけり。

といふのがありますが、よく穿つてゐるではありませぬか。爲して成らぬとい

ふことはなく、成さずして成らぬは當然であります。然るに自己の骨折方
足らぬことは省みず、どうしても出来ぬと弱音を吐くと云ふは、大きな了見違
ひではないでせうか。

何事でも慰み半分に遣つて見るくらゐで、上達の域に達することの出来ない
のは分明なることでありますが、而かも多くの人は、殊に挿花は慰みにといつ
て始めるから思ひの外六ヶ敷いので、何でもないことの様に思ふて掛るから不
可ないのであります。思ひ立つて稽古をするなれば随分熱心に遣らなければ、
何とて小安く稽古の出来るものはないのであります。

挿花は不言不語落ち付いてしなければなりません。則ち先づ邪念妄想を去つ
て身心を平静に、全く無念無想の心的境界に入る必要があります。彼の下らぬ
事をがやゝ、談し乍ら花を活けたり、氣を焦らせ乍ら活けるときは、碌な花の
活かるものではありません。身も心も共に落ちつけて一切他の事を念頭に置か
ず、全身全力を傾注しなければなりません。故に挿花は又一の精神修養ともな

るので、云はゞ挿花禪ともいふべきものであります。此の修養は取りも直さず
身心を平静にして事に従ふといふ善良なる習慣を作るに力あることは疑ひない
ので、又眞實熱心なるものは何うしても心茲に至らなければならぬ譯でありま
す。

およそ學問にも技藝にも必ず一定の正路常道のあるもので、花術を習ふにも
矢張り順序階梯を踏まねばなりません。算盤を習ふにも一桁の算用が充分でき
る様になつてから二桁の稽古にかゝり、又二桁の運算を呑み込んで三桁に移り
加減削除の順序に従ふて稽古するが如く、富士山に登るにも、先づ一合目から
二合目、それから三合目四合目と次第に登つて行かねばなりません。抑も稽古
の初めには極く平易なところから進んで、漸次に順を辿つて行かねばならぬの
で。無暗に早く進まんとし、或は我意に任せて彼の花は面白い、この花形が好
きだなど、順序もなく習ふのでは一向技術は進歩せず、恰かも富士山に登るに
一合目から直ちに三合目迄も行かんとすると同様であります。兎角するうちに

却つて後進に追ひ越されて了ふので、結局甚だ不得策でありますから、「急がば廻れ」といふ諺のごとく、必ずしも急かす迷はず、順序正しく稽古するやう心掛けねばなりません。

文章に「格に入つて格を出で、絢爛の極平淡に入る」といふ箴しめがありますが、花術も又之れに異ならず、一度は古人の型を學び、而してその型を破つて自己の天分を發揮する工夫を爲さねばなりません。處が、最初から何んでも彼んでも自分一家の我流を押し立て、是をもつて將來の大成を望むなどは、誠に心もとなき考へで、如何なる天才でもそれでは成就するものではありません。能樂でも芝居でも、すべて藝を教へるには我意を出すことを許さず、唯もう一意専心自己の型を厳しく守らせる。さうして鑄へに鑄へ練りに練つて殆ど同じ型に符るやうに仕上げるので、斯様して教へて行くうちに各自の特性の現れてくるのを待つてゐると云ふことであります。成る程かうして鍛錬したのでなくては垢抜けがせず、藝が上手でも賤しくて品位がありません。花術も其れと

同じことで、一度は師家の型に符らなければなりません。成る程一時は規矩に拘泥して一向沒趣味の様であります。此様して練習して行くうちに自然と顯れてくる各自の特色は、譬へその術は巧みに出来てゐなくとも、何となく品格があり風情に富んでゐるものであります。

されば初心者は教へのまに、確く型を守つて、挿花の正體を會得しなければなりません。かくて漸やくその型に符れば即ち格に入つたので、その儘では極めて風韻なきものでありますから、爾後進んで自ら破格奔放なる挿方を試みるがよろしい。此處が文章でいふ所の絢爛の極であります。盛んに變曲異體なことを活けるうちには漸やく悟つて以前の正體に復れば、即ち平淡の域に入るのであります。しかし此處に云ふ正體は先きの何等洗練せざるものとは違ふて、尋常に超脱したるもので、此の悟入を得ればはじめて自己本來の面目を活現し、漸やくに花道の妙境に入るのであります。

(二) 花配の仕様

花を活けんとして花器に對つた時は、先づもつて花配りをしなければなりませぬ。花配りは花留とも花押へとも又かいはりとも云ひまして、流派に依り或は木を割つて用ふるもあれば板を合せて製へたるものを遣ふの也有りますが、先づ大方は第二十三圖のごとき木の叉を用ひるので、花配とする又木は成るべく粘り氣つよき枝がよろしく、木の性はじかきものは急に深くさけて用ひがたきものであります。木樫の枝は情粘り強くして用ふるに便利でありますけれども、これは祝儀の席には遣ふことが出来ぬので、その故は全く樫花一日の榮と言ふことに依つて忌むのであります。猫柳(狗の子柳)の枝は又の開き工合もよく、粘り氣もある木でありますから誠に都合よろしく、如何なる場合にも差し障りがありません。花配は花に入れる枝数の多少、その太さに依りて配り又の廣きを入れ、或は

圖三十二第



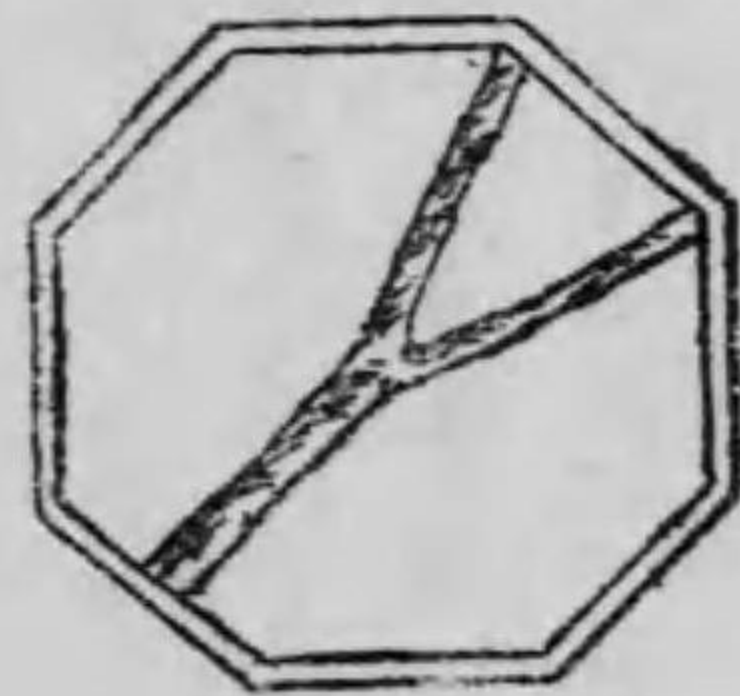
ろしい。入方は凡そ第二十四圖のごとく、花の活け處は九ヶ所に分れるといふ説もありませんが通例は主位、客位の二ヶ所で、器の圓を平に角にとつて向ふ隅附にするのであります。角なる花器は角を陽とし平を陰とするので、上座床へは平に置き下座床にては角を少し前に振り出して明りの方へ向けるのであります。花配の仕様は第二十五圖のごとく、何れも縁から六歩下て入れるので、勿論花の都合によつては多少向ふ附にすることもあれば、又横附とすることもあります。

圖四十二第



狭きを遣ひ、よく加減しなければなりません。又が小さければ花が入らず、大き過ぎれば花を留めるに難澁でありますから、丁度一杯になるくらゐに見定めて入れるがよ

圖五十二第



此場合には花器を損せないやう、又木の三方の小口に少し紙を折つて當て、静かに緩く入れるのであります。尤も花器の如何によらず餘り堅くすることはよろしくありませんので、緩くとも花はよく止まるものであります。勿論花は丈夫に活けるがよろしい。風の當る處など、殊更に婚禮の席の花は別して根本の止まりを堅く丈夫にして置かねばなりません。

さてまた花器によつては花配を用捨すべき心得があります。唐物、和物共に名有る重寶、磁器、漆器などはすべて花配を用ふるものではありませぬ。さりながら花留なくては花の水際がしまり悪しく、花を活けるに便りがありませぬ。故是非なく配木を用ひなければなりません。

圖六十二第



いづれ花を活けたるときは、竹又はその花の枝の剪りくすを以つて、向ふへしつかりと花を押へて動かぬ様に留めておくので、これを風留又は門留と云ひます。(第二十六圖)は即ちこの風留の入方を示したるものであります。

花配りを入れたならば其邊まで水を注いで、夫れからして花を活けにかゝるので、空花器に花を活けるは憂ひでありまして大いに忌むことであります。花を活け終つてから足し水をよき程に注ぐので、四季足し水の注ぎ加減は前に述べたる通りであります。

(三) 活け方の大意

すべて活け花はその始め木物なればその枝振り、葉物は葉の形容、花物は花の模様の見立て方が第一大切であります。見立て方の悪い爲めに、折角の材料を持ちながら、存難なものにして了ふことが能くあるもので、畢竟技術の巧拙は一に茲にあるのであります。此の枝を斯く遣へば斯々の花形となり、此處

をかうすればかういふ風の花となるといふことをよく見究めて、その最良と思はるゝところを以つて、枝葉の配置を定めるがよろしい。花の容姿は又矯め方に依つても非常に變化するもので、矯めのきかぬのも不可ませぬが矯め過ぎてよろしくありません。僅かに一枝や一葉の矯め加減によつても全體の風姿に甚しく影響することが少なくありません。余程注意しなければなりません。

又枝葉を心のまゝに用捨なく剪ることも不可ませぬ。兎角初心のうちには此の枝は不可ない、彼の花は不用である、この葉も都合が悪くといつて、無暗に切り過ぎるもので、それが爲めに遂には何心なく面白い、惜しい枝葉をも剪り落して、その結果は寂しい何の見所もない極く貧相なる花として終ふことがよくあるものであります。それは所謂型に箱まり過ぎて格を出でざる故でありますから、よろしく器用に任せて随分賑やかなる花を活けるやうに心掛けるがよろしい。それで大體活け終つてからして總體の格好を調へることを専とし、見

逃がすべからざる禁忌の枝葉を除く外は、成るべく多く鉄を入れない様に心得るがよいのであります。

すべて是れ等は挿花法の主眼とする點で、煩雜になりますからそれ／＼項をわけて詳しくお話しを致しませう。

一 矯め方

花形を作るに自然の屈曲ある草木なれば誠に都合がよろしいが、さもなければ多くは幾分か矯めなければなりません。而して草木には既に述べましたるやうに堅く脆き性質のものもあれば、又柔かにして粘着力の強きものもあります。就中木蘭や桃や南天燭、梅嫌などは殊に脆く折れ易いものでありますから、これを矯めることは余程困難であります。木槿や柳などは中々粘り氣の強いものであります。それで最初は斯様な至極矯めよいものよりして矯め習ふがよろしいが、併し矯めよいものは水を吸ひ上げますと又戻り易いので、そこで詰り熟練を要する譯なのであります。

木物を矯めるにはその目的とするところを中にして、兩側をしつかりと兩手に握り、掌と腕に力を入れて充分に曲げ、木の肌の暴れ破れないやう、微音を發するを度として止めるので、僅かに矯め過ぎれば折れるものであります。南天燭、梅嫌などのごとく、至つて脆いものを矯めるには食鹽、油などを幹に塗りつけて、熱灰に埋めるか火に温めて後、以前のごとくして矯めるので、曲げたる所をそのまゝに冷水に入れて冷しますと、矯め口を緩めても戻すことはありませぬ。或は紙を酢に浸して少し絞り上げ、木に捲きつけて火に掛け、強く焼いて矯めれば心の儘になります。併し、よく／＼注意して心靜かに焦せらすしなれば、餘り粗暴なる取扱かひをすれば折ることは勿論であります。尚枝條のよい若木を撰ばなければ、節のあるところか古木などに折れやすいものがあります。楓や南天燭其外葉の繁つた枝を矯めるときは、濡れたる紙にて捲き蠟燭の火を當て、曲げるので、温味を冷めぬうち、葉諸共に水中深く差し入れるがよろしい。又梅の木のごとくに小枝多く、花苔の付きたるものを矯めるに

は、沸騰したる湯の上に枝を懸して湯氣に觸て、よく暖めて矯めますと折れる氣遣ひはありませぬ。

草物は多く手先き許りで矯めるので、左の手に莖を持ち右手の拇指と無名指にて莖を撮んで、柔かに先きに進めつゝ矯めるのであります。尤も菊類は焼泥鏝を思ふ所にあて暖めて矯めるので、温か味の冷ぬうち水に入れて急に冷ますのであります。葉は水に浸さぬがよろしい。檜扇、玉簪花などの花莖は手を

もつて矯めることは出来ませぬ。至つて折れやすきものでありますから第二十七圖のやうに紐を掛けて、弓の弦を張つたるごとく程よく引き付けて置き、一

圖七十二第



回活け方の大意

日或は一夜水に入れて養つてをきますと、思ふ様に矯がきいて花を損すること
はありませぬ。

太蘭の矯め方は三本の指にて一本宛挫ぐので、燈心草は一緒に集めて手の掌
で能く揉むがよろしい。そして夫れを一箇に寄せて好みに任せて矯め、其まゝ
括つて水に浸し、一夜とくと養ふのであります。河骨は意のごとく曲りたる竹
か木に纏ひつけ、莖の痛まぬやうに所々を紙捻かなどにて結び、水に漬けて養
へば假へ開葉にても自在に矯めることが出来るのであります。

二 剪り方

根本の剪り方は挿花第一の秘訣でありまして、切り口悪しきときは枝葉に何
程苦心するとも調子よく立つものではありませぬ。すべて花は何に依らず此の
切り口ばかりで持つのでありますから、枝葉の均衡を考へて程よく切らねばな
りませぬ。通例根本は斜に切るのではありませんが、花が立ち過ぎ或は傾き、向ふ
又手前へ振りなるとするときは、幾度も試して縦横に切り直すかよろしい。切り

口の凸形となつたのは花の保ち悪いものでありますから、中低に稍凹形とな
るやう、木鋏に力を込めて急に深く切るがよいのであります。

枝の切り口は平らに伐るものであります。併し枝に交々太細の差があれば何
れも平らに切ればよろしいけれども、若し大小なく同じ様なる枝ならば、前に
振り出でたる枝は平らに切り、後ろに扣へたる枝は少し斜めに剪るのでありま
す。處が或説に、挿花は立花とは違ひ小刀一挺を以つて仕立てるが古來の法で
あつて、小刀は斜に遣ふものであるから、すべて枝は斜に伐るがよい。鋸を用
ひる場合にも斜に挽いて、小刀をもつて作つたる趣きを守るべきものである。
とも云ひますが成る程これにも一理はあります。併し當今専ら木鋏を遣ふので、
或は流派に依つて切り方を平らに限り斜に定めるもありませうけれども、別段
これを一定しなくとも宜しからうと思ひます。丁度竹を活けるに末口の切り方
を平と斜の兩様を用ふるがごとく、すべての草木にわたつて之を併用するがよ
ろしいので、平の切り方は陰で斜の切り方は陽でありますゆゑに、陰陽和合の

法に協ふものであります。或は又葉物を活けるに、岩蔭、玉簪花、杜若、蘭、水仙等は鉄を入れず。蒲、椿、萩、檜扇、芒、一八、葉蘭などはいづれも斜に切り。芦、櫻欄、萱草などは矢筈に切ると云つて、鉄の入方に差別を設けてゐる流もあります。何によらず葉先を切るといふことは餘り面白くありません。漫りに葉先を切るときは、只私の作り物となり終つて挿花の價値はありませぬ。たとへ術は拙なくとも不都合なれば悪ざまに、その儘遣つて些か私の作意を加へぬ方が、とれだけ勝つてゐるか知れませぬ。夫故に葉先は多少に拘はらず決して切ることばならぬ

圖 八 十 二 第



丸ニ同ジ

のであります。

偕て枝葉を透すにはその強弱を考量して、随分性強くするやうに剪らなければなりません。直に伸びたる枝は性強けれども詠めよろしからず、橈んで出で末の上りたるは性強くして姿よきものであります。上に向ふたのはよろしいけれども、下に向ふて出でたる枝は皆切り去らねばなりません。葉を透すには

圖 九 十 二 第



ろうと思ひます。

三 挿し方

二枚は日受の葉を用ひ、一枚は受けざる性弱きを添へるのでこれ陰陽であります。此外詳しくは實際に臨まなければ説明が出来ませぬが、枝葉の強弱の大要、格先の切り方は第二十八圖及び第二十九圖にて知ることが出来るであ

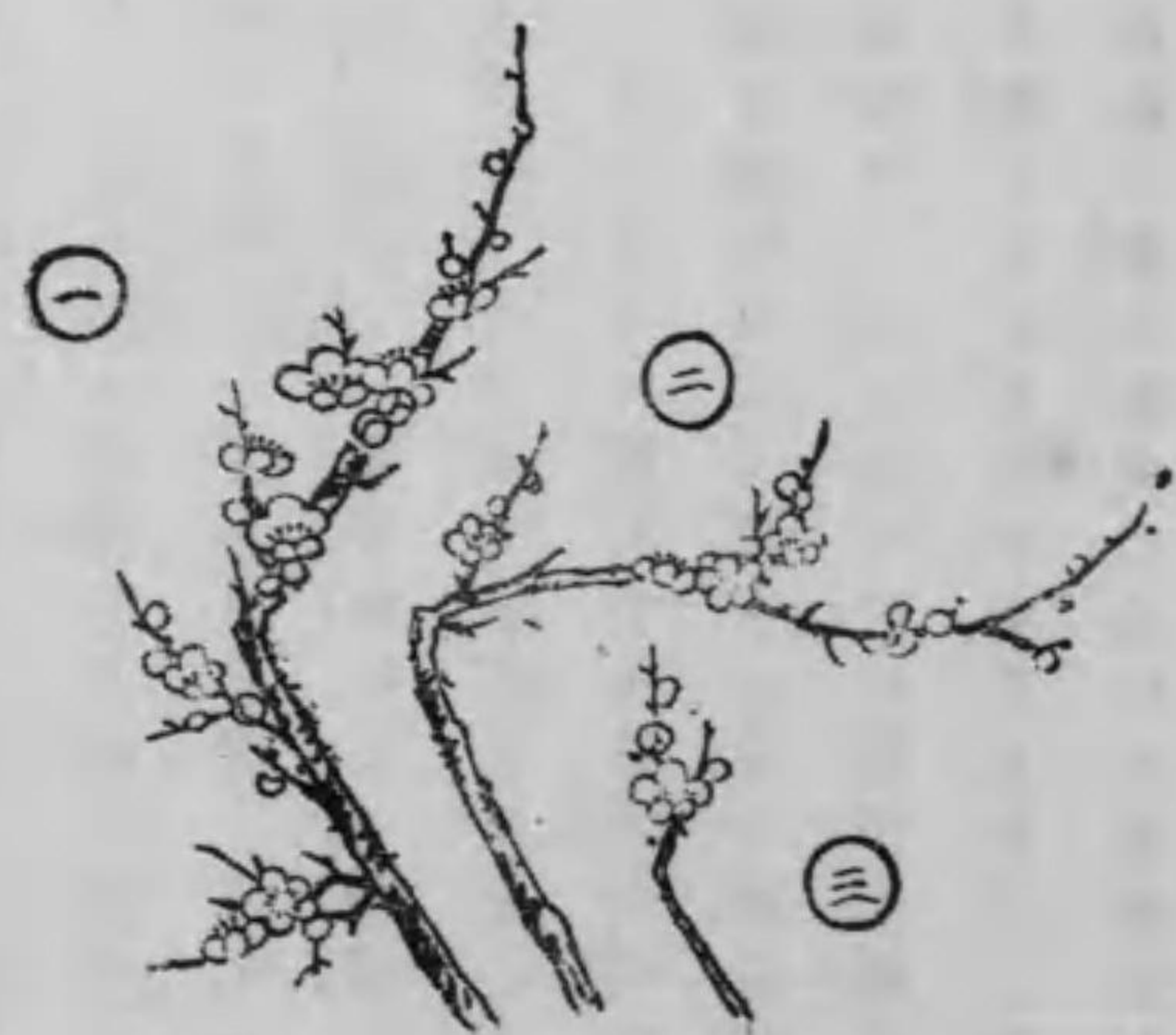
凡そ木物は一本以上五本七本九本迄をもつて活けますが、成るべく体と用は一本に備へたのがよいのであります。これに小枝を止に遣つて三才を形作るの
 で、若し都合よく体用を一本に備へたる枝のないときには、各々別の枝をもつ
 てするのであります。而して体用止の三枝をもつて活けるときは、各々扣、添
 などの備はつたるものを用ひるがよろしい。もし又これらの枝のないときには
 別の枝をもつて補ふので、或は枝葉の性の強弱によつても之を調和する爲めに
 數を増して、五本も七本も入れるのであります。

花の挿し方は流義によつて体より挿して用止を挿すもありますけれども、通
 例は先づ用を挿して夫より体止の順に挿すので、用添を入れるときは用の次に
 挿し、体受を入れるときには体より前に挿すべきものであります。併し屈曲あ
 る枝を挿すときは強ちにそれと許りに限りませぬから、左様のときには隣機應
 變にすればよろしい。今挿し方の一例を挙げますれば、第三十圖の如く拵らへ
 たる枝を挿すには、始めに㊶を入れ次に㊷を花配りの向ふ隅に入れて手前

を挿すので、活り上げたる所は第三十
 一圖のごとく、則ち主位内用流しの花
 であります。

總じて木物は一瓶の花をもつて一樹
 と見立てるので、數本を以つて挿すと
 きは水際の足が交叉しないやう、美麗
 に並行してゐなければなりません。又
 古木を遣ふときは木を正面に顯はして
 添枝はその後より入れ、正面をあざや
 かにして一葉たりとも是を見切るもの
 あれば取り去らねばなりません。他の草木を會釋ふときも同じく正面を美麗に
 して木の幹を隠くさぬやう、又應合ひの足本をも正しく見へる様に入れなけれ
 ばなりません。應合ひの足本の見へぬときは、さながら寄り木などのやうにて、

圖 十 三 第



第三十一



百五十八
插花には忌むこと
あります。

草物は大体一瓶の
花をもつて、一叢生
ひ茂つた株の如くに
見なすので、その一
叢の中にて一際高く
立ち伸びたるを心と
見立て、三才の格を

作るのであります。物に依りその出生の本性に随がつて、多少挿方の相違が
あります。譬へば萩、薄などのやうに、澤山叢立つて生じるものは員多く賑や
かに入れるがよろしいが、女郎花、撫子の様に廣くまばらに生ずるものは、餘
り大株に入れるものではありませぬ。大菊などは一本二本宛つ入れるものであ

りますが、莖細くして員多く入れるものは五七本宛つ一纏めにして入れるので、
始めは大体の格好を見繕ふて挿し、根本を留めてから枝を矯め或は切り透して
姿を調へるのであります。

羽衣草、小菊、下野、女郎花、桔梗等は段取りに活けるものであります。こ
れらは其出生に應じ本性に随ふたる挿方なのでありますから、其外のものとい
へども是等に類するものは皆同様に入れてよろしい。段取りの活方といふは、
數本宛つ一纏めとして末を揃へ、是を一段二段と段をつけて入れるので、三段
より九段迄も巧者に任せて活けるのであります。三段といふは三枝のこと、五
段七段九段といふも皆枝數のことでありまして、則ち挿花の言葉では七枝遣ふ
を七段の花形といふのであります。先づ五段の入れ方は用と用添、体と体受に
止の五枝で、即ち体に二段用に二段止に一段でありまして、七段の入方は体に三
段用に二段止も又二段で、九段となれば体用止各々三段宛つ入れるのでありま
す。木賊蘭物の類も又段取りに活けるのであります。是等は皆眞の体許りで

行草の花形はありませぬ。

玉簪花、岩薔、紫苑等其花物は大体葉組の方法、次に掲ぐる葉蘭同様であります。葉は大抵十方に出るもので花は其中に生じます。紫苑には拜み葉といふて葉が向ひ合ふて出るものでありますから、用を入れるに其象を顧すので、始め三枚を組み合はせて一株に入れ、花はその後に挿すので体用止各々斯の通りであります。玉簪花などは鏡葉と云つて、体用の間に向ふから手前に向けて出生の葉を遣ふのであります。用には大葉を用ひ体に中葉を遣ひ、添には小葉を入れるので是を力葉と稱へます。境葉を遣ふて株を分け其中に花を入れるので、三葉一花五葉一花或は五葉二花、七葉二花、九葉三花迄活けるのであります。元來葉物は葉三枚に一花といふが定法で五葉一花七葉二花と遣ふが當然でありますけれども、葉大きく性強きときは葉五枚に花二つ、又葉七枚に花三本入れてもよいのであります。

胡蝶、一八、檜扇等、すべて長葉物は其挿方皆一様で、杜若など、同じやう

に葉組をするのであります。檜扇には平組と角組の二種ありますが、その他のものは皆平組ばかりであります。平組は三枚又は五枚葉を組んで用に入れ、夫より花を入れて又葉を二枚入れるので、これを追ひ葉といひます。又角組といふは始め葉を三枚か五枚入れ、其左右にも二枚宛つ組んで入れるので、花の入れ方は前のごとく、矢張り追ひ葉は二枚入れるのであります。杜若などは花を入れて次に追ひ葉を入れ、又花を入れては追ひ葉を入れるので、花は七本九本十一本其上は數を限らず、尤も奇數を用ひるのであります。

すべて花の旬には、花を高く伸び出して遣ふものであります。未だ盛んならざる時分には稍低く入れ、苔の出初めたる頃などは花を葉よりも低く活けるが相應で、時に随つて加減しなければなりません。

(四) 葉 蘭

昔より「花は生くべし葉は生けがたし。」と云ひますが誠にその通り。すべて

挿花の巧拙は葉の遣ひ方によつて分れるので、草木は何に依らず、花よりも葉をよく遣ふことが肝要であります。別けて葉物は葉遣ひが第一で、葉をさへ能くつかふたならば花は自然と趣きの調ふものであります。

凡そ挿花に用ひる草木の員数は多いけれども、春秋の時を定めず、何處如何なる土地にても得容すきものは葉蘭でありまして、又趣味の深い事も此位のものは他には無いであります。加之余の草木は或は掛花に好いとか置花に限るとか、又は体流しの花に格好であるとか留流しの花に都合がよいとかいふことがありますけれども葉蘭には左様なことはありませぬ。有りとし凡ゆる花形を活け得る而已ならず、如何なる花器にもよく移るものであります。葉蘭は葉のみを挿すもので、そして大方似よつた葉許りをもつて一葉毎に其趣き變る様に遣ふのは誠に困難なことでありますけれども、これで葉の組み合せ方を會得しよく遣ひ得たなれば、すべての草木にわたつて其葉の遣ひ方、枝の格好、花の配置に至るまで、大概自然と判つて來るもので、之をもつて總ての花形を習得

しこれに熟達すれば、余の草木は容易に活かるのであります。夫故に諸流共にこれを以つて手解きとするので、挿花の稽古には誠に便利重寶なものであります。されば其活け方は千種萬別で、之をもつて手解きをすると云へば、至つてやすいもの、様に思はれますけれども、實は非常に六ヶ敷いので、習へば習ふ程奥深く、限りなく活け悪いものであります。花二十日といつて、二十日も掛ければ花の稽古は出來るやうに云ひますが、それは只花の大体を知るのみ、道につくと云ふばかりでありまして、全く稽古を修了する譯ではありませぬ。特に葉蘭の蘊奥を極めんとなれば却々何うして、二十日が二百日掛かつても充分と云ふことは出來ぬので、これが稽古には非常な辛苦を重ねなければならぬのであります。されば難かしければ又それだけ趣味も深い譯で、その葉は誠に單純でありますけれども活け方は却つて複雑で、活ける度毎に趣きも更り、環を廻ぐるが如く津々として趣味の盡きないものであります。

却説先きにも云ふごとく、葉蘭は花器を撰ます何にてもよく移るものであり

ますから、その時候々々に應じて好みの器物を用ひるがよろしい。(四季花器の
 用捨は後章に述べます。)葉蘭許りには限りませぬが、すべて根本の細いものは
 水際の餘りに高いは宜しからぬもので、殊に細口の花器に挿すときは、一層低
 く入れなければなりません。廣口、馬盃の類に活けるときは大株の花を二株か
 三株も活け、其間に尖り葉に花を添へて入れるがよろしい。そして留には砂石
 を用ひ、三才の石を飾つて風情を添へるのであります。尙大廣口なれば天一地
 六の割りをもつて、一寸と六分明けて小石を飾るがよろしい。又茶席などにて
 小形の廣口に極く手輕に活けるには、三枚か五枚の花を入れ、別に尖り葉二本
 に花は苔と開きを二輪遣ふので、尤も花葉共に曲あることはよろしくありませ
 ぬ。或は又大中小の尖り葉を三本でもつて三才に組んで入れ、その前に一寸八
 分離れて苔と開きの二輪に、小さい尖り葉を添へて入れたのも面白いものであ
 ります。

すべて是等の挿し方は花器の大小、格好などに依ることでありますから、そ
 れらに應じて風情よく挿す様に勘考するがよろしい。斯のやうに手輕く入れた
 花は小座敷に用ひるものでありまして、廣間の床には九枚十一枚或は十五枚以
 上、大葉を随分派手に活けたのがよろしい。二間三間の座敷に花二瓶を置くと
 きは次の間に大葉の花を活け、奥の間には出生の尖り葉を入れるがよろしいの
 で、若し三瓶も置くときには奥の間に花と尖り葉、次の間に三才正しき大葉を
 入れ、三の間には之も大葉で葉數も多く思ひ切つて派手に、面白い曲花を活け
 るがよいのであります。すなはち是を眞行草三体の飾付けとは稱するのであり
 ます。

一 出性と時候

葉蘭は又馬蘭とも云ひ一ツ葉一帆青とも書きます。葉柄を高く地上に出し、
 末端に大形の葉を展く常緑草で、葉の巾の廣いのや細く長いのや、或は島葉蘭
 といつて斑入りなどの種類があります。葉蘭の生ひ立ちはじめ三枚筈のやうに
 出てその中葉が成長するので、最初から一枚生じる葉はありませぬ。若葉は大

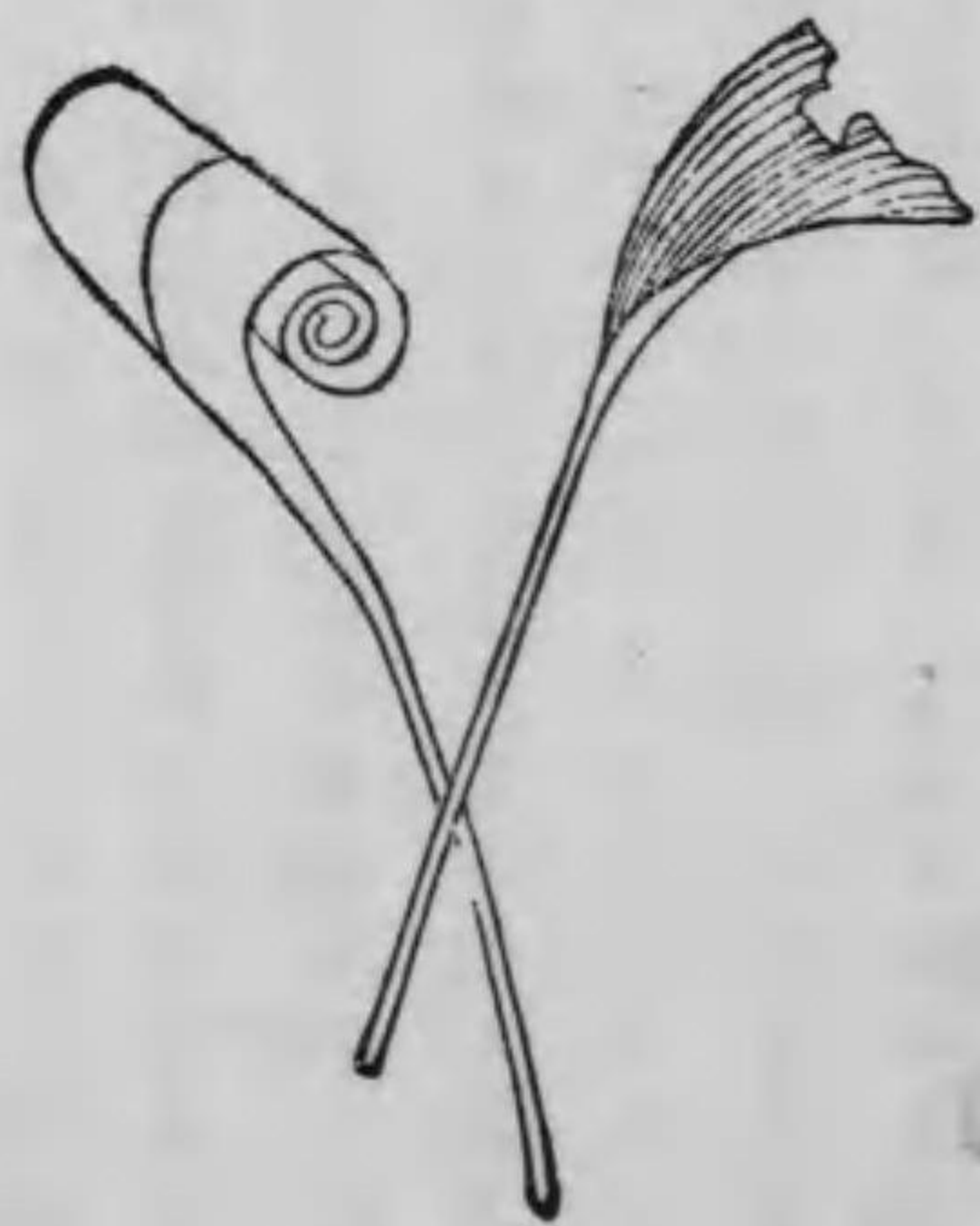
抵六月から七月末頃までに出揃ふもので、花は深紫色で壺の様な形をなし、地面に附着して四五月の頃に咲きます。されば此の頃が則ち葉蘭の旬でありまして、自然の性を愛して花に活けるには此の節をもつて第一とします。随がつてこの時候には一種活けに限り、決して余の草花を應合ふことはならぬのであります。

偕て葉蘭はこれを其親條から左右に分けて見ますと、必らず一方が巾廣くして一方は狭く、則ち陰陽備はるものであります。されば花に活けるときは体も用も止も、又日表の葉も日裏を出す葉も、すべて巾の狭い方を手前にして用ひるが法でありまして、主位客位の葉はこれによつて分れるのであります。体には大葉を用ひ用には中葉を又止には小葉を用ひて三段の性を愛し、受は体よりも小さく添の葉は用より稍や小形の葉を遣ふので、員は何程多くとも大小交互に用ひなければなりません。七枚を活けるときは体、用、止、各々二枚宛つて、体受の葉を除き他は皆日表の葉を遣ひます。即ち体受のみ日裏を出して入れるの

で、これと背合せに体用の間に稍低く日表を出して入れたるを界葉と云ひます。此の界葉を以つて株を分つので、一瓶の花にして二株の組方なのであります。九枚十一枚では留の間にも界葉を入れて三株に組み、十三枚十五枚も挿すときは四枚も界葉を遣つて五株に組むので、葉數に随ひ多く界葉を入れて澤山株を増して組むのであります。

或は枯葉、巻葉を交へて活けることもありすが、これらは時候に依つて用捨しなればなりません。枯葉といふも全たく枯れ果てたる葉のことではなく、折れ或は切られたる葉の小口が枯れて、第三十二圖の如き形容となりたるものであります。もし都合よきものゝなきときは、好き程に葉を撈り小口を焼いて、枯れたる風情に作りても

圖二十三第



よろしい。則ち界葉には多くこれを用ひるので、冬の候のものであります故爾余の期節には用ひず、四月より八月頃迄は花咲き若葉の出る時分でありませぬ。全たく用ひることはなりませぬ。これを用ひるときは全体の葉數に應じて、十枚か十五枚に一枚くらの割合ひで、三十枚五十枚も活けるとときと雖も尙五枚より多く入れることはならぬのであります。

卷葉は蜘蛛の糸に引き掛つて全たく伸びず、巻きからんだる形容を活けるので、これは夏より秋の中旬にかけて遣ふことでありますから、その余はなるべく用ひないがよろしい。巻き様は葉先より指先にて矯めつゝ堅く巻いて、兩の掌にて靜かに揉むやうにするので、或は火箸を少し暖めてこれに巻き付け、掌らで揉めば一層よく僻のつくものであります。

又葉數多く挿すときは、巻き葉を入れることもあります、併しこれは前の卷葉とは全然別種のものでありまして、第三十二圖の如き形ではありませぬ。これは体に入れる葉で云はば体の添へ葉でありまして、その名稱が紛らはしきを

もつて之を抱へ葉ともいふのであります。葉の一方を少しく堅に巻いて花の向ふ或は手前を巻き抱へるやうに挿すので、向ふに入れたるときは高く、手前に入れるときは低いがよろしい。巻き方は三四月は左旋にまき、五月に至つては右旋左旋と交へて遣ふので、六月以後はすべて左旋に巻くものと心得るがよろしい。但しこれは葉蘭に限らず、葉物はいづれも斯の通りにするものであります。

葉蘭は三枚、五枚、七枚より數入れと云ひて三十枚五十枚も入れ、或は葉姓よきものは伎倆次第にて百枚も百五十枚も入れることが出来るので、すべて葉數は奇數を用ひるのであります。稽古の順序を云へば、最始は表葉の体の五枚より主位、客位の花を交代に練習しつゝ七枚九枚十一枚と次第に進み、二十三枚か二十五枚迄も習へばすべて葉の遣ひ方は譯りますから其上は隨意とし、次には用流しの稽古にかゝるのであります。これも又以前のごとく五枚七枚と云ふ順に十五枚か十七枚迄も遣りますと、大抵會得することが出来ますから又次